本庄市郷土叢書第７集

本庄市の地名②

－児玉地域編－

本庄市教育委員会

本庄市郷土叢書第７集

本庄市の地名②

－児玉地域編－

2018

本庄市教育委員会

序

昨年度、本庄市郷土叢書シリーズの第６集として『本庄市の地名①－本庄地域編－』を刊行いたしましたところ、大変ご好評をいただき、うれしく思っています。

さて、今回は、第６集でも予告しましたが、「本庄市の地名」の後編、「児玉地域編」となります。

「本庄地域編」の序文でも触れましたが、私たち一人ひとりに名前があるように、土地にも場所ごとに様々な名前が付いています。金屋や秋山のような旧大字の下に、普段あまり馴染みのない「小字」と呼ばれる地名がたくさん付いています。これらの意味や成り立ちを調べていくと、当時のその場所の地形や風景、さらには人々の生活までもが浮かび上がってきます。

特に児玉地域は、平坦な本庄地域に比べ、山間部が多く、起伏が激しいため、地形に由来する小字が多いのが特徴となっています。前編の「本庄地域編」との比較をしてみるのも、また一興かと思います。

本書が、地元への理解と愛着心を醸成し、また、教育の現場や地域の研究に携わる皆様にとって参考になれば幸いに存じます。

平成30年3月

本庄市教育委員会 教育長

勝　山　　勉

例　　言

1. 本書は、長い歴史を経て現在へと伝えられた地名についてまとめた小冊子です。地名は私たちの先祖が産みだしたもので、昔の生活と極めて密接なつながりがありました。しかし長い時間が経過する中で、地名が変化したり、或いは失われていった場合がありました。また新しく付けられる場合もありました。つまり地名一つ一つが、その土地の時の流れ、歴史を示していることになります。

2. 本書は、前集である第６集の「本庄地域編」に続く第７集の「児玉地域編」です。

3. 本書では、児玉地域の地名について概観し、小字・小名について解説しました。次いで、児玉地域を児玉・金屋・秋平・本泉・共和の５地区に分けて、各地区ごとに、旧大字単位で紹介しています。

4. 本書では、古い地名を記録するために、江戸時代の古文書や明治時代に作成された行政文書等を参照しました。江戸時代の文書では、地区によっては史料が残されていない場合も多くあって、全ての旧大字から記録できたわけではありません。

5. 本庄市は、過去に何度も大きな土地区画の変更が行われています。古くは条里制の施行であり、戦時中の児玉飛行場の造成、近年では圃場整備事業や土地区画整理事業、さらに工業団地の整備などが行われています。また八高線や上越新幹線の開通、さらに関越自動車道の開通（インターチェンジの設置）もあり、地名への影響は大きなものがありました。本書では、このような出来事によって地名が大きく変化し、忘れ去られた地名も多くあるため、失われた地名を記録していく必要性があることから、わかる範囲で地名の起こりや、地名の持つ意味なども含めて記録しました。

6. 本書では、市内の小字に注目し、かつて児玉町史の編さん過程で作成された「児玉町字切図」をもとに解説しています。そのため概ね昭和 60 年代以前の地名について解説しています。

7. 本書では、江戸時代の小名などは、史料（検地帳や名寄帳等の古文書）をもとにそのまま収録したため、仮名や変体仮名で記載されたものはそのまま収録しています。また本文と挿図の地名の表記も元の資料によって異なる場合が見られます。

8. 本文に収録した小字名については、原則として明治期に作成された地誌類に収録された地名を基本として収録しています。そのため現在使用されている小字名とは漢字の相違や、カタカナとひらがなの使用の違いが見られます。

9. 地名の読みは、難解なものはルビを付しましたが、読み方の不明のものはそのままとしました。また地元で古くから呼んでいる呼び名と、漢字表記したときの現在の読み方が異なる場合が見られますが、本書では両方の読みを紹介しています。さらに使用する漢字も昔と異なる場合がありますので、その場合は本文中で説明しています。
（例、鍛冶町－鍛治町、下町－シモチョウ・シモマチ、塩谷－シオノヤ・シオヤなど）

10. 参考文献は巻末に付しました。

11. 本書の編集は、教育委員会文化財保護課が行い、執筆は野口泰宣が担当しました。

12. 本書の刊行にあたり、多くの方々からご助言・ご協力を賜りました。ここに御礼申し上げます。

目　　次

序

例　言

目　次

1　本庄市の地名の概要 …… 1

（1）地名の変遷 …… 1

（2）小名（字）・小字について …… 2

（3）児玉地域の集落の地名、小名・小字の種類と特徴…… 3

2　児玉地域の地区別（旧大字別）の地名概説…… 5

（1）児玉地区…… 5

児玉町八幡山、児玉町児玉

（2）金屋地区…… 11

児玉町金屋、児玉町保木野、児玉町田端、児玉町長沖、
児玉町塩谷、児玉町飯倉、児玉町宮内、児玉町高柳

（3）秋平地区…… 26

児玉町秋山、児玉町小平

（4）本泉地区…… 32

児玉町太駄、児玉町元田、児玉町河内、児玉町稲沢

（5）共和地区…… 42

児玉町蛭川、児玉町下真下、児玉町上真下、児玉町共栄、
児玉町吉田林、児玉町入浅見、児玉町下浅見、児玉町高関

3　おわりに…… 60

参考文献

本庄市児玉地域の地名

1　本庄市の地名の概要

（1）地名の変遷

図1 本庄市地域割図

本庄市の地名の変遷については、すでに本書第6集で解説しました。本書では児玉地域(図1)に関係することについて簡単に触れておきます。

地名の起こりや由緒について、その発祥は極めて古く定かではありませんが、児玉の地名は武蔵国に児玉郡が置かれたことに始まります。さらに児玉郡内に「振太、岡太、黄田、太井」の4郷があったことが『和名類聚抄』(以下、『和名抄』と略す)に見えます。この内、「黄田郷」については市内栄1丁目より発掘調査で郡名の入った紡錘車が出土して、それに「草田郷」と彫られていることから、誤字であろうといわれています。また、古代末期頃に児玉郡内に所在した児玉庄という荘園が立荘されました。その後、中世になって郡内に“小玉村”(児玉村)が現れます。児玉の地名は郡名・荘園名(○○庄・○○名)・郷名・村名として中世期までに登場しています。

中世になると児玉郡内にあった4つの古代郷名が消え、各地で新たな地名が登場します。中でも児玉庄という荘園と枝松名という比較的規模の大きな「名」が登場します。枝松名については、『安保文書』と『金沢文庫文書』にその名が見えます。枝松名の中には塩谷郷と宮内郷、さらに長茎郷が含まれていました。長茎郷は長沖郷の可能性があって、そうであればいずれも児玉地域内に位置します。また「富光郷保木野村」も見え、太駄郷や蛭河郷などの郷名が文書や記録などに登場します。近世に入ると江戸幕府によって検地が実施され、一筆ごとの土地の面積や所有者が土地の支配と年貢収納のため詳細に決定されました。江戸時代には村名から字の地名まで細かく付けられていきました。

現在の児玉郡は明治29年(1896)に制定されたもので、それ以前は児玉郡・賀美郡・那珂郡(江戸時代は那賀郡)の3郡にわかれていました。この中で児玉郡の範囲は現在の本庄市(秋平地区を除く)と神川町(丹荘地区を除く)・美里町(東児玉地区)でした。さらに本庄市には那珂郡の一部(秋平地区)が含まれています。本書で扱う児玉地域は旧児玉郡と旧那珂郡にまたがる児玉・金屋・本泉・秋平・共和の5地区をいいます。

市域では一部が那珂郡に属していましたので触れます。『和名抄』によれば、那珂郡は那珂・中沢・弘紀・水保の4郷が記録されています。このうち中沢郷と弘紀郷は中世においても中沢郷・広木郷の名称が使われており、広木は現在の美里町広木で、中沢は児玉町秋山に「字甲中沢」と「字乙中沢」として残っています。中世の史料で「中沢郷秋山村」と「広木郷秋山村」と書かれたものがあり、この両郷は美里町北西部から本庄市の秋平地区にあった郷で、本市との関係の深い地域でした。

江戸時代以降、児玉地域でも村名や字が付けられて使用されてきましたが、明治に入ってすぐに、秋山村と風洞分が合併して秋山村に、上稲沢村と中稲沢村と下稲沢村の3村が合併して稲沢村になりました。明治22年(1889)の合併では児玉町と八幡山町が児玉町になり、金屋村・長沖村・

高柳村・飯倉村・塩谷村・宮内村が合併して金屋村に、秋山村と小平村が合併して秋平村に、太駄村・河内村・元田村・稲沢村が合併して本泉村になりました。蛭川村・今井村・高関村・入浅見村・下浅見村・下真下村は合併で共和村となりました。この時に合併しなかった田端村と保木野村は２ケ村組合となり、明治 33 年 (1900) に金屋村に合併し、吉田林村と上真下村も同様に組合村となり、共和村に合併しました。次いで共和地区が昭和 18 年 (1943) に陸軍児玉飛行場の造成により集落の移動が行われたことで、地区の北部の小字が大きく変化しました。一部の小字が消滅し、面積が縮小し区画が変更されています。これにより大字も共栄 (小字南共和) が生まれています。さらに大きな変化があったのは昭和 30 年 (1955) の町村合併で、この合併により児玉町・金屋村・本泉村・秋平村・共和村は児玉町になりました。この際に共和村は一部を分離し、北共和と今井地区が本庄市に編入しています。昭和 29 年 (1954) の本庄市の合併によりそれぞれ五つの旧村名は正式には消えてしまいましたが、地区名 (図２) として、或いは小学校や保育所の名前等に残り、一部は現在も使用されています。

図２ 本庄市区割図

平成 18 年 (2006) １月 10 日に、本庄市と児玉町が合併し、新しい本庄市が誕生しましたが、これに伴って住所表記は、本庄市大字栗崎の場合、大字が取れて本庄市栗崎となりました。児玉地域では、児玉郡児玉町大字児玉の場合は、本庄市児玉町児玉となりました。郡名と大字がなくなり市名の次に児玉町 (こだまちょう) が付されたのです。

（２）小名（字）・小字について

小名・字は江戸時代の集落や耕地の一筆ごとの名前です。江戸幕府が年貢賦課のために土地の一筆ごとに地名を付したことでかなりの数の小名・字が生まれました。これは検地帳や名寄帳等の土地関係文書により確認できます。小名・字はそれぞれの土地を区別できればよいため、かなり大雑把な名前が付けられています。村ごとに付けられたため、同じ地名が市内各所で多く見られます。明治になって地租改正の関係で小字が整備されると、江戸時代から使われた小名や字はかなりの数が整理されました。例えば明治 10 年 (1877) の『河内村地誌材料草稿』によると、小字「新屋敷」には、「長畑、前ノ下、新敷添、千葉」の４字が含まれています。

児玉地域の旧大字名と小字の数は次の通りで、カッコ内が小字の数です。

児玉 (51)・八幡山 (12)・金屋 (43)・高柳 (37)・長沖 (９)・保木野 (21)・田端 (16)・塩谷 (55)・飯倉 (68)・宮内 (37)・秋山 (64)・小平 (65)・太駄 (64)・元田 (９)・河内 (58)・稲沢 (54)・吉田林 (43)・蛭川 (31)・高関 (17)・入浅見 (31)・下浅見 (31)・上真下 (43)・下真下 (25)・児玉町共栄 (２)

(※本叢書第６集では児玉地域の小字数を 869 としたが、その後、再調査の結果、消滅したものを含めて 17 字増加した。これは共和地区の飛行場の建設や圃場整備の実施等に伴い消滅した小字の存在が新たに確認されたため)

児玉地域には 22 の旧大字があります。これは本庄市全体の旧大字数が 53 なので、面積に比較して大字数は若干少なめです。逆に小字数は 886 あって、市域全体で 1344 ありますから、小字の割合はかなり多くなっています。ですから整理される前の小名の数は相当数あったものと思われます。

小字の数についてもう少し触れると、特に山地部の多い旧大字に数が多いことに気付きます。

中でも塩谷・飯倉・秋山・小平・太駄・河内・稲沢で50以上を数えます。金屋・秋平・本泉地区が該当し、いずれも山地を抱える地域です。数が多い理由は面積が広いこともあります。

児玉地域を地区別にとらえ、旧大字単位で小字を確認したところ、多くの小名・字が確認できました。確認できた範囲内で小名について簡単な説明を付しました。

小字についても、近年の区画整理や圃場整備等により消滅した小字もあります。市街地部では住居表示の施行により小字が消えています。

（3）児玉地域の集落の地名、小名・小字の名前の種類と特徴

児玉地域は地形的に北部が平地で中部が丘陵地、南部が山地、そして地域の中央を小山川（旧身馴川）が流れ、それに注ぐ支流の数も多いなど、極めて様々な地形が見られるため、それによって生まれた地名も多くあるように見受けられます。また児玉の市街地を除いて各地区には複数の集落が出来ており、集落単位の地名（廓名）がある場合が多く見られます。また小名や小字は色々な種類があって、児玉地域の代表的な小名・小字について見ていきます。なお、本来の意味と漢字表記が必ずしも一致せずに当て字を用いている場合もありますが、以下に代表的なものを紹介します。

①集落（廓名）の地名。人家が集中している所の地名（カッコ内は旧大字名）

長浜町(八幡山)・連雀町・本児玉・新宿・上町・生野(児玉)、倉林・西金屋・中組・梅原(金屋)、南・東・稲荷山・上野山・世々木・山崎・樫の木(飯倉)、下宮内・上宮内(宮内)、塚原・中沢・中通・台(秋山)、石木沢・椚林・大沢・根岸(小平)、迎・北・小塚・八殿谷・沢戸・久保・西南・平沢・殿谷戸・阿久戸(太駄)、日影・間瀬・寺山・勝沢・新屋敷・下勝沢・神子沢(河内)、東・川北・西・東廓(蛭川)、八幡方・河北・中内而・前方(上真下)、前屋敷(下浅見)、東廓・西廓(高関)、東廓・西廓・北廓・南廓(蛭川)、内手(下真下・入浅見)、宇知手(吉田林)、内手畑・後内手(秋山)

②方位に関係する地名。同じ地名が各地に見られる(カッコ内は旧大字名)

北(塩谷・飯倉・吉田林・下浅見)、西(金屋・吉田林)、東(秋山・上真下・下真下・吉田林)、南(金屋・飯倉・高柳・秋山・上真下・下浅見)。方位に田畑がついた場合は、北田(八幡山・吉田林)、南田(児玉)、東田(蛭川)。草原など「原」がつく場合には地形が平坦地であることが要件となります。北原(田端・下真下)、南原(児玉)、西原(塩谷・保木野・高関)。なお、「上中下」がついた地名もあります。なお、方位のついた地名は丘陵部から平地部に多く、地域の南部の本泉地区や秋平地区ではほとんど見られなくなります。

河内の神子沢付近

③自然や地形に関係する地名(カッコ内は旧大字名)

条里地帯の蛭川北部で、条里区画が洪水で押し流された一段低い箇所に「久保田」の地名が残っています。これは本庄地域の利根川沿岸部にもよく見られる地名で、洪水で乱流した痕跡が残されている地域によく見られます。また児玉には「賀家ノ上」という地名があり、これは「崖」を意味していると思われます。金屋の「舞台」は平地上に舞台のような高まりのある地形を意味しているのでしょう。小字や小名ではないのですが、八幡山の「円良岡」はやはり平地上の高まりのある場所で、地元では台山と呼ばれています。この他にも保木野や塩谷の三角や、塩谷の大平、飯倉の久保地、宮内の大谷、秋山の扇形などは地形から付いた地名と思われます。

児玉地域は南部が山地となっているため、谷や小山川の支流も多く、「沢」のついた地名が多いのも特徴となっています。

李沢・菖蒲沢・室沢（飯倉）、鳴子沢（宮内）、一ノ沢・二ノ沢・菖蒲沢（高柳）、甲（乙）中沢（秋山）、石木沢・船ヶ沢・柿木沢・布ノ沢・蛭沢・梅木沢・大沢・中沢（小平）、鳶沢・橋倉沢・勝沢・神子沢・一ノ沢・中ノ沢・高沢（河内）、清水沢・柳沢・平沢・滝沢・甘葉沢・ウツギ沢（太駄）

④宗教や信仰に関係する地名

児玉の法養寺。消滅した小名に「法養寺前・法養寺東・法養寺西・法養寺南」がありました。

児玉地域だけでなく市内各地に見られます。神社やお堂、民間信仰に関係した地名です。

桃花木（とうかき）、下八幡、山王、観音山、稲荷木、稲荷山、御霊（ごりょう）、諏訪宮、諏訪山、諏訪入、上諏訪、諏訪平、諏訪木、十二天、天神前、天神下、天神山、天神耕地、熊野木、神明前、山ノ神、和尚山、庚塚、大明神、雷電林、雷電山、八幡山、宮本、宮後、宮ノ入、宮ノ下、新宮、若宮、不動、神山、神西、八坂、金仏、真鏡寺、西光寺、養福寺、新寺、寺平、千日堂、千手堂、薬師堂、地蔵堂、堂前、堂ノ西、南堂、辻堂、甲（乙）志路堂、堂前淵、堂平、坊田、鳥居田、神明、山王山、金鑽西、金鑽林、金佐奈、飯玉東、伊勢畠、伊勢谷、聖天平、行人塚、上庚塚、下庚塚、念仏塚（ねんぶつづか）

⑤歴史に関係する地名。歴史的な出来事に関係する地名

城や館に関係するものに「堀の内・城下・城内・城西・甲（乙）城下・城ノ内」、城下町に関係するものに「鍛冶町（かじちょう）・連雀町」、古墳に関係するものとして「上久美塚・塚原・塚間・大塚下・大塚」など、古代の人名に関するものとして「徳万谷附・采女塚・将軍塚」、古代・中世史に関係するものには「美加登（みかど）・平氏ノ宮・源氏屋敷・在家・陣街道」など、製鉄に関係するものには「金草・金草入・金仏」などがあります。

⑥動植物の名前の付いた地名

秋山古墳群にある庚申塚古墳

雀ノ宮、葦池、古林、倉林、菖蒲沢、柚久保、鷹取、一本松、熊ノ木、鳥場、亀池、柿木下、樫ノ木、椿入、杉山、榎平、竹ノ平、皀角原、梅木沢、楮久保、雲雀沢、蛭沢、篠竹沢、萩平、鳶沢、栗木作、黒樫、烏平、松平、畝杉、笹原、甘葉沢、芹田、藤池、柿島、松場

⑦生活に関係する地名

農業に関係する地名に「池」の名前や用水に関係する「樋越（といごし）」などがあります。

池には、「大池・思池・池内・池の脇・葦池・藤池・女池・白地池・上池の下・亀池・手箱池」など、用水関係では「甲下ノ堰・新堀・堀端・樋越・一ノ堰」、条里関連では「柳町・深町」、道路や橋では「大道・中道・道上・道下・枇杷橋・山路・陣街道・中通・南街道」などがあります。

以上のように、小名・字には様々なものがありますが、以降は市内の児玉地域の地名について解説します。なお、ここでいう児玉地域とは、平成 18 年 (2006) の市町合併以前の旧児玉町地域を指しています。

2　児玉地域の地区別（旧大字別）地名概説

（1）児玉地区

児玉地区の由来は明治 22 年 (1889) の八幡山町と児玉町の合併で児玉町が誕生したことによります。以後、昭和 30 年 (1955) の合併で、児玉町と金屋村・秋平村・本泉村が合併して児玉町となりました。その後、昭和 32 年 (1957) に共和村が合併し、この２回の合併で旧村名が消滅することになりました。しかしながら、現在も行政区分上旧５町村の名前が地区名として使用されており、児玉地区（図３）も旧児玉町の範囲を示す呼び名として使用されています。

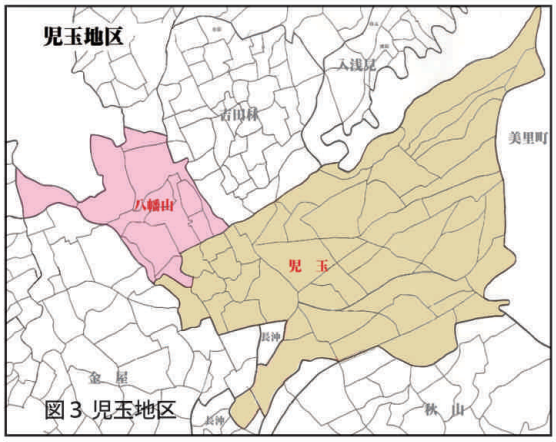


図３ 児玉地区

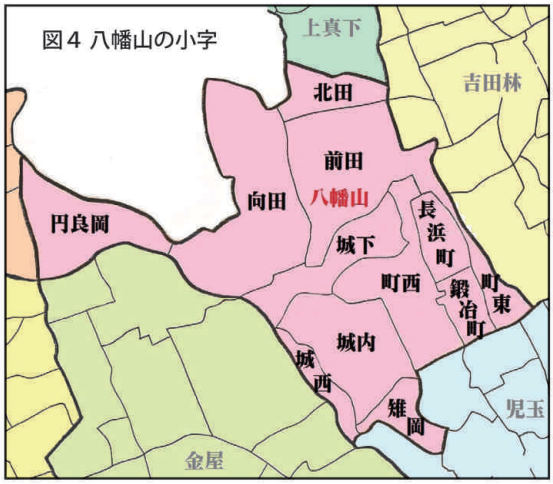


図４ 八幡山の小字

【児玉町八幡山】

八幡山の由来は八幡神社の旧鎮座地としてついたものと思われます。現在、八幡神社は児玉にあって、神社が移動したことを窺わせます。八幡山の地名がいつ頃から使われるようになったかは神社の創立に関連しますのではっきりとはしません。八幡神社の創立伝承は源義家の奥州合戦にまで遡りますが正確なことはわかっていません。残された史料や記録に拠れば、戦国時代から江戸時代初頭の文書に「八幡山」の地名が登場しますので、この時期までには八幡山の地名が使われていたものと思われます。

八幡山の北部は条里水田地帯で、この地の開発が極めて早かったことは間違いありません。条里水田地帯には九郷用水が流れ、この用水の成立には児玉党が係わった可能性もあるでしょう。

八幡山の地は共和地帯へ広がる児玉条里の西端にあたり、この地にあって九郷用水上流部を押さえた児玉党がいてもおかしくありません。八幡山の地は児玉党の本拠地として考えると理想的な位置にあるように思われます。

中世前半頃までは児玉党の影響下にあったと思われる八幡山は、次第に丹党安保氏の勢力下に置かれます。応永３年 (1396) の日光市輪王寺所蔵の大般若経奥書に、「武蔵国児玉郡円岡・・丹治光泰」、「丹治朝臣光泰・安保左衛門三郎号円岡」とあり、この「円岡」は小字に見える「円良岡」のことと思われます。

八幡山の地は交通上の要衝にあたり、八幡山の東側を南北に鎌倉街道上道が通過します。そのため中世後期には関東管領山内上杉氏が雉岡城を築いています。その後、小田原北条（後北条）氏の支配下に入り、天正 18 年 (1590) の豊臣氏の小田原北条氏攻めにより雉岡城も前田利家・上杉景勝の軍勢によって落城しました。小田原北条氏の滅亡後、関東に徳川家康が入ると、家康は雉岡城（この頃には八幡山城）に家臣の松平清宗・家清父子を配置します。清宗は八幡山城と城下町の整備を行ったようですが、まもなく没して子の家清が跡を継ぎました。家清は慶長６年 (1601) に三河国吉田へ転封となり、八幡山城は以後、廃城となりました。

近世における八幡山の状況は松平氏が10年ほどで三河国に移動し、以後は旗本の戸田氏が領主になりました。八幡山は一時期八幡山村を称しましたが、すぐに八幡山町を称するようになり、近世を通じて八幡山町と称しています。領主の旗本戸田氏は八幡山町に陣屋を設け在地支配をしましたが、後に江戸に屋敷をもらい住居を江戸に移しています。今でも陣屋の入口にあった家を「じんやぐち」と呼んでいます。

江戸時代の八幡山と児玉は家並みが連続していて、あたかも一町のごとくでしたが、八幡山は北が長浜町、南が鍛冶町(鍛冶小路ともいう)の二町よりなっています。

町の中央を南北に中山道脇往還川越道が通り、戦国時代よりの六斎市が引き続き開かれ、3・10の付く日に市が開かれていました。

《小字名》

北田、前田、町東、鍛冶町、長浜町、町西、雉岡、城内、城西、城下、向田、円良岡

《昔の小名》

○近世文書に見られる小名・字（寛永2年(1625)「八幡山町廻畑方名寄帳」・寛永6年(1629)「八幡山村畑方開キ帳」・寛永16年(1639)「八幡山城之内畑方ひらき帳」・寛永20年(1643)「八幡山畑方ひらき帳」）には次のようなものがあります。

大名小字路出口、観音後、しろノ内（城の内）、本丸、二ノ丸、三の丸、ほうきくるわ（伯耆廓）、つぶら岡（円良岡）、つづけばし（続ケ橋）、吉田林さかい（境）、みね（峯）、といのくち、立河後、真下境、田嶋、屋敷の後、ぶたい（舞台）、かぬませきそえ（鹿沼堰添）、城のきた（北）、城のほり（堀）、城の西、城の内みなみ（南）、つほのうち（坪の内）、町の出口、ほりのうち（堀の内）、かち町（鍛冶町）、しろ水いけ（白水池）、ちまかいけのはた、内蔵西城の内、堀だし、田端原、二ノ丸出口、じゆもく屋敷にし、城之西ほり、志りゆく屋敷、城之にし北、ほり田田たおし、くわんをんめんとなり(観音免隣)、本丸ほり(本丸堀)、二ノ丸藪隠里、城之西はうきくるわ、志ろ水いけこまち石、田はた原西

《主な小字の由来》

長浜町　八幡山でも比較的古い地名の一つと思われます。直接の地名の由来は不明ですが、八幡山町の母体となった地名及び集落・町名とも言えます。

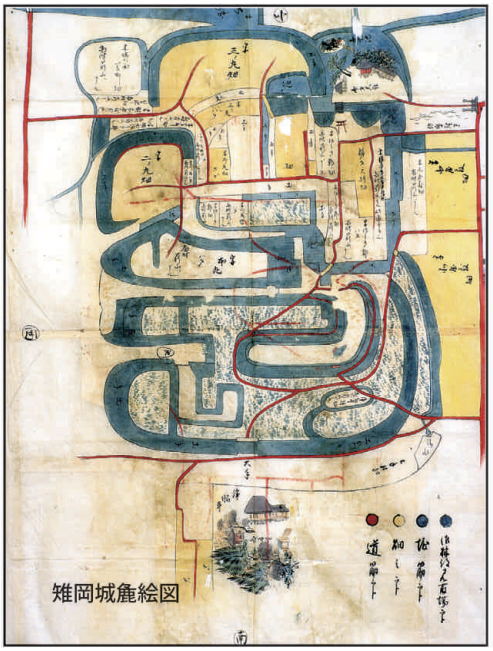
鍛冶町・鍛冶小路　八幡山城の城下町の整備により城主が意図的に鍛冶職人を集めて住まわせた町名。城が廃止された後も八幡山町南部に数軒の鍛冶職人の家が確認できます。鍛冶町は古くは鍛冶小路と言っていたようで、この場合の小路は町割りの中で城址方面へと続く一本の通路に鍛冶職人を住まわせたことから生じたものと思われ、次第に付近一帯が鍛冶町として町名となったのでしょう。なお、現在の自治会名としては、「鍛治」の字を使用しています。

大名小路　この地名も城下町としての町割りに起因する地名。ここには八幡山藩松平氏の家臣の家が配置されていたと思われます。

雉岡・雉が岡　現在の浄眼寺と城跡の小丘陵の地名。雉の生息する岡だったのでしょう。

円良岡　八幡山の北部水田地帯の一画で、水田地帯の中央に「台山」と呼ばれる高まりのある場所があります。同じ字名が隣町八日市地内にもあります。これは当初は同一の字であった

ものが、何らかの事情で分裂したのでしょう。八幡山の円良岡は児玉郡に属し、八日市の円良岡は賀美郡に属していました。本来はともに児玉郡に属していたと思われます。円良岡は古い地名の１つで、応永３年 (1396) の日光市輪王寺所蔵の大般若経の奥書には「武蔵国児玉郡円岡」とあります。


雉岡城麁絵図

本丸・二ノ丸・三ノ丸・伯耆廓・馬出し　八幡山城 (雉岡城) の縄張りを示す地名。これは古文書や雉岡城麁絵図などから検出できる地名です。

城の内・城の西・城の北　これは八幡山城が廃止されてから使用されるようになったと思われる地名で、前記の縄張りを示す地名とは性格を異にします。城跡全体を指しており土地の位置の指標となっている呼び名です。

白水池　城跡の空堀の中に設けられた池の名前。絵図にはその位置が示されていますが、現在はこの池はありません。当初より水堀の一部としてあったものか、廃城後に開墾した際に新たに空堀内に設けられた池かどうかは不明。伝説では不慮の死を遂げた母子と関係し母親の乳で池の水が白く濁りこの名が付いたとも言われます。

種池　現在、種池神社がありますが、その所在地に当たるかどうかは不明。城を構成する堀・池の１つの名前と思われますが確証はありません。

【児玉町児玉】

図５　児玉の小字

児玉は八幡山と合わせて児玉地区を構成し、市街地の北部 (八幡山) を除きその地区の大半を占めます。地区の南部は近年区画整理が進み市街地化し始めており、新しい地番表示がなされています。児玉の北側は八幡山、吉田林と接し、南端は小山川 (旧身馴川) で秋山と界し、西側は金屋と接します。東側は美里町大字沼上と接しています。

児玉の由来は先に触れました。郡名と村名とがあって特に郡名としての歴史は極めて古いものです。承安２年 (1172) の懸仏の銘文に「武州児玉称名寺善阿弥斎」と刻まれていますが、これは郡名を指しているものと思われます。村名としての児玉は、享徳６年 (1457) の『鎌倉円鎌倉寺黄梅院領知行注文』(円覚寺塔頭の黄梅院文書) に「小玉村 (児玉村)」が見えます。これが児玉が郡名や苗字などでなく村・郷名としての初出です。ま

た児玉地内にある日蓮宗寺院玉蓮寺の寺伝によれば、日蓮が幕府の罪科を被り佐渡へ流される途中、以前より日蓮に帰依していた児玉の豪族児玉時国は、日蓮を自分の館に宿泊させ、さらに日蓮が許されて帰る途次も宿泊させたといいます。さらに館の中に一庵を建て信仰し、後には館自体を寺にしたのが玉蓮寺と伝えています。墓地にある大型の板碑は児玉時国供養のものとも伝えています。この寺伝は他に何の史料もありませんが鎌倉街道と児玉の宿との関係を示している事柄です。

玉蓮寺の板碑

室町時代から戦国時代になると児玉の地は山内上杉氏と長尾氏の支配下に置かれます。上杉氏は雉岡城を築き、家臣の夏目豊後守定基を置いて守らせたと言われていますが、この地が軍事上の拠点となっていたのは、それ以前の南北朝期頃であったようです。その後、戦国時代の前半には長尾景春が主家の上杉家に背き児玉で反旗を翻す事件が起き、児玉付近は度々争乱の場となっています。さらに小田原北条氏の武蔵進攻により関東管領の山内上杉氏が滅亡し、小田原城の北条氏康と甲斐国の武田信玄、越後国の上杉謙信との争奪の場となりましたが、天正期頃になると児玉地域も次第に安定期に入りました。

天正 18 年 (1590) になると豊臣氏の小田原北条氏攻めにより雉岡城は落城し、農民は戦乱を避けて山中などに避難しましたが、前田利家は児玉の豪族久米氏を通じて農民に還住を命じています (久米文書)。その後、徳川家康が関東に入り、江戸を本拠に定めると、すぐさま家康は関東各地に家臣を配置しました。雉岡城はこの頃には八幡山城と呼ばれ、家康は八幡山城主として松平清宗・家清父子を配置します。清宗は八幡山城と城下町の整備を行ったようで、児玉の有力者久米・平野・根岸氏などに児玉新宿に関する文書を発給しましたが、松平清宗はまもなく亡くなり、子の家清が城主となりこれを引き継ぎました。家清は慶長 6 年 (1601) に三河国吉田へ転封となり、八幡山城 (雉岡城) は廃城となります。その後、児玉の領主は山口但馬守となります。山口氏も短期間で代わり、以後は旗本の相給地となりました。松平氏の八幡山城入城や城下町の整備に関連して八幡神社や玉蔵寺・玉蓮寺などの移転が行われたものと思われます。八幡神社はその名が示すように元は八幡山の地にあったようで、玉蔵寺も山号を雉岡山といい、八幡山にあったのでしょう。玉蓮寺は寺伝に児玉時国の館を寺にしたと言われますが、本来は生野山南側にあったものと思われます。それは久米屋敷といわれる児玉の豪族久米氏の元屋敷が生野山にあったとも言われ、児玉時国が久米氏の祖とも伝えるからです。児玉の新町にある古刹の實相寺も生野より移転したとの寺伝 (『実相寺誌』) があります。児玉の市街地には八幡神社の他に玉蓮寺・玉蔵寺・實相寺・法養寺・東福院・光徳寺・龍台院と寺院が多くあり (他に信覚寺がありますが、幕末の慶応期創立)、児玉に隣接する金屋村の天龍寺も八幡山城主横地氏が飯倉村から移転させたという寺伝があり、あたかも寺町を形成するかのようです。

近世における児玉は当初児玉村を称しており、この頃の状況は松平氏のあと山口氏と続き、以後は旗本の柳生・戸田・花房・松前・平井氏の五給地となり、玉蔵寺も御朱印地寺院となりました。その後は柳生氏分が山下氏を経て大名の黒田氏の領分となり、他は変わらずに明治期に至っています。なお、児玉村も文政期頃からは児玉町を称しました。

鎌倉街道上杉道（児玉本町地内）

児玉の市街地の形成は、戦国時代末期から近世の初頭に児玉地区を中心として新たな町割りが行われたことから始まったようです。生野山の南面の地域から本児玉 (現在の本町辺り) の地に集落をなしていた農民が、八幡山の町並みと連続するように新たに土地を与えられて集住しました。これにより八幡山と児玉の町並みの原型が整ったようです。さらに鎌倉街道の上杉道沿いに児玉新宿(あらじゅく)が形成されています。八幡山町と同様に戦国時代からの六斎市が引き続き開かれ、児玉では５・８の付く日に開かれていました。町並みの整備に伴い上町(かみちょう)・新宿(あらじゅく)・本児玉(もとこだま)・下町・連雀町(れんじゃくちょう)・中町の呼び名が生まれました。また中山道脇往還の宿場町、継ぎ立て場としても重要で、伝馬役(てんまやく)は八幡山町と隔月輪番(かくげつりんばん)で勤めていました。なお、江戸時代における村高は 1290 石余りでした。

明治期以降の変遷(へんせん)は八幡山町と同様で、明治 22 年 (1889) に八幡山町と合併し、さらに昭和 30 年と 32 年の合併で周辺の村を合併して児玉町を形成しました。近代の児玉町はこの地方の産業の中心地として栄え、特に秩父地方の絹や綿製品の集積地としても賑(にぎ)わっていました。

なお、八幡山と同様に児玉町も市街地部に町名が形成され、江戸時代の小名としても、児玉上町、下町、連雀町の名が史料に見られます。明治以降に小字が設定されたときにも、上記の町名以外に、新町、仲町、本町が小字として設定され、逆に下町が小字名としては消えています。

《小字名》

上町、仲町、新町、連雀町、本町、町後南、学校、養福壽 (寺)、飯玉、賀家(が け)ノ上、桃花木(とうかき)、南原、桂居(はしらおり)、中島、下川原、上中島、下中島、水渕(すいふち)、大久保、下八幡、柳原、楮原(こうぞはら)、飯米場(はんまいば)、大道、中道 (仲道)、上久美塚、中久美塚、下久美塚、大道南、大道北、大天白(だいてんぱく)、思池、大池、南田、久保田、久保田下、北田、白可牙(しろかげ)、下生野、上生野、山王、清水、東並木、内並木、外並木、町後東(まちうしろひがし)、町後西、雀ノ宮、上川原、身馴川(みなれがわ)、十条西中島

※圃場整備事業によって北田・久保田・南田の小字は消滅しました。なお、雀ノ宮と十条西中島は飛地でしょうか。

《昔の小名》

○近世文書に見られる小名（寛永 21 年（1644）『武州八幡山児玉村畑方御帳(はたがたおんちょう)』・同年『児玉村かわらひらき帳』）には次のようなものがあります。

本児玉、児玉上町、下町、連雀町、新田、新宿、峯、峯の前、裏町、鍛冶屋敷、中嶋、並木、町裏、清水端、児玉裏中町、児玉東裏、外並木、並木山王前、中道浜井場、山王、本児玉町後、水淵上、法養寺、法養寺前、法養寺西、法養寺東、法養寺南、生野屋敷、生野、生野前、生野根、生野東、生野前東、下八幡、大天伯、生野山、思池、生野塚、久美塚、小宮地、町頭、欠下(がけのした)、欠上(がけのうえ)、川原、玉蓮寺前、児玉玉蓮寺裏、古城の西山、稲荷の前、薬師前、薬師下、薬師堂、とふか前、中堂、飯玉、久保田、南原、南のたい、南道上、南田、十条前川原、下田、新町、新町うら、大久保、川原崎、生野がけの上、地蔵堂川くぼ、なまのはた、なまの川はた、

《飛地の小名》

熊野堂（八日市）、新井山、雀宮

《主な小字・小名の由来》

本児玉(もとこだま)　児玉の市街地の南側付近をいいます。現在は本町(もとまち)と呼ばれていますが、これは明治以降の名称で、江戸時代を通じて本児玉と史料には記されています。児玉の市街地は八幡山城の城下町形成のため作られた町で、かつての児玉村の中心地はこの本児玉から生野付近であったものと思われます。本児玉の名称もその名残りでしょうか。

新宿と新町　新宿とは中世において本宿に対して新たに政治的に形成された宿をいいます。特に戦国時代において後北条氏は古い閉鎖的な集落を打破し、新たに経済的に発展の望める市場経済をめざし、商人を集め一つの宿を各地に作っています。児玉町の新宿も後北条氏により形成されたものと思われます。後北条氏の滅亡後、八幡山城主となった松平清宗は児玉の有力者久米・平野・根岸氏に対し、児玉新宿や児玉郷にやって来る商人を保護し、税の取り立てをしないよう命じています。現在、この新宿の名称は失われていますが、現在の町名の新町のことと思われます。新町の實相寺境内にある寛政と文化の庚申塔にも新宿講中と彫られています。

鎌倉街道上杉道（児玉新町地内）

連雀町　この町名も城下町に多く見られるもので、一般的には商人をまとめて住まわせたことに由来します。なお、近世末期の古文書に「連尺町」とあります。

下八幡　下八幡神社があったことによりついた地名。かつて身馴川（現小山川）の洪水の時に下八幡神社が流されかけたところ、住民がかついでこの難を避けたとも言われています。現在、この下八幡神社は八幡神社の境内に祀られています。神社は移転しましたが地名はもとのまま残されたものと思われます。

養福寺　養福寿とも書き、読みは“ヨウフクジ”といいます。かつて養福寺という寺があったことに由来すると思われますが、この寺の存在については不明です。

大道　児玉町から深谷方面への街道をさす地名。児玉町下町を通り小山川を渡って美里町沼上へ通じます。

山王と飯玉　山王は生野山西端に山王社があったことに由来し、飯玉も長沖にある飯玉神社に由来します。飯玉の字名は児玉・長沖両方にあります。

久美塚　児玉町の下町にかつて存在した古墳群との関係の地名と思われます。明治期の地籍図を見ると下町一帯に相当数の古墳が確認できますが、現在はほとんどが消滅しています。

大池と思池　児玉町の下町一帯はかつて身馴川の氾濫原で水田耕作に適さない場所が多く、一部の清水が沸き出す谷の部分に水田が開かれましたが大半は畑や陸田です。江戸時代も前半には大規模な新田開発が行われ多くの耕地が生まれましたが、同時にため池も設けられたものと思われます。児玉には大池・思池の他にも瀬戸池や山王の清水池、水淵の清水池などがありました。

生野　生野山は大久保山（薊山）とともに平地に残る残丘で、歴史的にも文書・記録史料に散見されます。南北朝の動乱から戦国時代までに数度合戦場となったことが知られています。

大天白　東日本の各地にある天白信仰に関係する地名と思われます。詳細は不明ですが、古老の話では付近に祠があったともいわれます。大天白神を祀る神社があったことに由来する地名でしょうか。なお埼玉県羽生市には大天白神社があります。

灯籠坂　これは小字名ではなく、通称・俗称的な呼び名です。児玉町を通る鎌倉街道（近世以降は中山道脇往還の川越道）にあった坂をいいます。身馴川を渡り児玉町の本町地内に差しかかる手前にかつて坂があり、この坂の手前の道の両側に石の灯籠が建てられていたことに因むといいます。現在は坂も灯籠も失われており、この呼び名も忘れ去られています（『児玉の民話と伝承』）。

《その他の地名》

さいこ谷・三方久保・すわ久保・薬師久保　延宝4年(1676)の『身馴川川除裁許絵図』に、生野山が描かれ、この中に幾筋かの小規模な谷(窪地)があります。西側から順に記載されています。

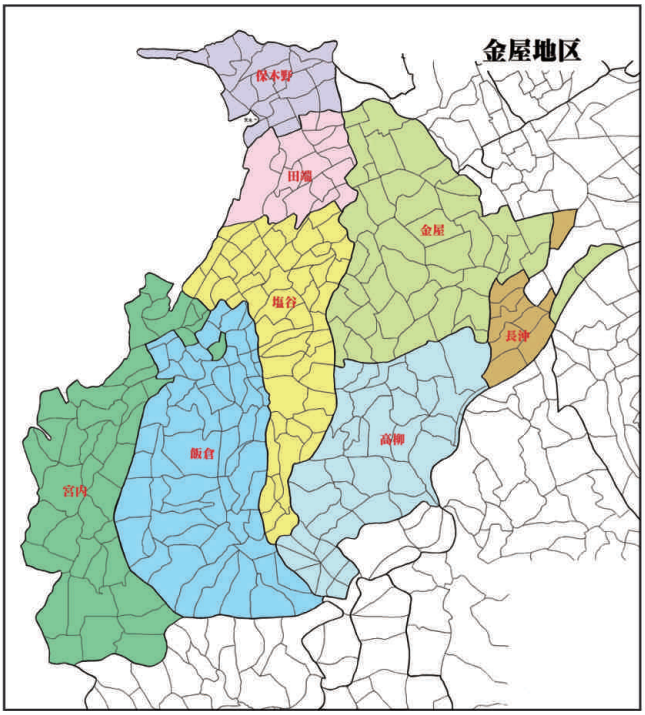
どうこ渕　同じ絵図に見える名前で、身馴川(現小山川)の対岸(南側)の児玉村の飛地で、旧秋山川との合流点の下流部分が「どうこ渕」と書かれています。

一口坂　深谷道と呼ばれた、児玉の仲町から生野山の南側を東に進み美里町の沼上に通じる道路の途中にある坂の名前。沼上から児玉に向かう途中身馴川を越すことになりますが、児玉側が河岸段丘になっていて、ここにあった坂の名前です。

かまくら道　鎌倉街道の支道と思われます。起点は連雀町と本児玉(本町)の境付近で、そこから西に進み、長沖の飯玉神社付近で小平道に合流しています。

ちちぶ道　児玉新町付近で鎌倉街道上杉道から分岐して南進し、第一金屋付近で小平道を分岐し、秩父道は南西の方向に進み本泉方面に至ります。

上宿渡し　児玉と美里町沼上の境を流れる身馴川にあった渡し。現在の上宿橋付近。渡しがあったことについて他に史料がありませんが、『児玉の民話と伝説』の註に見えます。



(2)金屋地区

金屋地区の由来は「地名の変遷」の項で触れた様に、明治22年(1889)の合併で新しく金屋村が誕生したことにより始まり、昭和30年(1955)の合併で児玉町に含まれると村名としては消えましたが、地区名として現在も使用されています。

【児玉町金屋】

金屋は地区の東端に位置していますが地区の中心をなしています。金屋は北部が条里水田地帯で米作が盛んで、東部は児玉町の市街地の一部になっており商店街や工場などが進出しています。南部から西部にかけては丘陵地帯となっていて畑作が多く、また養蚕の盛んな地域でした。現在は、行政単位で第一金屋・第二金屋・第三金屋に分けられています。

金屋の名の由来は金屋鋳物師の存在により起こったものです。その起源は不明ながら、残された作品から室町時代後半にまで遡ると思われます。長享2年(1488)銘の懸仏が最も古く、延徳2年(1490)の懸仏、天文12年(1543)と天文14年(1545)の懸仏、天正15年(1587)の鰐口等が知られています(『武蔵史料銘記集』)。これらの史料に「武州児玉郡金屋村」・「武州児玉金屋」等と彫られています。遅くとも室町時代の後半には金屋鋳物師が活躍していることから、この頃には金屋の地名が生まれており、この地に鋳物師が住む以前には金屋の地名は存在しなかったと思われます。鎌倉時代中期には枝松・枝松久恒・富光郷・富光郷保木野村の地名が見られ、南北朝期には枝松名内塩谷郷・枝松名内宮内郷・枝松名内長茎郷(長沖か?)・飯倉郷などの金屋周辺地域の地名は文書記録史料に見られますが、金屋の地名は史料上に見えず、室町時代も後半か

ら戦国時代になってから散見されるようになるのも金屋の地名の由来が鋳物師の発生に起因していることを示しています。中世前半には金屋は塩谷郷に含まれていた可能性が高いと思われます。金屋にある多くの寺院や個人墓地内には室町から戦国時代にかけての石造物が多く残り、中世の遺跡もあるので中世後半には特にこの地域の繁栄が想像されます。

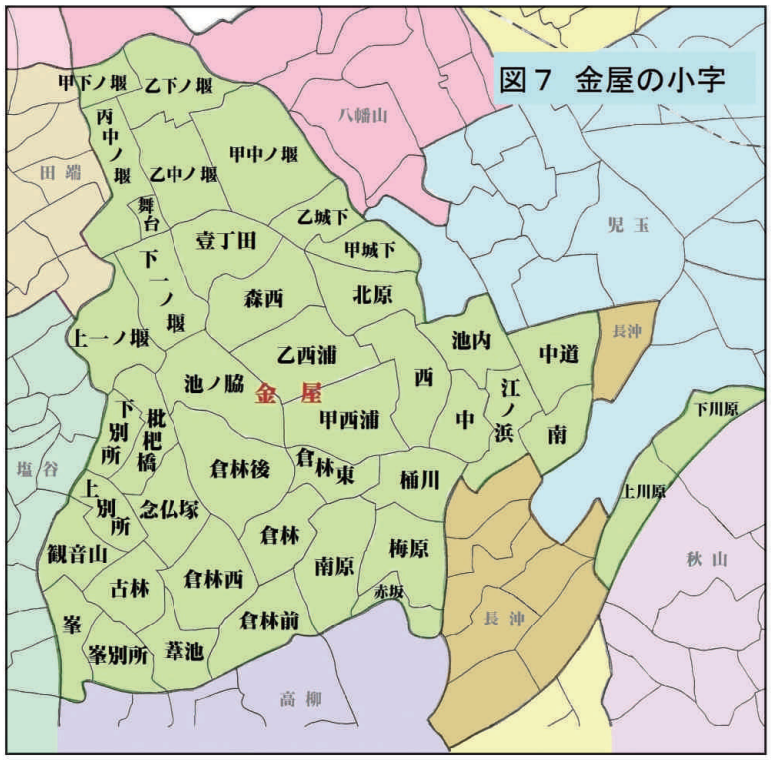


図７　金屋の小字

中世には児玉党児玉氏の所領が金屋地内にあったことが貞和７年 (1351) の児玉家氏申状 (児玉文書) に見えます。これには「武蔵国児玉郡池屋・同宿在家半分」と記載されています。この「池屋」については現在の小字にはありませんが、『新編武蔵風土記稿』(以下、『風土記稿』と略す) 金屋村の項に小名として「池谷」を載せているので、この事と思われます。また応永 27 年 (1420) の関東公方足利持氏寄進状写 (『集古文書』) には「梅原村」の記載があり、金屋の南部の小字に梅原があるのでそのことでしょう。金屋はある時期には村名をまだ称せずに、幾つかの小村の合体であったのかも知れません。また既に述べて来たように室町時代の後半頃には金屋鋳物師の活躍が知られ、戦国時代には金屋は西上州を領する武田氏と武蔵を北上する後北条氏との勢力の接点となっていました。金屋の地は武田氏の家臣で御嶽城主長井氏の支配下にあったようで、天正８年 (1580) には政実判物 (『武州文書』・『飯塚文書』) で長井政実は金屋鋳物師倉林越後守に金谷 (金屋) の地を安堵し、配下の飯塚氏にも金屋の地を宛てがっています。また同年には後北条氏 (鉢形城主北条氏邦) も金屋の淵龍寺に禁制を発給し、金屋の医師の粕尾伊予に金屋の内の土地を宛てがうなど情勢は混沌としています。しかしながら、武田氏の衰退に伴い、次第に後北条氏の支配下に組み込まれていきました。天正 18 年 (1590) に豊臣秀吉の小田原北条氏攻めが始まると、八幡山城 (雉岡城) も落城し、北条氏の勢力は一掃されました。この際、八幡山城攻めの勢力は北国勢 (上杉・前田・真田氏の軍勢) が中心で、生野山に陣を張ったといいます。金屋の真福寺にあった阿弥陀堂の本尊阿弥陀如来座像の銘文によれば、越後国の上杉景勝勢が生野山に数日陣を張り、この際に本尊が退転したと記してあります。同年には徳川家康が関東に入り、各地に家臣を配置します。八幡山城主には松平清宗・家清父子を置き、金屋も松平氏の領地になりました。この経緯については八幡山・児玉の項で触れたので略します。近世の金屋は金屋村と称し、松平氏が慶長６年 (1601) に三河国に移動すると、大名山口但馬守の所領になり、さらに元和２年 (1616) には旗本４氏 (戸田・花房・安藤・松前氏) に分給されました。金屋村は村高 980 石余りでした。

明治以降は、明治 22 年 (1889) に塩谷・高柳・飯倉・長沖・宮内村と合併し金屋村を結成し、明治 25 年 (1892) には保木野・田端村の組合を合併し、さらに昭和 30 年 (1955) に児玉町・秋平村・本泉村と合併し児玉町となり、さらに平成 18 年 (2006) １月に本庄市と児玉町の合併に伴い本庄市の行政区の１つとなっています。

《小字名》

中道、南、江ノ浜、池内、西、中、梅原、南原、桶川、倉林、倉林前、倉林後、倉林東、倉林西、赤坂、葦池、峯、峯別所、古林、甲西浦、乙西浦、観音山、上別所、下別所、枇杷橋、念仏塚、池脇(池ノ脇)、上一ノ堰、下一ノ堰、甲城下、乙城下、甲中ノ堰、乙中ノ堰、甲下ノ堰、乙下ノ堰、丙中ノ堰、上川原、下川原、舞台、馬打(飛地)、北原、森西、壹丁田

金屋(第三金屋)の風景。遠方に淵龍寺を望む。

《昔の小名・字》

倉林、梅原、池ノ谷、江浜、仲井、馬打、別所

《主な小字の由来》

倉林　金屋地区には倉林を苗字とする家が多くあって、地名にも倉林があります。共に「クラハヤシ」と濁らずに発音します。倉林家は元々鋳物師の家であり、室町時代末期より金屋鋳物師の作品が残されています。金屋の鋳物師は倉林姓のほかに中林姓がおり、中世の時代より鋳物を行っていました。

池ノ谷　池ノ谷は『風土記稿』児玉郡金屋村の項に見える小名で、現在この地名は失われており、字切図にも記載されていませんが、児玉党児玉氏の本貫地でした。既に触れたように山口県毛利博物館所蔵の『児玉文書』にその地名が見られます。この文書は児玉党の系譜を引き、安芸国(広島県)に移住した児玉弥五郎家氏が所領の保証を願い出たものです。文書に見える「児玉郡池屋」とは「池ノ谷」のことと思われますが、具体的にどこの地なのかは不明です。おそらくは小字の梅原付近から発する小川が城山付近まで延びる細い谷に水田があるので、この付近が池ノ谷にあたるのではないかと思われます。

梅原　梅原も古い地名で、応永27年(1420)の関東公方足利持氏寄進状写(『集古文書』)に「武蔵国児玉郡梅原村」と見え、これが梅原の初見です。梅原は金屋の中に含まれる地域ですが、金屋は比較的に広い区域ですので、先の池ノ谷と同様に村として当時は分かれていたかも知れません。梅原の由来は定かではありませんが、長沖古墳群が広く分布しているので古墳に関係する「埋め原」の意味が転化した地名かも知れません。なお、梅原には伝説として、この地に井戸を掘り、地中に桶を伏せて八幡山の雉岡城まで水を送ったという話があります。そこにはその時の井戸と、水を貯めたという池跡が残されています。

甲乙城下　八幡山城(雉岡城)に隣接した地名。一部は城域に含まれています。

一ノ堰・中ノ堰・下ノ堰　金屋地区北部の水田地帯に残る地名で、この一帯の水田は条里水田で歴史が極めて古いものです。おそらくは条里水田に用水を引き入れるための取水堰に因んだ地名と思われます。

桶川　ここ一帯に深い谷が入っていて、ここより北側に谷は続き、八幡山の雉岡城跡の西側に続いています。地元に伝わる伝説では、戦国時代に雉岡城主は、桶川の西隣の梅原の地に井戸を掘らせ、そこより雉岡城まで底に穴の空いた桶を地中に伏せて城まで水を送ったと言われています。この伝説のある井戸が梅原に残されています。この伝説の史実は全く不明で、付近から桶が掘り出されたこともありませんが、「桶川」の地名はこの伝説と何らかの関係があるかも知れません。

【児玉町保木野】

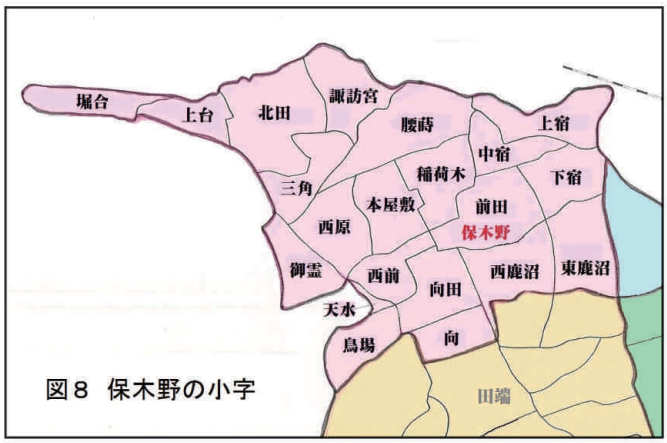


図８　保木野の小字

保木野は地区の北端に位置しています。概ね平地であり集落は保木野の北側中央にあって南部に金屋条里水田が広がっています。現在はこの条里地帯も圃場整備が行われており、かつての土地区画とは変化しています。北側に九郷用水が東西に流れていて、保木野の水田もこの用水を用いています。地名の由来は不明ですが、かなり古い地名であることは間違いありません。南部から東部にかけては早くから開かれて水田地帯になっていますが、北部から西部にかけては神川町の八日市から新里方面に畑が広がっています。昔は自然林や荒地・野原などであった土地が、次第に開墾されていったものと思われます。保木野の地名の由来も、広がっていた野原とそこに生える自然林から起こったのかも知れません。保木野の「ほき」は植物がよく茂る (ほきる) 様をあらわした言葉の意味があるでしょうか。歴史的に保木野の地名が初めて登場するのは文永 11 年 (1274) の『金沢文庫文書』で、「同 (富光郷) 保木野村」と書かれています。この史料は文永 11 年に即位した後宇多天皇が、この年の 11 月に大嘗会を開催する費用を調達するために、一部の費用を武蔵国衙に児玉郡から集めさせた際のものと考えられています。なお保木野村が含まれたと思われる富光郷については現在のところ不明となっています。戦国時代になると永禄 6 年 (1563) に後北条氏が用土新左衛門に「保木野之村」を与えています。この段階では後北条氏は秩父郡内に盛んに勢力を進出させていますが、前年には御獄城 (神川町二の宮) の長井氏もまだ後北条氏に服していなかったので、保木野周辺部が北条氏の勢力下に入って間もなくのことになります。その後、次第に保木野周辺地域は後北条氏の安定した支配下に入って行きますが、天正 18 年 (1590) の豊臣秀吉の小田原攻めで後北条氏が滅亡すると、徳川家康が関東の主となり江戸城を本拠に定めています。児玉郡内も徳川氏の支配下に入り保木野村もその直轄領となりました。関ヶ原の合戦から大坂の陣が終わり、徳川氏の支配が確立すると保木野村は旗本の永嶋氏に与えられ、その知行地となりました。そして明治期まで変わらず永島氏の支配が続きました。江戸時代に盲目の国学者として有名な塙保己一は、保木野村の郷士荻野家の出身です。寅之助 (保己一の幼名) は幼ころに病気のため失明し、後に江戸へ出て修業を積み塙氏の姓を継ぎ、『群書類従』の編さんをはじめとして多くの業績を残しています。保己一の名は中国の故事と保木野の地名から考えたものです。

塙保己一旧宅

江戸時代の保木野村は南部から西部にかけて条里水田が広がっており、用水は九郷用水を用いていました。九郷用水 22 ケ村組合に属し、村内に猿楽堰と薬師堂堰の 2 ケ所の用水堰を設け、水田へ取水し下流組合村への配水を行っていました。

明治以降の変遷は明治 22 年 (1889) に田端村と二ケ村組合を結成し、その後、明治 25 年 (1892) になって金屋村に合併し、その大字となっています。その後は金屋村の変遷と同じです。

《小字名》

上宿、中宿、下宿、前田、稲荷木、東鹿沼、西鹿沼、腰蒔、本屋敷、西原、諏訪宮、北田、堀合、上台、三角、御霊、天水、鳥場、西前、向田、向

《昔の小名・字》

かぬま、こしまき、むかひ、三かど、五反田、西ノ前、鳥場

《主な小字の由来》

上宿・中宿・下宿　保木野の北東部にある地名で、保木野の集落の中心の地名。ここと本屋敷周辺に人家が集中しています。

赤根川　かつて赤根川は地区内の宮内の山中に発して、飯倉・塩谷を流れ塩谷から北流して金屋の北部をかすめて、保木野の南東部を流れて神川町八日市地内で九郷用水に合流していました。現在は河川改修が行われ、塩谷から北流せずに東部へ流すように川を掘削して、八幡山から金屋方面へ南流していた女堀川と合流させています。名称も赤根川の名前は無くなり女堀川になっています。

鬼石道　神川町八日市方面から保木野の北部を東西に通過して群馬県の旧鬼石町 (現藤岡市) 方面に通じる道の呼び名です。

稲荷木　稲荷神社が鎮座していたことにより付いた地名です。

御霊　御霊神社が鎮座していたことから付いた地名。現在は御霊社と稲荷社が合祀され、御霊稲荷神社となりました。

鹿沼　名前の由来は不明ですが、赤根川に用水取水堰の鹿沼堰がありました。

堀合　九郷用水堀に関係する地名です。

【児玉町田端】

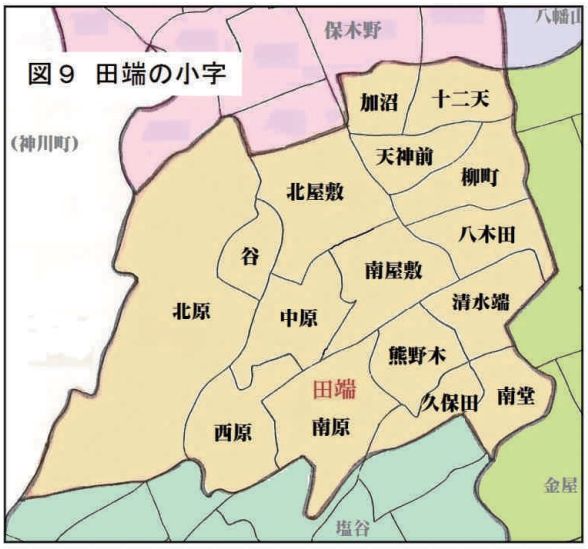


図９　田端の小字

田端は金屋地区に属し、地区の北部寄りに位置しています。北は保木野、東は金屋、西は神川町新里、南は塩谷と境を接しています。集落は田端の中央から西側にあり、南部から東部にかけて水田が広がっています。水田の用水はかつて赤根川の水を用いていました。

田端の地名は歴史的にはほとんど見られず、『風土記稿』でも「元和年中の開墾と伝へたれどその拠はなし」と載せて、伝承では江戸時代初期に開墾されて村をなしたといいますが、その証拠はないと編者は見ています。おそらくは中世以前には集落が存在しましたが、戦乱の世に一旦廃絶し、戦国末期から近世初頭にかけて再び開墾されたものと思われます。その間は保木野か塩谷の一部として認識されていたものでしょうか。田端の西部から塩谷にかけては緩い丘陵が続きますが、その中で字中原には田中供養地と呼ばれる中世の板碑が大量に掘り出された場所があり、かつて開墾により 50 枚余りの板碑が出土し、同時に五輪塔や宝篋印塔の部品も出土しました。さらに平成３年 (1991) の埋蔵文化財発掘調査によって中原遺跡と呼ぶ隣接地からほぼ同数の板碑が出土し、五輪塔や宝篋印塔の部品も

出土しました(『田端中原遺跡』)。このことからこの地域が中世の墓地と考えられています。田端の中央東側寄りの宅地と水田の境付近に方形をした区画があり、中世の館跡ではないかと考えられていますが、目立った遺構は見られません。

江戸時代における領主については、旗本戸田氏以降、八幡山と同様な変遷をたどっています。また、明治以降の変遷は保木野と同様です。

《小字名》

十二天、加沼(鹿沼)、天神前、柳町、八木田、清水端、北屋敷、南屋敷、南堂、久保田、谷、北原、西原、中原、南原、熊野木

《主な小字の由来》

十二天(じゅうにてん)　かつてここに十二天社が鎮座していました。字名もおそらくはそれから来ているものと思われます。現在十二天社は、十二神社と名を変えて字中原に移転しており、地名だけが残っています。

柳町(やなぎまち)　条里水田に関係する地名です。

北屋敷(きたやしき)**・南屋敷**　田端の集落が集まっている地域です。

南堂(みなみどう)　村の南端に位置し、かつてお堂が所在したものと思われます。

北原・西原・中原・南原　村の西半分一帯にある地名で、微高地(びこうち)で昔は原野だったものと思われます。開墾(かいこん)が進み次第に畑地になりました。中原では開墾の際に大量の板碑が出土し、田中供養地として祀られていました。また隣接地が発掘調査された際にも大量の板碑や五輪塔・宝篋印塔の部品が出土し、人骨と共に出土したことから中世の墓域と考えられます。

熊野木(くまのぎ)　かつてこの地に熊野神社が祀られていたものと思われます。

図10 長沖の小字

【児玉町長沖(こだまちょうながおき)】

長沖は児玉地域のほぼ中央にあたり市街地の南側に位置します。北と東は児玉、西は金屋、南は小山川を挟(はさ)んで秋山、小平との位置関係にあります。長沖の全域がほぼ平地で、南側は小山川に面していて河川流域は北側に対して一段地面が低く、林や荒地があります。長沖は二つの区域に分離して存在し、一つは児玉地内に飛地(とびち)として存在しました。現在、長沖は地区全域が宅地と畑地で占められています。また北側と児玉地内の飛地には長沖古墳群が密集(みっしゅう)して所在します。近年、住居表示が変更され、旧小字名が消えています。

長沖の地名の起こりは不明ですが、伝承ではこの地域に入江(いりえ)があり、入江の真ん中が突き出ていたのでそれを中沖と呼び、次第に長沖になったとも伝えています。また中世の史料によれば、『安保文書(あぼもんじょ)』中、建武(けんむ)4年(1337)の武蔵国守護(むさしのくにしゅご)高重茂奉書(こうのしげもちほうしょ)には「枝松名長茎郷(えだまつなかくきごう)中院宰相中将家跡(ちゅういんさいしょうちゅうじょうけあと)」とあり、暦応(りゃくおう)3年(1340)の安保光阿(あぼこうあ)(光泰(ゆずりじょう))譲状に「同国(武蔵国)児

玉郡枝松名内長茎郷」の名前が見えます。この「長茎」が「長沖」と同じ場所かは不明ですが、可能性は高いと思われます。「枝松名」について、「名」とは古代から中世にかけて荘園や国衙領の内部を構成した基本単位で、徴税単位でした(『国史大辞典』)。その実態については不明な点が多いのですが、「枝松」とは本来人名で、土地の開発者や所有者であったかも知れません。金鑽神社の神官の名前かも知れません。それが時代と共に変質したものでしょうか。延文4年(1359)の『米良文書』にある「旦那願文」には、“武蔵国少(児)玉郡之内しをのや(塩谷)の住人ひこ五郎入道行印、又ハなかくきとも申候”とあります。これは中世において武蔵武士の熊野参詣の盛んなことを示す史料の一例ですが、児玉郡塩谷に住む塩谷彦五郎入道行印という武士が、長茎とも名乗ったと解釈できる史料です。この頃には長茎という地名があったことがわかります。その後、長茎が長沖に変わって行ったものと思われます。

長沖には長沖古墳群が所在し、児玉周辺地域の豪族の墓域になっていました。古代末期から中世(鎌倉時代)初頭頃までは児玉党塩谷氏の勢力範囲に含まれていたようですが、鎌倉時代の騒乱や、塩谷氏の西遷などにより領主は度々変わり、史料によれば中院宰相家領・安保氏領などとなったようです。戦国時代が終焉し、徳川の世になると、雉岡城主として松平家清がこの地域の領主となり、その所領を書き上げた天正19年(1591)の『武州之内御縄打取帳』が作成され、これに「金屋長興」の村名が記載されています。「長興」が「長沖」のことを示しています。この段階では長沖の地名になっています。

松平氏が三河国吉田に転封されると、長沖村は一時天領となり、享保期には大名黒田氏の領分(大名の領地になった場合は「領分」といい、旗本の領地となった場合には「知行所」と呼びます)となり、以後は明治期まで続きます。

《小字名》

道下、川原道下、川原道上、道上、村後林、村後、久保、御沢、飯玉

長沖が二つの区画に分離して所在することは先に触れましたが、小字の御沢のみが児玉地内に飛地として所在しました。

長沖の飯玉神社

《昔の小名・字》

検地帳を初めとする土地関係の近世史料が散逸しているために江戸時代における小名は検出できませんでした。

《主な小字の由来》

道上・道下　道路の上・下(かみ・しも)の意味ですが、この小字のいう道はかつての秩父道を指しています。実際に東西に通る道と同じに小字は東西に並んで所在します。北側の金屋方面から入り、飯玉神社付近を西方に曲がり、村内中央を西に進み高柳境に通っています。明治18年(1885)に秩父新道が開削されてからは、秩父新道は長沖の北側の金屋地区内で西に曲がり、長沖を通過せずに高柳方面へと通じています。

村後・村後林　本来の地名の意味は定かではありませんが、ここでいう村とは集落を意味し、集落の後ろ(北側)の地域を指しています。集落は小山川のへりと小字の村後・村後林の中央の南面した緩い斜面と平地に集まっており、旧秩父道に沿っています。集落の後ろ(北側)

は一段高くなり、金屋方面に続く台地です。ここには長沖古墳群が密集して存在しています。村後林の林の意味もおそらくは、古墳群に関連して耕作に適しない地域に生えている樹林を指す場合と、集落の屋敷林を指す場合が含まれているものと思われます。

飯玉　飯玉の由来は地内にある飯玉神社に直接由来しています。小字としては長沖地内の飯玉と、隣接する児玉地内にも飯玉の小字が残ります。

御沢　長沖の飛地で児玉地内にありました。

【児玉町塩谷】

塩谷は金屋地区のほぼ中央に位置しており、北は田端、西は飯倉、東は金屋、南は高柳と境を接しています。塩谷の南側は山地、中央は数本の谷のある丘陵地で、北側が平地となっています。なお、塩谷の北部を東西に国道 462 号線が通っています。国道に平行してさらに交差して飯倉より旧赤根川 (現在の女堀川) が流れ、東部の金屋方面へ流下しています。

塩谷の呼び名はシオヤとかシオノヤ、さらにショウノヤなどと発音しますが、歴史的に見ると昔はシオノヤと発音していたと思われます。天正 19 年 (1591) の『武州之内御縄打取帳』に「塩野屋」とあることからも、当時は「シオノヤ」と発音したことが窺えます。塩谷の地名は歴史的にも古い地名で、児玉党に塩谷氏一族がいたことからもそれが窺えます。鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』にも治承 4 年 (1180) の記事に塩谷五郎惟広の名前があり、以後も塩屋 (塩谷) 太郎家光・塩谷六郎・塩谷左衛門尉・塩谷弥四郎などが出てきます。承久 3 年 (1221) には、『承久記』に宇治川の合戦に塩谷民部大夫家経・塩谷左衛門尉家朝・塩谷六郎左衛門尉家氏の三代にわたって参戦し活躍したことが載っています。なお、塩谷の西北端部にある西光院真鏡寺は寺の周囲を堀が囲み、寺の北側には土塁も存在し、塩谷氏の館跡と考えられています。

文書史料での塩谷の地名の初見は、建武 3 年 (1336) の『安保文書』に「同国 (武蔵国) 枝名 (枝松名) 内塩谷田在家」とあります。既にこの頃から塩谷の田と在家が安保氏の所領となっていたようです。塩谷氏の一部は鎌倉時代に和田義盛の乱に一族が加担しているので、この所領はそれに関連して没収され、安保氏の所領になっていたものかも知れません。その後、暦応 3 年 (1340) の安保光阿 (光泰) の譲状にも「同国児玉郡枝松名内塩谷郷」とあります。これにより塩谷郷は枝松名に含まれる郷であることがわかります。枝松名については鎌倉時代の文永 11 年 (1274) の『金沢文庫文書』に「枝松・同久恒名」と見えています。他の安保文書からみて、枝松名は児玉郡にあって塩谷郷の他に宮内郷や長茎郷 (長沖郷) を含む規模の大きな名であったようです。塩谷郷はこの後も、延文 4 年 (1359) の『米良文書』の旦那願文に " 武蔵国少 (児) 玉郡之内しをのや (塩谷) の住人ひこ五郎入道行印、又ハなかくきとも申候 " とあります。おそらくは中世の中期頃までは塩谷郷の範囲は広く、塩谷のほか田端・金屋・長沖一帯が含まれていたのかも知れません。また享徳 27 年 (文明 10 年＝ 1478) の『安保文書』にも「武州児玉郡塩谷郷塩谷源四郎跡」とあります。塩谷郷は中世を通じて児玉党塩谷氏の本貫地であり、代々塩谷氏一族が相続しましたが、一部の地域が丹党安保氏の支配下におかれ室町時代になりました。室町時代以降になると、今までの所領関係は打ち続く戦乱のために大きく変化しており、関東管領上杉氏と家臣の長尾氏の支配下に置かれ、戦国時代には上杉・武田・後北条氏の争奪の場となっています。この争奪戦に勝ち残ったのが後北条氏ですが、それも天正 18 年 (1590) に豊臣秀吉により滅亡して、その跡には徳川氏が関東に入国しました。徳川家康は家臣の松平家清を一万石で八幡山城主としました。塩谷村も八幡山・児玉・保木野・金屋・長沖・高柳・飯倉・宮内・金鑽・新里・沼上などと共に松平氏の所領となりました。松平氏が関ヶ原合戦後に三河国吉田に転封すると、幕府は旗本の戸田氏に知行地として与え、以後は八幡山町と田端村・宮内村と同様な変遷

をたどっています。明治以降の変遷は金屋村と同様です。

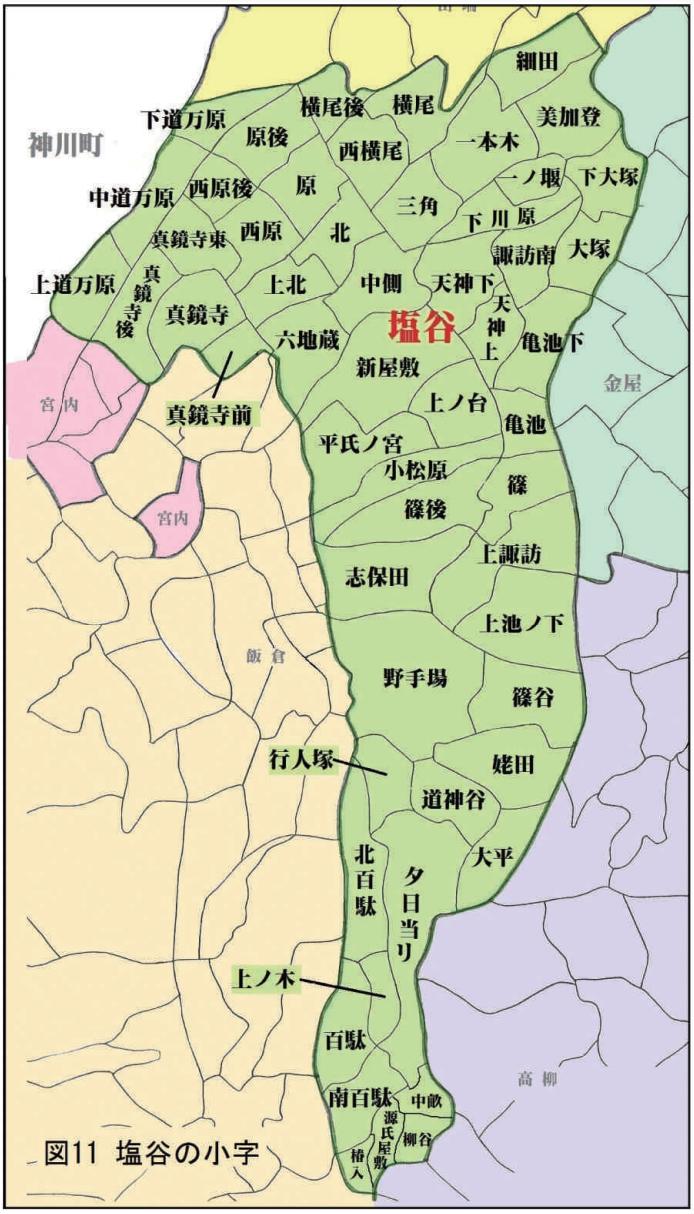


図11 塩谷の小字

《小字名》

上道万原、中道万原、下道万原、真鏡寺、真鏡寺前、真鏡寺後、真鏡寺東、六地蔵、中側、北、上北、西原、西原後、原後、原、西横尾、横尾後、横尾、細田、美加登、一ノ堰、一本木、三角、下川原、天神下、新屋敷、平氏ノ宮、上ノ台、天神上、諏訪南、下大塚、大塚、亀池下、亀池、篠、篠後、小松原、志保田、上諏訪、上池ノ下、野手場、篠谷、姥田、道神谷、大平、夕日当り、行人塚、北百駄、百駄、上ノ木、南百駄、中畝(中ウ子)、柳谷、源氏屋敷、椿入

《昔の小名・字》

かめ池、とうまん原、横尾後、横尾、塩谷、塩谷北、木田島、新京寺東、うば田、しの、北原

《主な小字の由来》

真鏡寺　天台宗寺院の真鏡寺があることから付いた地名です。

六地蔵　六地蔵があった場所を言うものと思われますが、この地名が寛永21年(1644)の文書に見えるので、この六地蔵の造立年代はそれより古いことになります。この六地蔵がどの様なものであったのかはわかりませんが、市内では6体の石仏で構成されるものは江戸時代後期のものがほとんどで、中世後期から近世初期のものと考えると重制石幢しか存在せず(完形のものは秋山風洞地区に一基のみ所在)、残っていれば極めて貴重なものといえます。

塩谷の一風景

大塚・下大塚　地名の由来は定かではありませんが、一般的には大塚とは大きな塚(古墳や供養塚・信仰のための塚)があった場所を指す場合が多く見られます。しかしながらここ一帯に古墳や塚は存在しません。かつて丘陵地における発掘調査で方形周溝墓が検出されています(『塩谷下大塚遺跡』)ので、開墾前にはある程度の盛土(墳丘)が存在した可能性もあり、その方形周溝墓の存在から付いた地名でしょうか。

平氏ノ宮　平氏ノ宮は飯倉境にあって塩谷・飯倉両方に分かれてある地名です。その由来は不

明ですが、塩谷出身の武士である児玉党塩谷氏に塩谷平五大夫家遠という者がいます。塩谷家遠は塩谷氏の祖といえる人物で、史料がないので人物像は不明ですが、『熊野那智大社文書』中の『塩谷系図(『米良文書』)』には、家遠の注記に「塩谷平五大夫平家以往死去」という記載があります。おそらく意味は平家の時代(全盛期)に死んだということと思われますが、名前に「平五」とあるように児玉党の一族ではありますが、平家の血が交じっていたことが窺えます。「大夫」とは地方における有力者を指す五位クラスの称号といわれます。家遠が塩谷郷の開発領主で平家と何らかの関係があり、それが地名に残されたのではないかと思われます。

【児玉町飯倉】

飯倉は金屋地区の西部に位置しており、縦長の形をしています。北から西は宮内と、東は塩谷、南は高柳・元田・稲沢と境を接しています。飯倉の大半は山地と谷間の谷戸田よりなっており、北部にかけて平地と丘陵地が広がっています。

飯倉地内を宮内から旧赤根川(現在の女堀川)が流れ、東部塩谷方面へ流下します。集落は赤根川の南岸に多く、支流の御厨川沿いと山崎川沿いにあります。地内の北部寄りに女堀川に沿って、国道462号線が東西に通ります。

飯倉の名は歴史的に古い地名で、『神鳳抄』という記録に「武蔵国飯倉御厨」の記載があり、さらに鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』にも源頼朝が伊勢神宮に御厨一所(武蔵国飯倉)を寄進するという記載があります。御厨とは伊勢神宮領の荘園をいう意味です。武蔵国には他に江戸(東京都芝)に飯倉の地名があり、どちらが御厨に該当するのかはっきりとしません。飯倉の地名自体は飯の倉と書くように収穫物の集散を示す地名で、飯倉村は隣町の神川町二の宮にある金鑽神社付けの郷・村であったとも言われています。金鑽神社は延喜式にもその名が見える歴史の古い神社で、それに伴い飯倉村の歴史の古さも窺えます。中世中期の『金沢文庫文書』や『安保文書』に、児玉郡内に枝松名の記載が見えますが、特に『安保文書』には枝松名宮内郷と枝松名塩谷郷があって、その中間に位置する飯倉郷の記載がありません。その理由として、この段階では飯倉がまだ一つの郷を形成しておらず、宮内か塩谷郷に含まれていたか、或いは先に述べたように飯倉郷が御厨として伊勢神宮領となっていたので枝松名に含まれなかったものかも知れません。これについては今後の研究課題です。中世も後半になると飯倉郷が史料上に登場して来ます。それは叡山文庫所蔵の経典の奥書で、永徳3年(1383)に「武州児玉郡飯倉郷阿ミタ堂庵室」の記載が見えます。その後、戦国時代になり天正18年(1590)に後北条氏が滅亡して、徳川氏が関東に入ると飯倉村は八幡山町等と同様に家康の家臣の松平家清の領分となりました。松平氏が三河国吉田に転封すると、幕府直轄領となり、

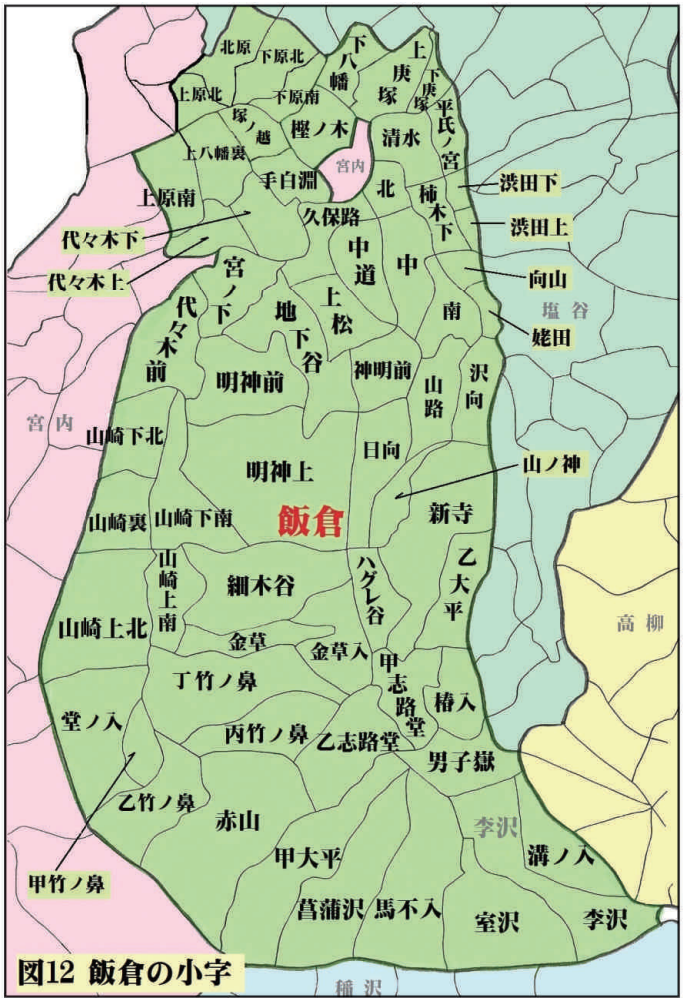


図12 飯倉の小字

後に村の一部は旗本の安藤氏が領主となり、さらに残りが大名黒田氏の領分になりました。以後、明治まで変わりませんでした。その後の変遷は金屋村と同様です。

《小字名》

下八幡、上庚塚、下庚塚、平氏ノ宮、渋田下、渋田上、柿木下、北、中(中耕地)、南(南耕地)、中道、宮ノ下、代々木上、代々木下、代々木前、清水、樫ノ木、手白淵、上八幡裏、上原北、上原南、久保路、上松、明神前、姥田、向山、神明前、地下谷、山路、沢向、日向、新寺、ハグレ谷、山ノ神、甲大平、乙大平、細木谷、金草、金草入、明神上、椿入、山崎下北、山崎下南、山崎上北、山崎上南、山崎裏、堂ノ入、甲竹ノ鼻、乙竹ノ鼻、丙竹ノ鼻、丁竹ノ鼻、志路堂、甲志路堂、乙志路堂、馬不入、菖蒲沢、男子嶽、李沢、赤山、室沢、溝ノ入、天神裏、天神下、下原北、下原南、北原、塚ノ越

《昔の小名》

よよき前(代々木前)、明神前、原、屋敷前、山崎、金草、はふ山、七まかり、志の前、てじろぶち(手白淵)、ひらき、竹花、ほそきヤツ(細木谷)、かのへ塚(庚塚)、かしの木(樫の木)、向志ぼた、上山(上野山カ)、へひ塚(蛇塚)、志とうく、新寺、白ひけ(白髪)、飯倉後、山神、とうかの前、橋下、かりやと(仮宿)、よよき(代々木)、後大平、とうの入(塔の入・堂の入)、大谷、とうまん塚、姥田、かまば、宮下、よよき川原、馬いり、馬いらす(馬不入)、ぞうとの、清水、むろ沢(室沢)

《金石文に見える小名》

南、東、稲荷山、上野山、世々木、山崎

これは庚申塔に彫られた地名で、主に集落(庚申講)のある地名と思われます。

飯倉山崎の風景

《主な小字の由来》

上庚塚・下庚塚　カネヅカ(庚塚)といいますが、古い小名にあるようにカノエヅカ(かのへ塚=庚塚)のことと思われます。国道から南に入ってすぐの御厨川に沿った付近の地名です。おそらく、庚塚は庚申塚からきた地名ですが、小字内には庚申塔は見られません。ここより少し行った小字北にある法性寺境内に多数の石仏群があり、中に庚申塔も5基見られるので、ここへ移されたものでしょうか。庚申塔の1基に南・東・稲荷山・上野山・代々木・山崎の庚申講のある集落名を刻んだものがあるので、特定の字に建てたわけではなく、やはり庚申塚に建てたものと思われます。

山崎　おそらくは地形から付いた地名でしょう。飯倉にも数本の沢があり、幾筋かの尾根があって、その先端を示す地名です。

金草・金草入　ここには金草窯跡と呼ばれる古代の窯跡群が存在します。武蔵国分寺に納めた瓦をはじめ他の寺院の瓦などが生産されていました。

《その他の地名》

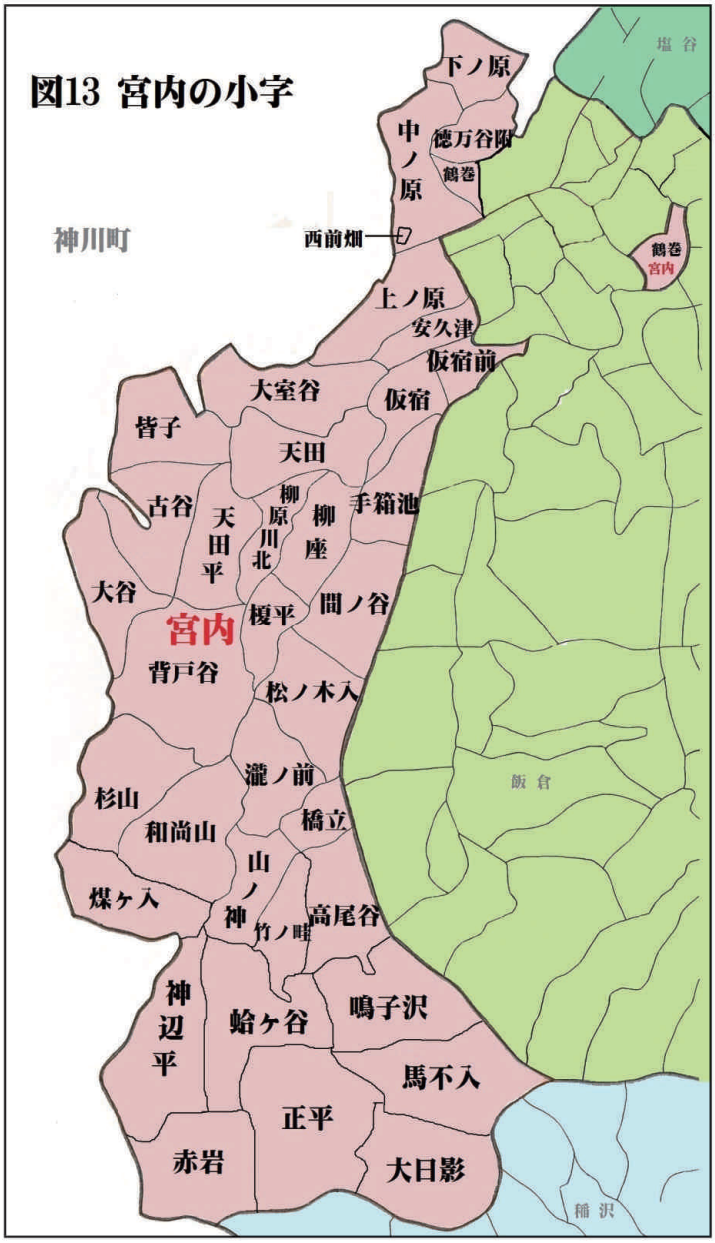
雨乞山　小名ではありませんが、旱魃の際にこの山に登り雨乞いのために火を焚いたと言われています。まさに雨乞いを行ったことに由来している地名です。

新寺・堂ノ入　仏教に関連した地名。古い寺や堂が所在したのでしょうか。

【児玉町宮内】

宮内は金屋地区の西部に位置しており、神川町二の宮と境を接しています。宮内の大半は山地と谷間の谷戸田よりなり、東部にかけては児玉丘陵が続いています。宮内地内より旧赤根川 (現在の女堀川) が流れ、東部塩谷地内へ流下します。集落は赤根川の両岸の平場と丘陵部の両岸に広がっています。なお北部寄りに女堀川に沿って、国道 462 号線が東西に通ります。

宮内の名の由来は、字のとおり神社の存在から来ています。神社の範囲の内といった意味でしょう。地内には現在若森神社が存在します。また隣町の二の宮はもと金鑽村といい、金鑽神社が鎮座します。この金鑽神社の東部の道路脇に元森神社があり、金鑽神社の元の鎮座地とも言われています。金鑽神社は歴史の古い神社で、延喜式にもその名が見られます。同社は現在地に移る以前に三度ほど移転していると言われ、宮内の若森神社も旧鎮座地ではないかと考えられています。宮内の由来もこのあたりにあるものと思われます。



宮内の地名が歴史上初めて確認されるのは暦応 3 年 (1340) の安保光阿 (光泰) 譲状 (『安保文書』) で、「児玉郡枝松名内宮内郷」と見えます。枝松名については既に長沖や塩谷の項で触れましたので、ここでは略します。

天田から見た宮内の風景

宮内の中世における領主関係は不明ですが、塩谷と同様に 14 世紀には丹党安保氏の所領となりました (『安保文書』)。それ以後の動静は塩谷と同様で、塩谷の項で触れました。江戸時代も同様で、旗本の戸田氏の知行地になってから、数度上地を繰り返しますが、明治まで戸田氏の領地でした。以後の変遷は飯倉・塩谷・金屋と同様です。

《小字名》

鶴巻、下ノ原、中ノ原、徳万谷附、上ノ原、安久津、仮宿 (仮宿耕地)、仮宿前、手箱池、間ノ谷、

松ノ木入、天田、天田平、大室谷、皆子、古谷、大谷、背戸谷、榎平、柳座、正平、橋立、高尾谷、柳原川北　山ノ神、馬不入、鳴子沢、大日影、杉山、瀧ノ前、和尚山、赤岩、蛤ヶ谷、煤ヶ入、神辺平、竹ノ畦、西前畑

※なお、宮内からは近世文書が未発見のため小名は検出できませんでした。

《主な小字の由来》

仮宿・仮宿前　変わった地名ですが、集落の集まった場所ですので、交通の面からも重要な場所と思われます。直接の由来は不明です。

徳万谷附　この地名の起源についてはよくわかりませんが、「徳万」は古代の人名の可能性があります。神川町の金鑽神社の神官や古代児玉郡衙の役人の名前で、この地を開発した者の名前が付いたものかも知れません。

馬不入　この地名は飯倉・小平・太駄にもあって、いずれも山奥の場所で、文字の如く馬も入れない場所を指しているのでしょう。

上ノ原・中ノ原・下ノ原　宮内の北部は起伏の強い丘陵部で、おそらくは古くから草原となっていたためについた地名と思われます。この地形は東隣の飯倉から塩谷北部も同様で、「原」の付く地名が残っています。

瀧ノ前　不動堂の脇に不動滝があることから付いた地名。

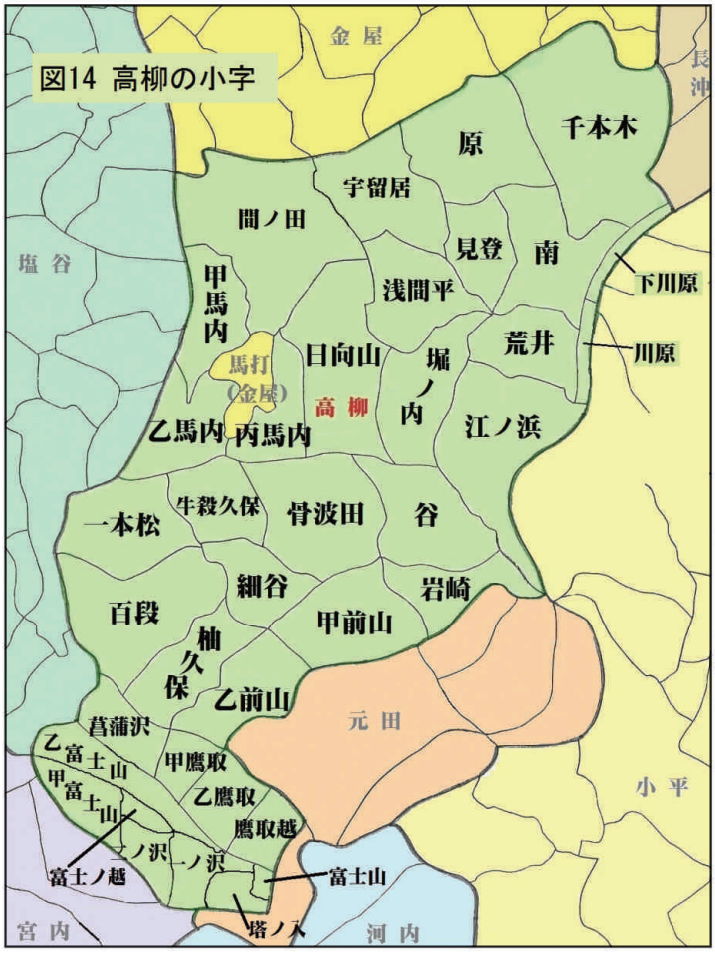
手箱池　『児玉風土記』によれば、昔、「てばこ」と呼ばれる小さな池があって、てばこ池の水が満ちたときに、池の周りを左回りに７回半、息をしないで回ると美しいお姫様が池から現れるといい伝えられます。しかし実際に息をせずに７回半も回れる人はいなかったため、誰もそのお姫様を見た人はいなかったそうです。この手箱池の名の由来は伝説から見て取れます。『児玉の民話と伝説』中巻によれば、民話「雨乞屋台」の中で、「もとは大きな沼であったが、阿久原牧の別当とその子若宮と地元の大蛇族が宮内の地で争った際、農民の神の田心姫を頼り、田心姫持参の手箱に大蛇族の長を閉じ込め、この箱を大池に投げ込み、池を埋め立てようとしたが、完全に埋め立てると日照りの時に困るので、小さな池になった」といいます。またこの池で雨乞い行事が行われ、宮内地区には雨乞屋台が現存します。通常は解体されていますが、屋台の右前の柱に、籠で作った龍を取り付けます。雨乞い行事で沼や池と龍との関係を持つものとしては、鶴ヶ島市脚折の雨乞いが有名で、巨大な龍蛇を竹と藁で作り、雷電池に担ぎ込む民俗行事として、一部類似点が見られます。

あまが坂　『児玉の民話と伝説』上巻の「長者さまはどこに」という話の中に「あまが坂」が登場します。同書では宮内の小字名としていますが、小字の中には見えないので、小字というよりは特定の場所の通称かと思われます。同書の註に「宮内は椿の木や花の無い伝説が生まれた坂」とあります。宮内は坂の多い地形をしていて、小字天田に至る道などは皆坂道でした。

雨乞屋台（昭和 60 年撮影）

【児玉町高柳】

高柳は金屋地区の中央南側に位置しており、菱形をしています。北は金屋と、西は塩谷で、西南隅のみ飯倉と、東は長沖と川を挟んで小平と、南は元田と境を接しています。高柳の大半は山地と丘陵地よりなっていて、南側を小山川(旧身馴川)が流れており、中央を南北に秩父新道が通っています。

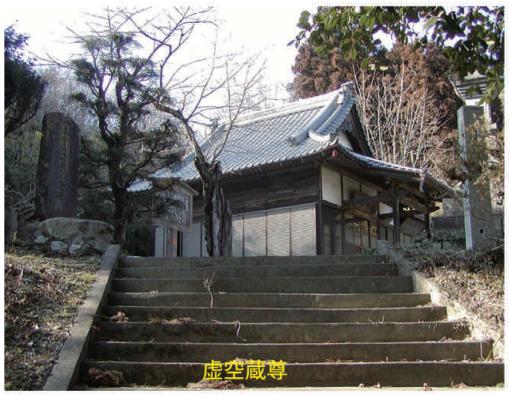


高柳の地名の由来はよくわかりませんが、高柳の虚空蔵尊にまつわる伝説に、「高柳には昔一本の大きな柳の木があり、征夷大将軍坂上田村麿が柳に向かって大蛇退治の祈願を行い、願いが叶うなら桜の花を咲かせたまえと願ったところ、突然、暗夜になり振動すると、またすぐに明るくなって、柳は桜に変わり、満開の桜が咲いた。大将軍は喜び、この地に虚空蔵尊を建立し、柳の大木があったことから高柳の虚空蔵と呼ばれた」というものがあります。この様な話が地名の起こりとは考えられませんが、史料に登場しないため、高柳の地名がいつ頃まで遡れるのかは不明です。

長泉寺所蔵の戦国時代の文書に、同寺の名が見られますが、村や郷といった名称は確認できません。戦国時代の高柳周辺は、後北条・武田氏の争奪の場であり、武田氏は上野国を支配下におくため、度々上野国あるいは秩父方面から武蔵国に侵入しています。その関係で長泉寺には後北条・武田両氏の禁制・制札が残されています。江戸時代に入ってからの高柳村は、当初は幕府領でしたが、後に旗本の戸田・松前・花房・常岡氏の所領となっています。以後の変遷は金屋と同様です。

《小字名》

原、千本木、下川原、川原、荒井、浅間平、宇留井、見登、間ノ田、甲馬内、乙馬内、丙馬内、日向山、江ノ浜、骨波田、堀ノ内、岩崎、谷、牛殺久保、百段、細谷、一本松、柚久保、甲前山、乙前山、菖蒲沢、甲鷹取、乙鷹取、鷹取越、塔ノ入、一ノ沢、二ノ沢、甲富士山、乙富士山、富士山、富士ノ越、南


虚空蔵尊

《昔の小名》

骨波田、江ノ浜、千本木

『風土記稿』に見える小名ですが、そのまま小字にも引き継がれています。高柳でも近世文書が未発見のため、この他の小名は検出できませんでした。

《主な小字の由来》

骨波田の長泉寺

骨波田　長泉寺のある付近をいう地名です。骨波田の地名の由来には幾つかの伝説が残されています。それは身馴川の大蛇伝説で、これは高柳の他、秋山の風洞地区にも似た話が伝えられています。それは昔、身馴川（現在の小山川）に雄雌２匹（或いは１匹）の大蛇がいて、あたり一帯の沼地を我がもの顔に暴れていたのを、征夷大将軍坂上田村麿が退治したという話です。退治した大蛇の骨をこの地に埋めたので、骨畑（骨波田）の名前が付いたと伝えています。また別の伝説では大将軍が大蛇を退治した後、この辺一帯に天災や病気が流行して村人がたいへん困っていると、どこからか高僧がやってきてお祈りをしたところ、付近の沼地一帯に大蛇の骨が浮かび上がり、沼には大きな波が立った。これをていねいに供養すると以後は祟りや天災・病気は止んだそうで、骨波田の由来はこの大蛇の骨と沼地が波立ったことによるといいます。いずれも洪水で荒れ狂う身馴川を大蛇にたとえた伝説と考えられますが、江戸時代には高柳村の隣村元田村（字後元田で長泉寺のすぐ近く）で大蛇の骨（歯の化石）が井戸の中より発見される事件が実際にあり、これに関する古文書や現物も残されています。結局これはナウマン像の化石だったのですが、当時は大蛇伝説とともにそれを裏付けるものとして信じられていたようです。

百段　長泉寺の裏山付近に百段という地名があり、さらに山を奥に行くと塩谷にも百駄という地名があります。骨波田の所で述べた伝説中に退治された大蛇の骨が荷車にして百荷駄あったことにつながるとも伝えられています。ここでいう百段と百駄は同じ意味なのでしょう。

江ノ浜・虚空蔵尊　これも伝説によるものです。身馴川のそばに入江があり江ノ浜と呼ばれていますが、ここに昔は一本の大きな柳の木があり、大将軍の坂上田村麿はこの柳に向かって大蛇退治の祈願を行い、願いが叶うならこの柳に桜の花を咲かせてほしいというと、突然、暗夜になり振動して、すぐ明るくなると柳は桜になり満開の桜が咲いたといいます。大将軍は喜び、この地に虚空蔵尊を建立し、柳の大木があったことから高柳の虚空蔵というようになったといいます。

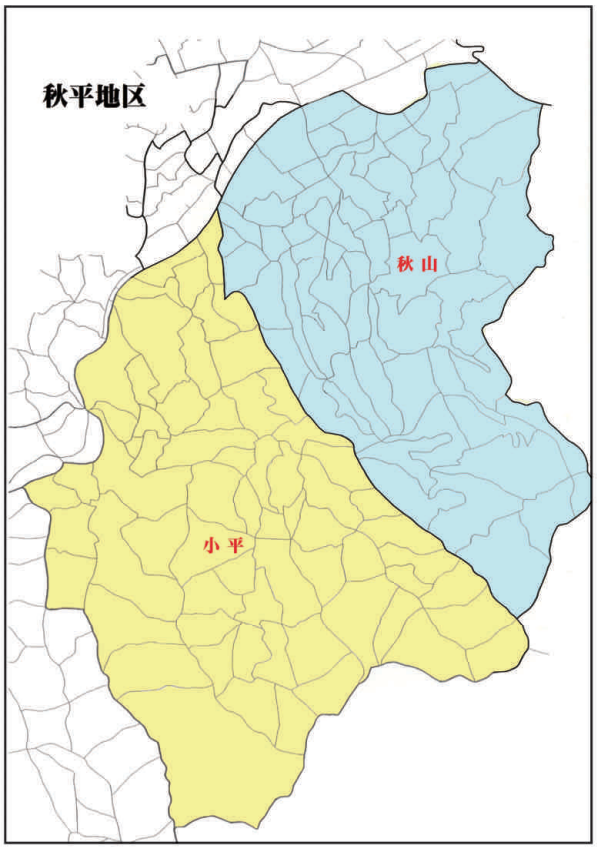
堀ノ内　高柳のほぼ中央で山寄りにある地名。一般的には堀の内とは堀で囲まれた区画の中を指し、中世の武士の館跡等を連想させますが、高柳の堀の内の場合は山の中にあり館跡とは考えにくい立地環境にあります。まだ具体的には実地調査が行われていないので、はっきりとはしていません。平成５年の確認調査で隣の小字日向山の山上で７世紀の古墳２基が確認されていて、古墳の周濠との兼ね合いでこの地名と関係があるでしょうか。

甲鷹取・乙鷹取　高柳の南端にあり、元田の裏といった感じの場所に立地しています。昔の話では鷹がこの山に巣を作り、それを村の名主が見つけ、鷹は高に通じ、石高が取れると喜び、これは吉兆だとして名付けたといいます。また猟師がこの山で鷹を捕らえたことから付いたともいいます。

甲富士山・乙富士山　正確なことはわかりませんが、おそらくは山の形が富士山に似ていることから富士浅間信仰の対象として信仰を集めたことによって付いた地名と思われます。実際にここには富士浅間神社が祭られていて、元田の人に信仰されています。

（3）秋平地区

秋平地区は、明治 7 年 (1874) に秋山村と風洞分が合併して秋山村になりました。次いで明治 22 年 (1889) に秋山村と小平村が合併して秋平村になり、さらに昭和 30 年 (1955) には児玉町・金屋村・本泉村と合併して児玉町になりました。以後は他の地区と同様な経緯をたどっています。秋平の名前は児玉地域の地区名として、さらに小学校の名前として今も使われています。



【児玉町秋山】

秋山は児玉町児玉の南部に位置し、上武山地の東縁の陣見山の北側に広がり小山川 (旧身馴川) で境界されます。陣見山より秋山川ほか幾筋かの河川が流れ、小山川に合流し、これに伴う谷戸田が発達しています。秋山の南部は山地とそれに続く丘陵地帯で、北側に緩い斜面と宅地があり、小山川に迫っています。北東部には水田や畑が広がっています。また北東部の小山川氾濫原と丘陵上には秋山古墳群が存在しています。

秋山の地名は全国的に多く存在しますが、その中では甲斐国 (山梨県) の秋山が知られています。中世においても武田氏流の秋山氏があって、南北朝の動乱で秋山新蔵人光政が京の加茂河原で武蔵武士の丹党安保直実と一騎打ちしたことは軍記物語の『太平記』に記載されています。埼玉県では寄居町にも秋山の地名があり、児玉の秋山とよく似た位置関係にあります。

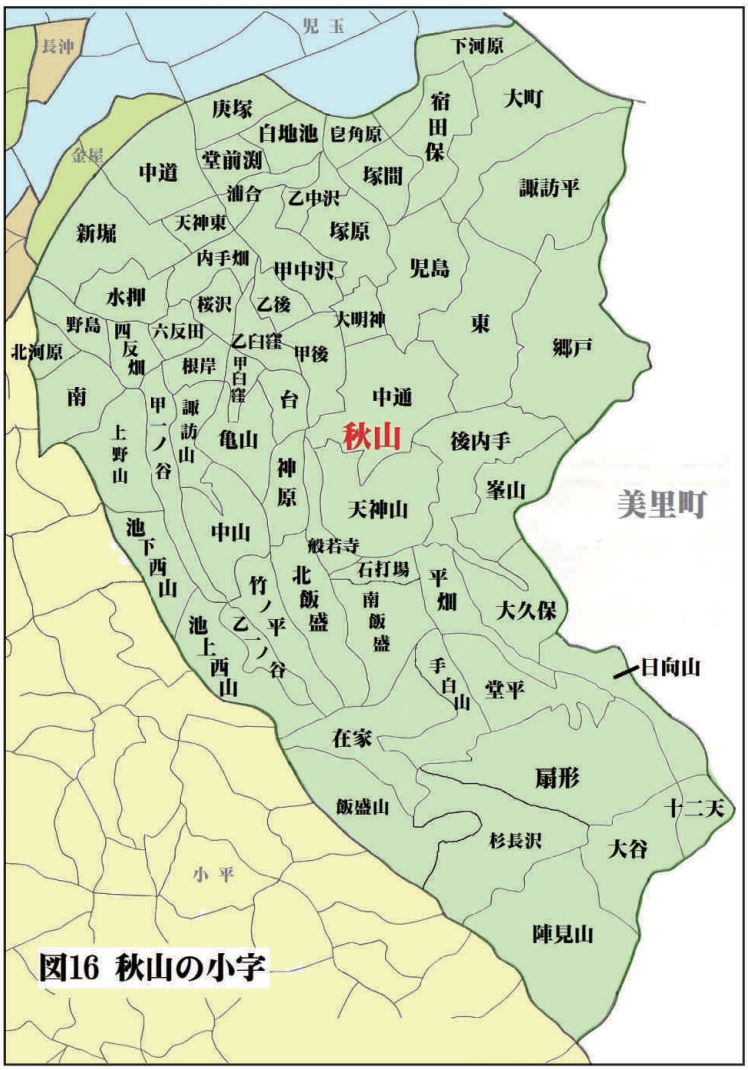


図16 秋山の小字

秋山の地名が初めて史料に見えるのは、応永 12 年 (1405) の『建長寺 (宝寿庵) 文書』に「広木郷内秋山村中沢四郎」とあるのがそれです。その後、永正 12 年 (1515) の行田長久寺の『十二天画像軸裏書』には「中沢郷秋山村

宝光寺宕禅院」とあり、また同寺の年未詳の『大般若経奥書』には「武州那珂郡中沢県秋山村小沢於日輪寺」と見えます。これにあるように秋山は中世の後半には那珂郡内で秋山村を称しており、広木郷と中沢郷のいずれかに属していたことになります。

秋山と山を隔てた反対側の長瀞町に伝わる伝説に『信仰利生鏡』という古書があり、これには秋山に秋山城主秋山新九郎続照がいて、長瀞町小坂の仲山城主阿仁和兵衛直家との確執を伝えた物語が載っています。秋山には新蔵人神社という古社があり、その周囲には堀や土塁があったと言われ、かつては武士の館があったのではないかとも言われています。以前、館跡周囲の工事の際に一万枚近くの古銭が出土したといいます。新蔵人神社は秋山新蔵人光政を祀っていますが、秋山光政は甲斐源氏であり、武蔵国のこの秋山の地との関係は不明です。この神社の小字は中通といいますが、神社のすぐ先に本覚院という寺院があり、本覚院が近世において新蔵人神社の別当寺でした。

ここよりすぐ西側の小尾根上に直正寺という寺があり、この寺は近世初頭に秋山村の地頭となった旗本戸田氏の氏寺として建立されたもので、この尾根のさらに西側の谷を隔てたところにあった般若寺を再興したものといいます。般若寺は現在はありませんが、かつて徳治２年 (1307) 銘の瓦が出土している中世寺院でした。伝説の秋山新九郎続照と有力層の手による般若寺の存在など何らかの関係がありそうです。また秋山には中世において、先の『建長寺文書』にあるように中沢氏の存在があります。中沢氏は源姓を称する武士で、那珂郡中沢郷を本貫地とし、児玉郡及び周辺地域に多く分布する武蔵党児玉党や猪俣党・丹党といった武士団に属していない武士です。美里町駒衣に和田という小字があり、ここが中沢郷に含まれるようです。中沢氏は丹波国大山庄の地頭となって移住していますが、武蔵国に残った一族は美里町広木・駒衣から児玉町秋山・小平付近にかけて勢力がありました。秋山には甲・乙中沢という小字が残り、ここは堀の内とも呼ばれ、中世の館跡と推定されます。

なお秋山には、源平の争乱の一の谷合戦の時、生田森で討ち死にした河原兄弟を祀った神社があります。秋山の河原神社は河原太郎を祀り、風洞の桜沢神社 (現在は天神社に合祀) は河原次郎を祀っています。なぜ秋山に私市党の河原氏を祀る神社があるのか、また秋山・風洞と河原兄弟との間にどのようなつながりがあるのかは不明です。

風洞の天神社

戦国時代以降の秋山の様相はよくわかりません。鉢形北条氏の支配下にあったものと思われます。天正 18 年 (1590) の豊臣秀吉の小田原攻めの際に、攻め手は陣見平に登り、ここから雉岡城内の様子を探ったと言います。この戦いで後北条氏が滅亡すると、すぐに徳川家康が関東八国の領主となりました。秋山は天正 18 年に旗本の戸田氏の領地となったと言われます (『風土記稿』)。元禄３年 (1690) には戸田氏は改易され天領となります。この時に秋山村は検地を受けています。元禄８年 (1695) に秋山村は秋山村と風洞分に分村され、秋山村は旗本鳥居氏と川越藩領の相給地に、風洞分は川越藩領となりました。この後、風洞には川越藩の大砲練習場が設けられたといいます。また風洞には身馴川の大蛇に関する伝承が残っています。幕末期に領主の交替が見られ、明治７年 (1874) に風洞分は秋山村と合併しています。なお風洞については、現在では秋山に含まれていますが、既に触れたように、江戸時代においては他の村と同様に一村を構成しており、現在でも風洞の名が親しまれ使用されています。

《小字名》

中道、庚塚、下河原、大町、宿田保、皀角原、白地池、新堀、水押、堂前渕(淵)、浦合、天神東、野鳥、北河原、南、四反畑、六反田、内手畑、甲中沢、乙中沢、塚原、塚間、諏訪平、郷戸、東、児島、大明神、中通、甲後、乙後、桜沢、甲臼窪、乙臼窪、根岸、諏訪山、甲一ノ谷、乙一ノ谷、上野山、池上西山、池下西山、中山、亀山、台、神原、天神山、後内手、峯山、大久保、平畑、南飯盛、般若寺、北飯盛、竹ノ平、在家、手白山、石打場、堂平、日向山、扇形、杉長沢、飯盛山、陣見山、大谷、十二天

※中沢・一ノ谷・臼窪・後はもともと一つの小字でしたが、地形が細長い等の事情で「甲・乙」の二つに分けられています。

《昔の小名》

○元禄3年(1690)の秋山村(風洞分を含む)検地帳に見えるもので上記の字は除いたもの。

神殿田、山王、壱人関、仁右衛門谷、由か入、池田、駒形、膳山、箕輪、古阿沢、鷺田、白屋、上の台、八幡下、北かど、橋場、塚合、切が窪、長土井、壱本木、御料、長者窪、丸山、向戸、滝の入、徳部、鳴地蔵、池上東、三枚田、新堀、鉢山、十三仏、久保谷戸、とうしょう谷戸、上天神前、下天神、なかい、池下、田の端、般若寺入、兎田、えんなみ、細田、がけ下、とぎや

《主な小字の由来》

在家(ざいけ)　中世における集落の単位、或いは課税の対象となる単位を示していますが、極めて中世的な地名です。秋山には中世寺院の般若寺や中世期に使用された大量の古銭の出土、秋山氏や中沢氏の存在など中世的な関連が多く見られます。

般若寺(はんにゃじ)　以前は般若寺谷の小名がありました。般若寺は現在残っていませんが寺のあったという平場が存在します。江戸時代より般若寺の名前が刻まれた瓦が掘り出されたようで、その後の昭和4年(1929)に旧埼玉県史の編さんにあたり般若寺遺跡の調査が行われています。この時にも般若寺の名の入った瓦2枚と鬼瓦片1点ほかが発見されました。さらにゴルフ場建設の計画が起こり、遺跡保存のため昭和58年(1983)にも範囲確認のための試掘調査が行われました。これらの調査等により徳治(とくじ)2年(1307)銘の瓦が発見され、その時期に創建されたものと推定されています。般若寺が廃止された年代は不明ですが、近世初頭に秋山村の地頭であった旗本の戸田氏が谷を隔てた小尾根上に再建し直正寺として現存しています。

直正寺

塚原(つかばら)**・塚間**(つかま)**・塚合**(つかあい)　この地域には多数の古墳が現存し、秋山古墳群と呼ばれています。その古墳の存在からこれらの地名が付けられました。なお「塚合」については小字名にはありませんが、元禄3年(1690)の検地帳に小名として載っています。

甲中沢(こうなかざわ)**・乙中沢**(おつなかざわ)　中世的な地名で堀の内とも呼ばれています。既に述べたように武蔵武士中沢氏との関係が推定される地名です。堀の内は堀で囲まれた場所を指す地名で、内部に館や屋敷等のある場所もあります。付近には土塁(どるい)なども一部に残っていました。

陣見山(じんみやま)**・陣見平**(じんみだいら)　陣見山山頂には平場があり、陣見平と呼んでいます。この陣見平について『風土記稿』では「陣見平の名は、天正18年(1590)の八幡山城責めのとき、寄せ手が此山に上り、城兵の陣列を見し故に、この名ありと云」と書かれています。しかしこの時には前田・上杉

の北国勢が生野山に陣を敷いたようで、実際に陣見山に上ったかどうかは不明です。しかしここから見る上州方面の景色は素晴らしく、中世において狼煙等の方法で利用された可能性はあります。

十二天山　陣見山と尾根続きの一段低い山頂に十二天社が祀られています。このことから付けられた名です。十二天社は十二天堂ともいい、神仏の混合の神社です。かつて参道から応永24年(1417)銘の鰐口が掘り出されています。

庚塚　風洞の東部、身馴川(現小山川)のそばの道路脇に庚申塔を造立したことに由来すると思われます。ここにはかつて六本松と庚申塔があったことが絵図面に見えます。現在、ここには4基の庚申塔があり、その内の3基が6本の腕を持つ青面金剛像を主尊し、1基は元禄6年(1693)銘、2基は不明ながら元禄前後のものと思われます。残り1基は文字塔で寛政12年(1800)のものです。

陣街道　小字名ではないのですが、昔から呼ばれている地名です。小字名は下河原となります。小字内を古くは鎌倉街道上道が通り、江戸時代にも中山道脇往還川越道が通過したことからこの名が付いたのでしょう。小字の東端の町境付近に一里塚がありました。ここは美里町分ですが、昭和60年(1985)頃までは大榎がありました。なお民話では新田義貞が鎌倉を攻めたときにここで陣を整えたとの話があります(『児玉の民話と伝説』)。

風洞・風洞分　小字名ではありませんが、風洞の地名の起こりは、民話(『児玉の民話と伝説』中巻)によれば、この辺りを流れる身馴川(現小山川)一帯を荒らし回っていた大蛇が、川の入江近くの洞窟に隠れ住んで、呼吸する息が風となって「ゴー、ゴー」と嵐のような音をたてたことから、住民達は恐れて風洞(穴)には近づいちゃいけないといい、そこから風洞の地名が生まれたと書いています。この地域の大蛇伝説は上流部の高柳・小平から下流の美里町北部地域に残っていますが、これは暴れ川であった身馴川の洪水被害を大蛇に例えて表現した伝説に基づいて生まれた地名の一つなのかも知れません。風洞分はその地域の村名で、江戸時代には秋山村から分村して一村をなしていましたが、明治7年(1874)に再び秋山村と合併しています。

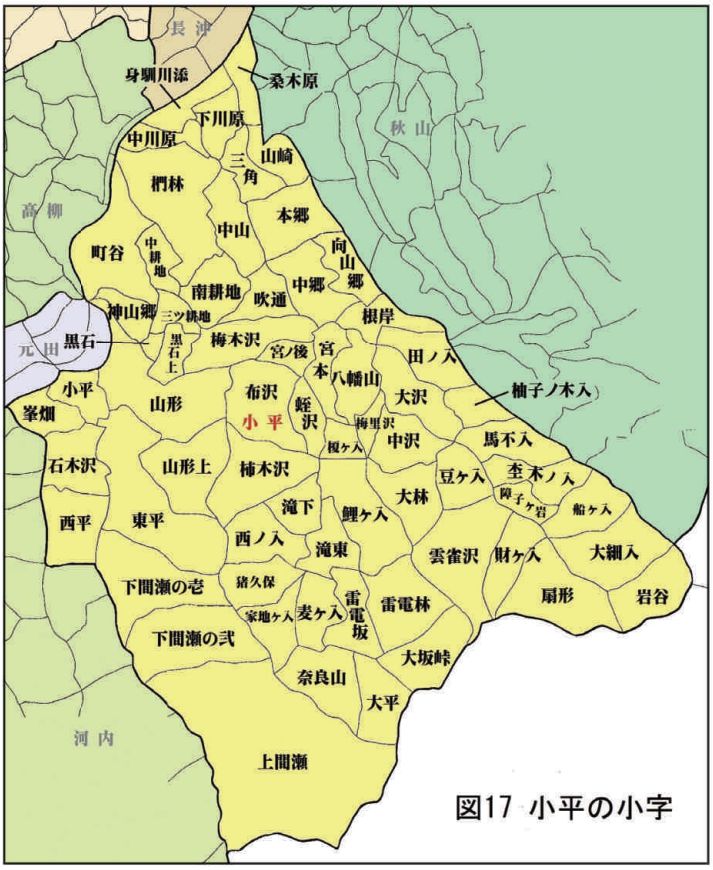


図17 小平の小字

【児玉町小平】

小平は秋平地区の西部に位置しています。小平の北部を小山川(旧身馴川)が流れ、対岸は高柳、西側は元田・河内、東側は秋山の風洞、南側は山を越えて長瀞町野上と境を接しています。

南部の山地は上武山地に続く尾根で、不動山から榎峠を経て陣見山へと続いており、頂上付近を広域林道が通っています。小平の大半が上武山地とそれに続く小規模な2本の尾根で南北に延びており、尾根間の谷を根岸川・小平川と間瀬川が流れ、

北部を本泉地区より流れる小山川に注ぎますが、川の出口付近に平地が広がり、ここに集落や耕地があります。小山川に注ぐ間瀬川の上流には農業用水確保のための児玉用水 (美児沢用水) のダム (間瀬堰堤) が設けられ、間瀬湖が出来ました。現在は桜とヘラブナ釣りの名所ともなっています。

小平の名の由来は不明ですが、小平地内の小字名にも「小平」があることから、地形から起きた地名と思われます。古代から中世にかけての小平地区の状況は不明で、それを知るための史料が残されていません。小平は隣の秋山と同様に那珂郡 (近世には那賀郡と書いた) に属していました。中世の秋山村が広木郷或いは中沢郷に属していたことは秋山の項で触れましたが、小平もほぼ同様ではないかと思われます。近世初期の文書で、成身院に幕府より下された朱印状が焼失したため、成身院と小平村が、領主の旗本安藤氏を通じて、幕府に朱印状の再発行を依頼していますが、この時の史料には「中沢郷小平村」と記載されています。中世における小平と領主の変遷も不明ですが、字根岸のほてい堂には２基の大型の凝灰岩製五輪塔があり、形態からも鎌倉時代に造立されたものと推定されています。内１基は空風輪の破損が見られますが、復元すると全高が２メートルにも及ぶ立派なものです。この他にも地内の各所に多数の中世の石造物が残されており、中世における小平地区が開かれた土地であったことがわかります。中世には那珂郡に属していたため、児玉党武士との関係は少なく、那珂郡の東部地域には丹党や猪俣党武士が分布するものの小平姓を名乗る武士が存在しないことから、おそらく中沢氏との関係が深かったのではないかと思われます。

ほてい堂の五輪塔

室町時代後半から戦国時代にかけて真言宗寺院成身院が開かれましたが、開基は関東公方足利持氏と伝えられます。寺伝以外には何ら根拠はありませんが、寺の創建時期に大きな問題は無いようです。実際、歴代住職墓地には 20 基もの五輪塔があり、最も古いのは文明 10 年 (1478) のもので、以後明応・永正・天文・弘治・永禄・天正年号銘のものが存在します。この成身院は近世を通じてこの地方きっての真言宗の大寺院で、末寺・門徒寺院が 100 箇寺を数えます。

天明３年 (1783) に起きた浅間山の大噴火により多くの犠牲者が出ましたが、当時の住職の元真はその供養のため各地を奔走したものの願いは果たせず、弟子の元映が師の意志を継いで百体観音堂を建立しました。

近世における小平は小平村を称し、村高 232 石余りの村でした。領主は旗本の安藤氏で、安藤氏は小平村以外にも近隣の美里町の阿那志村・関村・根木村等の地頭 (領主) でした。安藤家は小平地内に菩提寺の建立を図り春貞寺を建立しました。春貞寺は安藤彦四郎の妻春貞尼から付けた名前ともいわれます。春貞寺は高柳の長泉寺の末寺で光西寺があった場所に建てられ、光西寺は字町屋に移されたといいます。

光西寺は現在廃寺となり存在しませんが、南北朝期頃の伝承として光西寺の梅の話が伝えられています。秋山の項で少し触れましたが、長瀞町の旧家に伝わる『信仰利生鏡』という書物に、秋山城主秋山新九郎続照と長瀞町の仲山城主阿仁和兵衛直家の間に確執があり、秋山・阿仁和両者がこの光西寺で花見の宴を開いたことが書かれています。さらに近世には光西寺の梅が江戸でも有名になったことを記した書物が存在したことにも触れています。秋山・阿仁和両氏の確執が歴史的事実かは不明ですが、『信仰利生鏡』に記されたことが全て作為でないことも確実で、光西寺の梅の伝承も、現在の小平の地に残されており、興味深いお話です。

小平村は旗本安藤氏の知行のもと明治期まで大きな変化はありませんでした。明治期以降は明治 22 年 (1889) に秋山村と合併し秋平村となり、昭和 30 年 (1955) の合併で児玉町の大字となりました。現在、行政区割りでは東小平と西小平に分けられています。

《小字名》

宮本、蛭沢、八幡山、大沢、田ノ入、根岸、向山郷、中郷、吹通、中山、本郷、山崎、桑木原、三角、下川原　中川原、身馴川添、椚林、南耕地、中耕地、町谷、三ツ耕地、黒石、神山郷、山形、小平、峯畑、石木沢、山形上、黒石上、梅木沢、宮ノ後、布沢、柿木沢、滝下、西ノ入、猪久保、家地ケ入、奈良山、大平、上間瀬、下間瀬の壱、下間瀬の弐、東平、大坂峠、雷電林、雷電坂、麦ケ入、滝東、榎ケ入、鯉ゲ入、大林、豆ケ入、雲雀沢、財ケ入、扇形、岩谷、大細入、船ケ入、障子ケ岩、杢木ノ入、馬不入、柚子ノ木入、中ノ沢、梅里沢、(下間瀬は当初は一つの小字だったものを二つに分離)

《昔の小名》

大沢、根岸、中内手、蛭沢、椚林、町屋、黒石、山口、石木沢、駒形

これらは主に集落のあった場所の地名と思われます。他に小名ではありませんが山・峠名として大沢山・蛭沢山・吹通山・間瀬峠があります。

《主な小字の由来》

宮本（みやもと）　宮本とは神社が鎮座する中心の場所を意味しますが、これは石神神社の所在地を意味しています。

蛭沢（ひるさわ）　字宮本の隣接地でより山際に位置します。小平川の上流にあたり、かつて蛭が多く生息していたのでしょうか。

間瀬（ませ）　間瀬は古くは馬背とも書かれ、馬背峠の地名が見られます。峠が馬の背中の形より連想した地名かも知れません。戦国時代頃よりこの名前が見られます。

根岸（ねぎし）　根岸廓とも呼ばれ、この周辺には根岸姓を名乗る家が多くあります。根岸姓の発祥の地ともいえる場所です。地形的には小平川と根岸川が合流する付近です。ここには布袋森堂 (ほてい堂) と呼ばれる覆堂があり付近の信仰の対象となっていますが、中には２基の大型の五輪塔があり、いずれも鎌倉時代のものと推定される立派なものです。

椚林（くぬぎばやし）　“クヌギバヤシ”と読み、古くは櫟林とも書きました。クヌギの木が多く生えていたことによる地名でしょうか。江戸時代より残された古い地名の一つです。

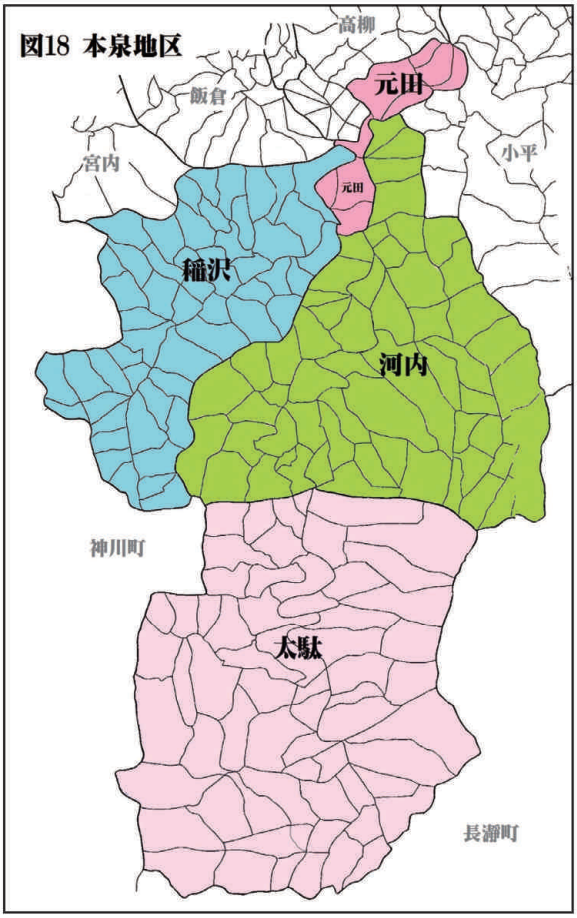
岩谷（いわや）　“イワヤ”と読み、尾根筋の頂上付近に岩盤の露出した場所が多く見られることから付けられたものと思われます。江戸時代にはこの地に修行道場的な岩谷堂（いわやどう）が設けられ、浄厳（じょうごん）上人が修行したとの伝説が残ります。現在も石仏を安置する岩穴があり、また信仰の対象として多数の石仏が参道脇から平場付近に置かれています。

中山（なかやま）　地形からついた地名と思われます。小平の北部の中央に南北に丘陵上の地形が延びていて、その南端に百体観音堂が建立されています。この背後が中山遺跡といい、古代の寺院址が発掘調査されています。この中山の東側が東小平で、西側が西小平となります。

高窓の里

《その他》

その他、地形から付いたと思われる地名が多くあります。特に大字の大半が山地とそこに発生する小川・沢が多いので、それに因む地名が見られます。“○○沢”や“○○入”とつく地名が多くあります。なお、昔からの地名ではありませんが、東小平には高窓を乗せた養蚕家屋が多く残っていて、近年は「高窓の里」と呼ばれています。



(4) 本泉(もといずみ)地区

本泉地区の由来も他の地区と同様に本泉村が誕生したことに由来しています。

【児玉町太駄(こだまちょうおおだ)】

太駄は本泉地区の南西部に位置し、太駄の大半が上武山地に含まれ盆地となっています。中央を南北に小山川(旧身馴川)が蛇行して流れます。なお小山川はこの太駄山中より発しています。太駄の中心部は小山川にそって細長く盆地状の平地が広がっています。北は河内(こうち)、東は長瀞町(ながとろまち)野上、西は神川町阿久原・矢納、南は皆野町出牛と境を接しています。

南境の皆野町出牛より県道一号線の前橋長瀞線が北上し、中央部の字殿谷戸(とのがいと)で分岐し、前橋長瀞線は左折し、字沢戸を経て杉の峠より神川町阿久原に入ります。一方直進する道路は、主要地方道秩父児玉線となり河内に通じています。現在は、自動車の利用が高まり、道路改修が進み交通の便も大幅に改善されていますが、道路にそって小山川が流れ、かつては度々氾濫し、大きな被害を出していました。

太駄はオオダと読み、かつては太田の字を当てた時代もあったようです。古代における太駄地域はよくわかりませんが、『和名抄』には児玉郡では振太・岡太・黄田(草田)・太井の4郷を載せています。かつて太

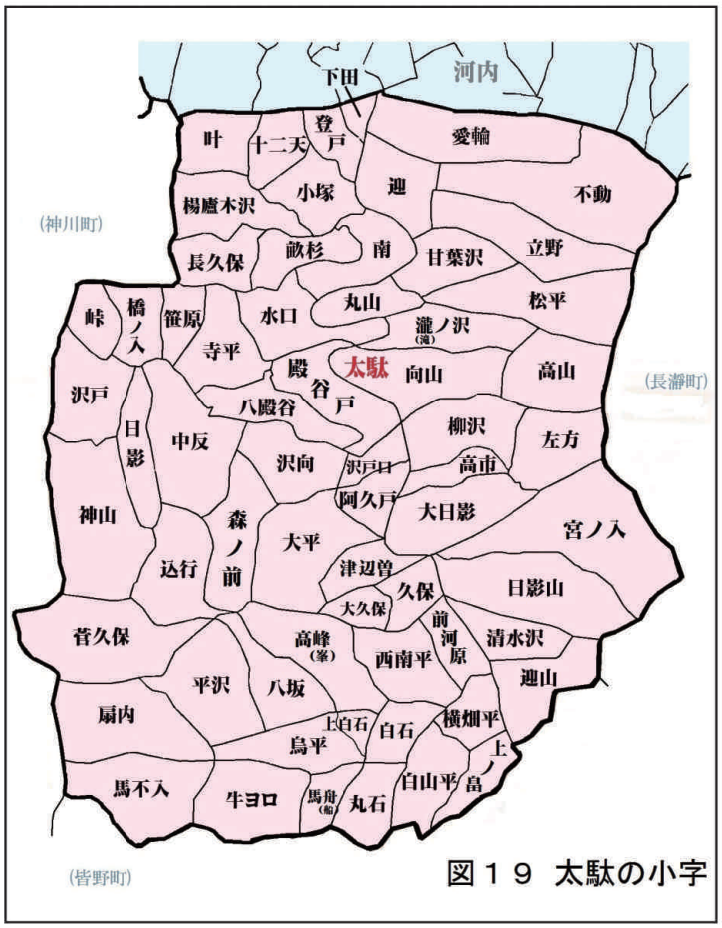


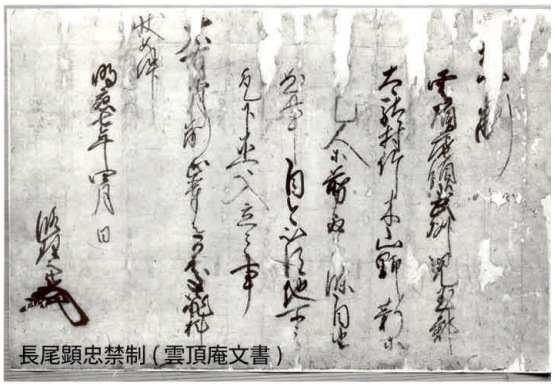
図１９ 太駄の小字

駄地域は振太郷に比定する説(『大日本地名辞書』)がありましたが定かではありません。

太駄の地域的に大きな特徴には交通の要衝に位置することがあります。現在の道路(前橋長瀞線と秩父児玉線)そのままが古代から近世における交通の主体をなしていました。この主要な道路の他にも太駄から神川町阿久原へ通じる道路や長瀞町へ通じる古道がありました。現在、秩父郡内から関東平野へ通じる交通路は、国道140号線や秩父鉄道を用いて寄居町方面へ通じるのが主要なものとなっていますが、かつてはこの道路は荒川の難所で、歴史的に新しく近代になって開削されたものです。古代から近世においては寄居町の風布や東秩父村の定峯峠越えの道路が用いられており、秩父・吉田・皆野を経て太駄を通り、上州や児玉郡へ出るのが一般的でした。実際に前橋長瀞線は、秩父道とか上州道と呼ばれ、秩父児玉線も秩父道・児玉道と呼ばれ大いに利用されました。明治にはさらなる発展を求め大幅な改修工事が行われ、秩父新道と呼ばれ利用されましたが、国道140号線と秩父鉄道の開通により、秩父郡から本庄への交通量は大幅に減少しています。かつては古代における児玉郡と秩父郡、さらに上野国との関係は密接で、政治・経済・社会の多方面での繋がりが考えられます。

中世における太駄地域の重要性は変わりません。武蔵武士児玉党一族は秩父氏族の秩父氏(後に畠山・河越・江戸氏などに分かれる)と血縁関係を結びます。そのため児玉と秩父を結ぶルートの中間に太駄は位置しています。児玉党には直接太駄を苗字とする武士はいませんが、太駄の北の河内、南の金沢(皆野町)は児玉党一族の所領と考えられます。

鎌倉時代も中期以降に武蔵国内での児玉党の影響力が弱まると、丹党安保氏が太駄地域に進出してきます。建武(けんむ)3年(1336)の「足利直義下文(ただよしくだしぶみ)」(『安保文書』)には、太駄郷が安保光泰法師の所領として安堵されています。さらにこの文書によれば正安(しょうあん)3年(1301)の譲状の旨が記載され、この段階で安保氏の所領となっていた可能性が高いようです。いずれにしろこの文書が太駄郷の史料上初見となります。その後も『安保文書』中に名を載せていますが、暦応(りゃくおう)3年(1340)の安保光阿(光泰)譲状には「太田郷」とあり、応永25年(1418)の「関東公方(くぼう)足利持氏(もちうじ)御判御教書(おんはんみきょうしょ)」では“太田村”の記載となっています。この時期になると安保氏の支配力が弱まり、在地領主に押領されており、神川町阿久原から児玉町太駄を経て秩父郡内の地が安保氏から他の勢力の支配下に置かれる状況となっており、太駄地域の重要性の一端が知られます。中世も後半の戦国時代にも太駄の地名が史料上に散見されます。明応(めいおう)7年(1498)の長尾顕忠(あきただ)禁制(雲頂庵文書)に「雲頂庵領武州児玉郡太駄村」とあります。この他、文亀(ぶんき)元年(1501)の鎌倉雲頂庵座主(ざす)久甫淳長置文(くぼじゅんちょうおきぶみ)や、年未詳(文亀元年以前)の長尾忠景(皎忠)(ただかげ(こうちゅう))書状によれば、太駄村が長尾氏の所領となり、これを鎌倉の円覚寺(えんがくじ)の塔頭(たっちゅう)の雲頂庵に寄進したことが知られます。また長尾氏は阿久原の丹生神社(たんしょうじんじゃ)の棟札(『郷土の歩み』－神泉を知るために－)に大旦那とあって、阿久原も長尾氏の所領の可能性が高く、戦国時代に山内上杉氏の武蔵国支配に伴い、執事職(しつじしょく)の長尾氏が太駄地域周辺を支配下に入れたのものと思われます。戦国時代末期、後北条氏の武蔵進出により上杉氏の勢力が一掃されますが、太駄地域の状況はよくわかりません。おそらくは後北条氏の支配下におかれたものと思われます。天正18年(1590)に後北条氏が豊臣秀吉により滅亡し、徳川家康が関東に入国してからは、徳川氏の支配下に置かれます。


長尾顕忠禁制(雲頂庵文書)

近世・近代における太駄の状況は、検地帳が残されているのである程度わかります。太駄地域は児玉郡に属しますが、近世初頭の段階では一時秩父郡と認識されていたようです。文禄(ぶんろく)3年

(1594) の検地帳には「武州秩父郡太駄之郷」とあり、慶長３年 (1598) の検地帳にも「武州秩父郡太駄之郷」の記載があります。江戸時代前半は幕府の直轄領でしたが、享保 17 年 (1732) に大名黒田氏領分 (久留里藩) となり明治に至ります。明治 22 年 (1889) に太駄村は河内・元田・稲沢村と合併し本泉村となりました。さらに昭和 30 年 (1955) に金屋村と秋平村・児玉町と合併して児玉町となり、平成 18 年 (2006) １月の本庄市と児玉町の合併で本庄市児玉町太駄となりました。

《小字名》

下田、登戸、小塚、十二天、叶、楊櫨木、長久保、畝杉、南、水口、殿谷戸、八殿谷、寺平、笹原、橋ノ入、峠、沢戸、神山、込行、日影、中反、森ノ前、沢向、沢戸口、阿久戸、大平、津辺曽、久保、前河原、西南平、大久保、高峰 (峯)、八坂、平沢、菅ノ久保、扇内、馬不入、牛ヨロ、馬舟 (船)、烏平、上白石、白石、横畑平、丸石、白山平、上ノ畠、迎山、清水沢、日影山、宮ノ入、大日影、高市、左方、高山、柳沢、向山、滝ノ沢、松平、丸山、甘葉沢、立野、不動、迎、愛輪

《昔の小名》

○文禄３年 (1594) の検地帳 (「武州秩父郡太駄之郷御地詰帳」)

かちや (鍛冶屋)、かわら (川原)、あかや、沢はた、大ひかけ (大日影)、かわらはた (川原畑)、むかい山 (迎山)、きた (北)、下かわら (下川原)、ひかけ田 (日影田)、宮の前、やしき (屋敷)、上の山、みち上、みち合、白石平、池平、かんはさわ (甘葉沢)、かみはたけ (上畑)、かやは、からす平、まいはた、かミはた、うへの山、らんとうは、明神めん、さわ入、やしききわ (屋敷際)、いと入、といは、梅くほ、とうの下、道下、むかいはた (迎畑)、ミなミ (南)、はけはた、両やしき、やしきそへ、やしきまへ (屋敷前)、高岸、さわむかい (沢向)、むかいひかけ (迎日影)、ひかけはた (日影畑)、田のはた、むかい山下、ひかしはた (東畑)、やなきはた (柳畑)、かわ田、山下、田の上、こしの入、芝田、のつち (野土)、ミち上下、さわ田 (沢田)、こしわき、よしのさわ、あらた、大くほ (大久保)、ミな口 (水口)、うつ木沢、かわら田、かとた (門田)、やしきの下、さわのくほ、うへのミね、まい田、向田、向はた、池平

○慶長３年 (1598) の検地帳 (「武州秩父郡太駄之郷坪入御帳」)。

上山、らんとうは、迎山、道合、萱場カ、岩平、沢入、下平、屋敷きわ、いと入、といは、はしは、久保、としつの下、南、道間、はけはた、屋敷前、高岩、屋敷添、向はた、沢山、川はた前、水口、沢田、北、かけはた、あかや、柳畑、こしまき、山下、大日影、沢迎、田の上、池平、雨畑、のくち、川原はた、下原、日影、明神免、宮前、吉野沢、大久保、わりた、かけえさわ、上の山、高市内、前田、竹畑、鍛冶屋、くね平、丸石、深久保、櫟平、入りの沢、かやは、白石、土掘場、細入、柳沢、こしうち、橋の入、大前、高根、竹中、東久保、川原、さいかちはた、烏帽子岩、反り、日向畑、日影沢、菅ノ久保、すみ畠、塔畑、ほそくまき、うつぼ沢、大城、叶平、うつぎ沢、大平、滝沢、向山、思い久保、西沢

《主な小字について》

江戸時代初頭から現在に至るまで使用され続けた小字名は前記の史料でも幾つか検出できます。それは丸石・日影・平沢・大平・高市・滝沢・馬舟・甘葉沢・沢戸・柳沢・迎・白石・烏平・大久保・不動・下田・峠・橋の入・沢向・丸山・立野・笹原などです。

太駄地区の小字名の特徴は、地形から付いた名前が多いことです。耕地に関する地名でも山の多い地

阿久戸付近

域ですので水田や畑に関連した地名は少ないようです(小名には多く見られます)。また山や平場や窪地、沢や谷に因むものが圧倒的に多くあります。

特に平地の少ない土地柄のため、「平」の付く地名が多く見られ、寺平、大平、西南平、平沢、横畑平、白山平、松平があります。平らな場所は生活する上で最も重要な場所で、そのため古くから地名に反映されたのでしょう。また次の様に集落の集中する場所があります。

小塚(こづか)・殿谷戸(とのがいと)・八殿谷(はっとのがい)・沢戸(さわど)・阿久戸(あくと)・迎(むかい)・久保(くぼ)・平沢(たいらざわ)・横畑(よこばたけ)・西南(にしみなみ)は集落の集まった場所で、小字名ですが廓名ともいえるでしょう。

小　字	旧　字　名	小　字	旧　字　名
下　田	シモ田	登　戸	登戸・向山・森ノ前・柿平
小　塚	小堀・北・寺ノ前・上ノ山	十二天	十二天・大平
叶	叶・大ちう・水ノ口	楊廬木沢	ウツギサワ・麦ヤキリ・岩下・杉ノ本
長久保	長久保・三ツ口・天代	畝　杉	ヲネ杉・岩棚
南	南・大久保・ヲソネ平・カンバ沢・前田	水　口	水口・宮田・ヨシノ沢
殿谷戸	中ノ割・上ノ代・夏内・北ノ入・殿谷戸・下山・宮ヲネ・南浦・ミタバ北ノ入リ	八殿戸	清水ソリ・沢バタ・道下・八殿谷・姥懐・池平・前山
寺　平	林中・芝立・伊原・村際・池平・ミタバ・日向畑ケ	笹　原	笹原・大ちう・炭釜・上ノ代・矢サク
橋ノ入	橋ノ入リ・沢バタ・大ツラ・道上・池平・前山	峠	山際・上ノ山・日向・浦ノ山・矢坪・杉ノ峠・峠・横マクリ
沢　向	ヒルクホ・天代・竹ノ上・山ノ神・久保・東	沢戸口	沢戸口・出口・河原・下河原・シヤウジンバ・大久保
阿久戸	阿久戸・北川原・川原・上ノ山・小林・竹キワ	大　平	森下・砂原・三角・大平・森ノ後
津辺曽	ツヘソ・迎山・森ノ前・高峰・高見・政カ入	八　阪	八阪・下平・沢辺・高峰
平　沢	平沢・橋ノ入リ・上ノ山・井戸ノ上・天上・横打・井戸ノ入リ	菅ノ久保	菅ノ久保・日影込行・高峰・大神山・両久保・神山・日向込行
扇　打	扇打・堀田共・笹畑ヶ高石神・小林	馬不入	丸山・馬入ラス・笹畑ヶ
牛ヨロ	牛ヨロ・池ノ上・アマ柿・桐木沢	白山平	堂ノ後・上ノ山・椚平・椚久保・白山平・イモノ沢
上ノ畑	前河原・桜窪・向山・切カケ・上ノ畑・釜ノ沢・越巻	迎　山	姥懐・迎山・上ノ山・上ノ台・横マクリ・上河原
清水沢	清水沢・堀田共・南向・杉ノ本・向山・コブタ沢・登戸	日影山	堀田共・向・長畑ヶ・穴子・釜ノ上・永久保・瀧ノユキー河原・日影
柳　沢	柳沢・舟久保・セキバ・日カケ・久保畑ヶ	向　山	向・手田・川向・向山・シヤシンバ(精進場)
沢　戸	堂端・朝日ツケ・沢戸・沢バタ・中ソリ・岩下	神　山	神山・小神山・日向・桑原
込　行	込行・日向込行・ヤセヲネ・申打・小アシマ・永久保	日　影	日影・大アシマ・恵沢・日影申打・越巻
中　反	中反・高見・大ア嶋・込行・高峯・エボシカタ・河原畑ケ	森ノ前	入ノ沢・沢バタ後・久保林・中道下・後田・河原・内手・堂ノ前
久　保	久保・竹キワ・ツヘソ・西カイト・上ノカイト	前河原	前河原・ハバ下・石成場・松久保・筧口
西南平	西南・南河原・夏内・井戸バタ・細入・桐久保	大久保	大久保・瀧ノ上・狐穴・杉久保・竹ノ中
高　峯	高峯・ホーク久保・森ノ後・森ノ中・坊主平・柳沢・細久保	馬　船	馬船・池ノ出口・ユヲーノ沢
鴉　平	鴉平・柳沢・白石	上白石	白石・登戸・横道
白　石	アクバ・白石・カヤバ	横畑平	横畑ヶ・夏内・堂ノ前・新井谷戸
丸　石	横内・田ノ頭・丸石・恵沢	宮ノ入	大久保・椚ソリ・ワラシ端ヶ・田ノハタ・柳沢・ナシ窪・高カキ・三ノ木峠・宮ノ入リ・三本松
大日影	菖蒲ノ本・向河原・大日影・山キワ・嫁ノ谷戸	高　市	高市・ヤセヲネ・上ノ代・三本松・瀧ノ本
左　方	左方・萩窪・柳沢・桐木沢	高　山	高山・大平・大久保
立　野	立野・瀬山沢・竹ノ上	不　動	不動・大立野・マコヤ・大笹・杉ナ畑ヶ・のと山
瀧ノ沢	瀧ノ沢・ホツ立・萩窪・竹ノ沢	松　平	松平・高山・中反リ
丸　山	丸山・荒田・水地釜・田ノ日影	迎	日影・迎・前田・山ノ根・舟久保・ワツ平
愛　輪	アタワ・割ツ山・加藤畑ヶ・守リナシ・アカヤ	甘葉沢	甘葉沢・大仁田・勝リ原・大日影・マガメ

表1　太駄新旧字名対照表(明治10年「太駄村地誌材料草稿」より)

神山(かみやま)　山の名前でもあり、隣の神川町(旧神泉村)との境界上にあります。山の名前としては横隈山(よこがいさん)ともいいますが、神聖な山として昔から信仰されてきたのでしょう。

寺平　山上の平場に古代 (又は中世) 寺院があったことを窺わせる地名です。寺院跡の痕跡は全く見られませんが、この場所の西側を沢が流れ、沢に沿って上州へ続く古道が通っている場所で、地名に何らかのヒントが隠されているのかも知れません。

馬不入、牛ヨロ、馬舟　牛馬の付く地名ですが、馬も牛も通れないような険しい場所を示す地名です。

菅ノ久保　『児玉の民話と伝説』上巻によれば、昔、太駄には菅ゲ久保沼という沼があり、江戸時代の享保 12 年 (1727) の大嵐で沼が決壊して、以来水がなく沼跡となってしまい、その後、戦争中に開墾されたといいます。この沼については、遠い昔に池のたもとに住む仙人の娘と東征中に立ち寄った日本武尊との縁談の話が残っています。

【児玉町元田】

元田は上武山地の東端部の尾根先端部と小山川 (旧身馴川) 北岸に位置し、元田の領域は狭く二つの尾根に挟まれた場所にあり、中央を小山川が流れます。小山川にそって県道の秩父児玉線が通っています。元田の範囲は南北に細長く、周囲を高柳・塩谷・稲沢・小平・河内に囲まれています。

江戸時代に元田地区からナウマンゾウの化石が発見されたことが旧家の古文書に記載されており、またその化石も残されています。これは、今は存在しない宝冠寺というお寺の境内にあった井戸から、享保 2 年 (1717) に日照り対策のために井戸浚いをした際に発見されたもので、当時は身馴川の大蛇伝説が付近に伝えられていたため、大蛇の骨が出土したものと信じられていました。

中世における元田地区の様子は不明ですが、隣接する河内地区には金鑽神社があって、児玉郡内には神川町二の宮にある金鑽神社の分霊社が多数あります。河内の金鑽神社もその一つです。分霊社の多くは共和地区の九郷用水を引く村々にあり、両者の関係の深さがうかがえます。その多くが児玉党武士と関係の深い地区で、金鑽神社・九郷用水・児玉党は密接な関係にあったと考えられてきました。現在では必ずしも単純にこの考えが正しいとはいえませんが、何らかのつながりがあったのではないかと思われます。小山川沿いの地区でも金鑽分霊社は河内地区と太駄地区にあり、九郷用水とのつながりは何ら見られませんが、児玉党との関係は河内地区が児玉党庄氏と関係があるので、元田地区も同様な関係があったのではないかと思われます。元田地区の区画は周辺の旧大字と極めて入り組んだ境界がなされており、かつて河内・元田・高柳付近は同一の郷であったものと思われます。

元田の集落を望む

江戸時代初期には、元田村と称し当初幕府直轄領でしたが、その後旗本松前氏と平井氏の知行となり明治まで続いています。明治以降は明治 22 年 (1889) に周辺村と合併し本泉村となり昭和 30 年 (1955) の合併で児玉町の大字となりました。以後は太駄と同様です。

《小字名》

前元田、後元田、岩崎、河内田、千手堂、薬師堂、古吹、申久保、新井山

《昔の小名》

○寛永４年 (1627)『河内村廿五石田畑寄帳』(明治 10 年『元田村地誌材料草稿』所収)

ほんちやうかいと、河内、ぢ志ん、くねきわ、うしろ (後)、さうとの、壱の沢、二の沢、宮下、ふしのこし (富士の越)、せんじゅとう (千手堂)、千手堂道下、千手堂、富士山、千手堂二の沢、ふじの沢 (富士の沢)、をのこだけ (男子嶽)、みやち (宮地)、しやふさわ (菖蒲沢)、川原、ほんしやうかいとう (本庄街道)、けんた (元田)、をなくぼ、宝冠寺屋敷、千手堂の後

明治 10 年 (1877)『元田村地誌材料草稿』には、12 の字を載せていて、上記の小字と異なる「ムソノ入・一の沢・二の沢・男子嶽」を載せています。逆に「申久保・新井山」が載っていません。また後元田の旧字として「後元田・台」としています。

《主な小字・小名の由来とその他の呼び名》

地がらぶち　小山川 (旧身馴川) と稲聚川の合流点付近に大きな淵があり、川の中央に大きな岩があって、２つの川の合流により岩の間で水車で米をつく地がら (石臼のようなものか) のような小さな窪んだ岩があったことに因むといいます。

鷹取山　昔、鷹がこの山に巣を作り、これを見つけた村の名主が鷹は高に通じ、石高が取れる吉兆として大切にしたことに由来するといいます。

薬師の曲がり　下元田の大カーブ付近を指す呼び名で、カーブの内側の山上に薬師堂があることから付きました。なお薬師の曲がりの呼び名は隣接する河内地区にもあります。

富士山　元田村の村社だった富士信仰の富士浅間神社との関係で生じた地名でしょう。

千手堂　かつて千手堂があったと思われますが、現在は残されていません。しかしながらここには大型の三連板碑 (県指定文化財) や経典供養塔などの石仏が残されています。

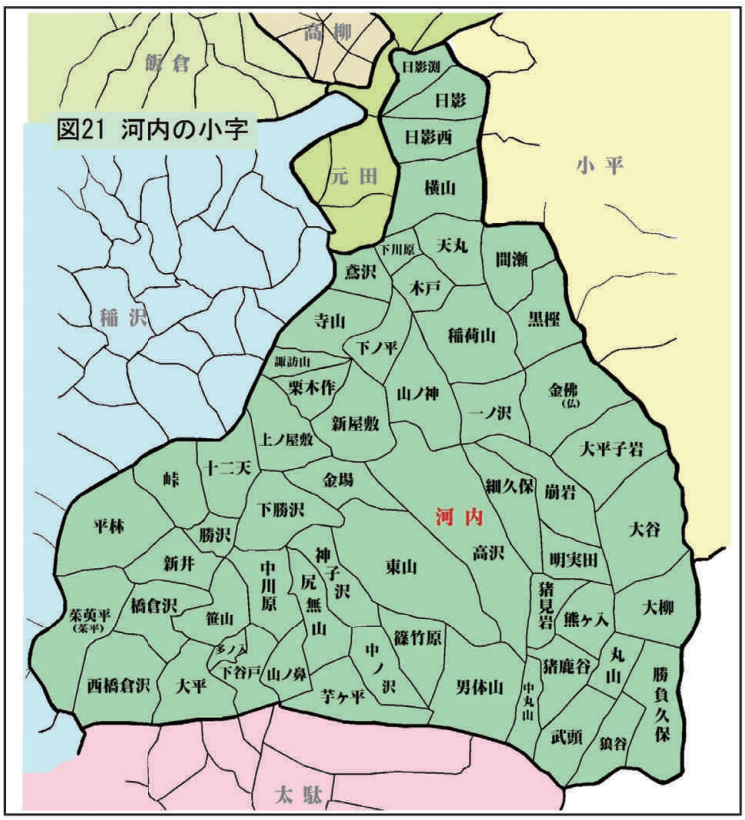
【児玉町河内】

河内の風景

河内は上武山地の二つの尾根に挟まれた場所にあり、中央を小山川 (旧身馴川) が流れます。小山川にそって県道の秩父児玉線が通っています。河内の北側は山を隔てて元田・高柳・稲沢と接し、東側は小平と、西側は稲沢と、南側は太駄と、峠を隔てて長瀞町野上と境を接しています。

河内の地名の由来については史料もなく不明です。河 (川) の地名がつくので身馴川との関係が考えられるでしょうか。歴史的には河内の地名が史料上に登場するのがきわめて遅く、江戸時代になってからです。児玉党の系図の『武蔵七党系図』には、庄氏の一族の庄三郎忠家の注記に“河内”とあり、忠家の孫の友定の注記には“金沢”とあることから、児玉町河内であり、金沢は隣の太駄に接している皆野町金沢のことと考えられます。児玉党の庄一族は児玉町の共和地区に広く分布しますが、身馴川を逆上った河内・金沢地区にも分布していたことをこの系図は示しています。特別に史料はないものの中世初期においては児玉党庄一族の支配地だったものと思われます。鎌

倉時代以降になると児玉党庄氏の動静は不明となり、河内一帯もどのような変遷をとげたのかわからなくなります。戦国期初期には隣の太駄が長尾氏の所領となりますので、おそらくは河内も同様な経過を歩んだものと思われます。その後、戦国時代には地元の伝承で、武士の木村一族が入り、開発して後に河内村の名主になったと伝えています。地元に伝わる古文書の天正 10 年 (1582) の「富田吉晴制札」には、木村越後守に対して馬瀬宿の竹木切り取り禁止を命じており、この段階で河内の豪族として木村氏が登場します。また地名として馬瀬 (間瀬) の名前も出てきます。この富田吉晴については不明ですが後北条氏の家臣でしょうか。河内も戦国時代後半には後北条氏の支配下にあったものと思われます。後北条氏の滅亡後は徳川氏の支配下に入り、幕府直轄領となりましたが旗本土屋氏・天領・旗本戸田氏・天領を経て旗本の伏見氏と大久保氏の所領となりました。その後は変わらずに明治期に至っています。



明治期以降は河内村連合戸長役場を河内村地内に設けましたが、明治 22 年 (1889) に河内村は太駄・元田・稲沢村と合併し本泉村を構成し、昭和 30 年 (1955) には児玉町・金屋村・秋平村と合併して児玉町の大字となりました。以降は太駄と同様です。

《小字名》

日影、日影渕、日影西、横山、下川原、天丸、木戸、稲荷山、鳶沢、下ノ平、寺山、諏訪山、山ノ神、新屋敷、栗木作、上ノ屋敷、一ノ沢、崩岩、明実田、細久保、高沢、金場、東山、篠竹原、男体山、猪見岩、熊ケ入、猪鹿谷、中ノ沢、神子沢、下勝沢、勝沢、十二天、峠、平林、新井、笹山、中川原、下谷戸、多ノ入、橋倉沢、茱萸平 (茱平)、西橋倉沢、大平、山ノ鼻、狼谷、勝負久保、丸山、大柳、大谷、武頭、芋ケ平、中丸山、尻無山、金仏 (佛)、大平子岩、黒樫、間瀬

《昔の小名》

◇近世文書に見られる小名　(寛文 2 年 (1662)『武州児玉郡野上組河内郷御検地水帳』)

浅神、ハこ畑、志りなし、前畑、長久保、きやう塚、むかい、むかい田、下かん戸、前田、もり下、森ノ上、田ノ入、竹ノ上、ほそ畑、大平、むかい畑、かの、はしくら沢、ゑのき入、くり坪、新屋敷、佛やくら、寺山、かんご沢、高沢、丸汰ぶり、ほそくほ、中丸、かまのいり、ちがい沢、むかい山合、日影淵、宮地、小森、下川原、横山、前畑、とうか林、尻なし、いと畑、かす、数畑、竹下、野神境宮ノ入、ませ谷、セうぶノくほ、むとうノ入口、間瀬竹径、間瀬、さいけか入、くろかし、大手子岩、金渕、金渕おね、きだう

《小字の変遷》

明治初期に現行の小字が確定されましたが、河内の場合は明治以前に使用された小名がかなり整理され、新たに設定された小字に含まれています。その状況が表２の対照表で、明治 10 年 (1877) に作成された『地誌材料草稿』に記載されています。右欄内が消滅した江戸時代の小名です。

小字名	消滅した旧字名	小字名	消滅した旧字名
山ノ神	下ノ竹・四反田・寺西	鳶　沢	横まくり
日影西	宮　田	下川原	田　通
木　戸	山ノ根	横　山	古吹・出口
天　丸	小　山	稲荷山	稲荷脇・伊丹堂
寺　山	姥ケ屋敷・峠・上ノ平	栗木作	栗平・戸板畑・上の山
平　林	富　田	一ノ沢	背戸・梅ノ木畑
明実田	梅ケ久保・背戸山・大道添	多ノ入	姥　懐
山ノ鼻	尻　無	中ノ沢	日影・竹原・釜ケ入・大平・自害沢
新屋敷	長畑・前ノ下・新敷添・千葉	上ノ屋敷	屋敷南・夏内・辻畑
新　井	遠グ子	崩　岩	南・焼飯山・鷹の背
高　沢	井戸根・高沢出口・仏矢倉	下谷戸	大境・細畑
細久保	尼玉窪・道ノ下・スジ山付	神子沢	丸畑・吉屋敷・中割・高頭
橋倉沢	炭焼場	東　山	栗坪・前通・鷹ノ背
金　場	東浦・水じやつぼ・コヌカ山	勝　沢	横まくり・猪捨場
下勝沢	びや渕・問場・川原畑	下ノ平	ビシャモン堂・川久保・畦ノ下
篠竹原	向　山	猪見岩	川原・堂ノ下
十二天	堂脇・銭上・不動	中川原	平滑・尻無・堂下
諏訪山	下村・きとくや	猪鹿谷	台切場
男体山	やむ谷戸・向山	日影淵	日影淵
日　影	日　影	下勝沢	びや渕・問場・川原畑
新　井	遠グネ	茱　平	茱　平
中丸山	中丸山	大　柳	大　柳
黒　樫	黒　樫	間　瀬	間　瀬
芋ヶ平	芋ヶ平	武　頭	武　頭
勝負久保	勝負久保	丸　山	丸　山
尻無山	尻無山	大　谷	大　谷
狼　谷	狼　谷	西橋倉沢	武とみ
篠　山	富　田	峠	峠
大　平	大　平	大手子岩	大手子岩
金　仏	金　仏	熊ケ入	大平・数畑・堂ノ入

表２　河内新旧字名対照表

《主な小字・小名の由来とその他の呼び名》

寺山（てらやま）　かつて中世の寺院があったことに由来します。低い山上に幾つかの平場があり、現在では畑となっていますが、周辺から風鐸や瓦塔の破片が採集されています。

神子沢（かんござわ）　身馴川 (現小山川) に注ぐ沢の名前の一つに由来しますが、昔に帰化人の神戸氏が土着したとする説もあります。鉱山関係、つまり羊大夫伝説にも関係するかもしれません。また山の神を祀っているのでこれに由来するものかも知れません。

新屋敷（あらやしき）　中世の時代に河内村を開墾したと伝わる豪族の木村家が字勝沢より数代後にこの地に

分家したことに由来するといいます。また身馴川の氾濫によりこの地に移転したことによるともいわれています。

経塚山　羊大夫伝説とも関連し、鉱山の採掘成功を祈願して経を奉読したことに因むといわれています。

日影　むかし村に大きな杉が数本あり、この杉のため大きな日影が生じたことに因むといいます。

薬師の曲がり　薬師の曲がりは元田地区にもありますが、河内の場合も字神子沢の入り口付近のカーブを指す呼び名で、かつてここに石仏の薬師様があったことによります。この石仏は現在、児玉の雉岡城跡内に移転されています。

塔の曲がり　字下ケ谷戸の山上にこの地の旧家の木村氏が正徳４年 (1714) に建てた宝篋印塔があり、この山の下を秩父道が大きくカーブしていることからついた呼び名です。

つじ山　群馬県西部から秩父郡内に伝えられている羊大夫伝説からきた呼び名と思われます。「つじ山」は「羊山」から来たもので、付近には金場や金仏などの地名があり、鉱山の採掘場に因むものでしょうか (『児玉の民話と伝説』上巻・『児玉風土記』ほか)。

獅子見岩　秩父郡から山を越えて猪の群れが神子沢へやってくるのを見張ったことに由来するといいます。

【児玉町稲沢】

稲沢は本泉地区の北側に位置し、小山川の支流稲聚川の北側の斜面に集落があります。近世には上稲沢村・中稲沢村・下稲沢村の三村に分かれていました。稲沢の名前の由来については確かな記録もないのですが、中稲沢に鎮座する古社の稲聚神社との関係も考えられます。神社の社伝には、川 (稲聚川) の水源付近に昔から豊富な湧き水があって、下流の住民が水田耕作に多大な恩恵を受けたことから、この地に稲聚神社を創建し稲沢と呼ばれるようになったといいます。なお、明治初年に小字が整備されたときに、江戸時代に三村に分かれていた関係で、小字の最初に上中下 (上ノ・中ノ・下ノ) を付けて表現しています。なお、明治期の地誌では、読みは「上ノ何々」としますが、表記上は「ノ」を取って上何々と記した場合もあるようです。

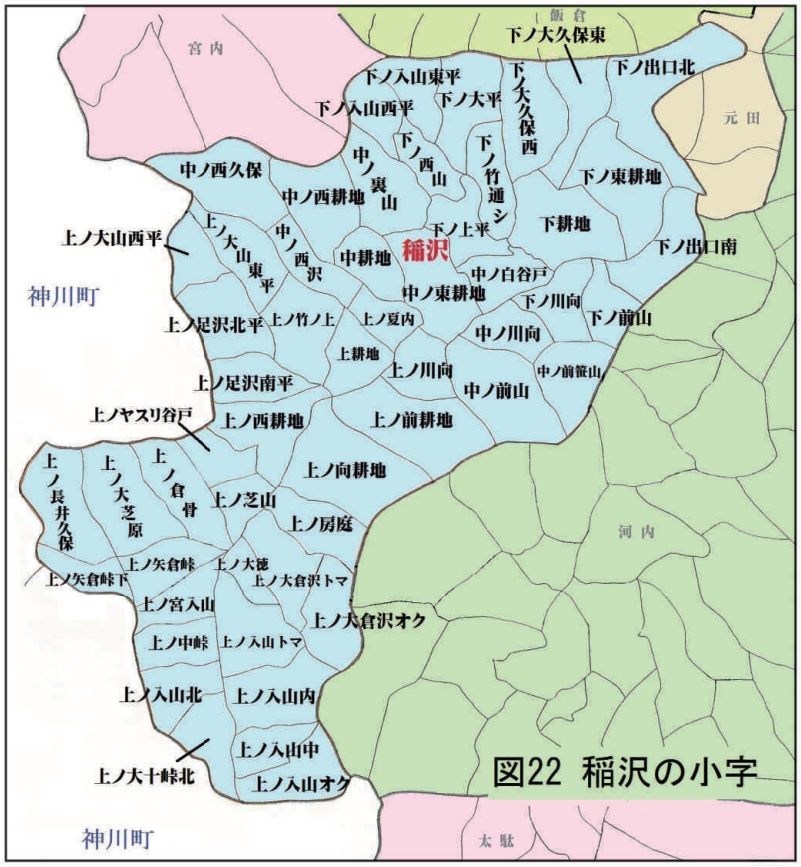


図22 稲沢の小字

《小字名》

下ノ出口北、下ノ出口南、下ノ東耕地、下耕地、下ノ大久保東、下ノ大久保西、下ノ竹通シ、下

ノ大平、下ノ入山東平、下ノ入山西平、下ノ西山、下ノ上平、下ノ川向、下ノ前山、中ノ白谷戸、中ノ東耕地、中耕地、中ノ裏山、中ノ西耕地、中ノ西久保、中ノ西沢、中ノ川向、中ノ前山、中ノ前笹山、上ノ夏内、上耕地、上ノ竹ノ上、上ノ大山東平、上ノ大山西平、上ノ足沢北平、上ノ足沢南平、上ノ西耕地、上ノヤスリ谷戸、上ノ芝山、上倉骨、上ノ大芝原、上ノ長井久保、上ノ矢倉峠、矢倉峠下、上ノ宮入山、上ノ中峠、上ノ入山北、上ノ大十峠北、上ノ入山オク、上ノ入山中、上ノ入山内、上ノ入山トマ、上ノ大徳、上ノ大倉沢トマ、上ノ大倉沢オク、上ノ房庭、上ノ向耕地、上ノ前耕地、上ノ川向

中稲沢の養蚕住宅

《昔の小名》

○寛永４年 (1627) の『武州稲沢村畑方検地帳』、寛文２年 (1662) の『児玉郡野上組稲沢郷屋敷御検地水帳』

つほの内、大ひら、せはや、桜の木、下中き、志ろかいと、み年、にしざわ、中き、おきくほ、 柳沢、すわのこし、たらのこし、大み年、こしまき、ほそミ、いなりつか、かけの上、宮のわき、うわ平、こふき、横道、くわ平、新地屋しき、大くほ、くつはたけ、稲荷、明神の東、天神の前宮の裏、宮の脇川端沢より向、白谷戸道下、久保桜の木下、屋敷之前通、屋しき裏、上平堂之上、上平道下、上平道上、上平道添、上平の内つつく、横道、水之入、大平峠たいら、瀧沢、竹の上、西沢、竹通東山わき、竹通屋敷裏、寺屋しき、地蔵堂之裏、うつ木之内、ぢ志ん屋しき、ぢ志ん、東山、のほつと、大久保、たかね越、こふき、こふき下り、上こふき、くつはた、前畑

表３が、明治10年 (1877) の『地誌材料草稿』にみる小字の変遷で、この資料では小字名の内、「ノ」の表記が省略されています。

小字名	旧字名	小字名	旧字名
下出口	出　口	下大久保東	大久保
下耕地	立　道	下大平	大　平
下竹通シ	竹　通	下大久保西	大久保・孝子平
下入山東平	下入山東平	下西山	水の入・稲荷塚・瀧沢
下入山西平	下入山西平	下上平	上　平
中白谷戸	白谷戸・桜木下	中東耕地	中・横道・沖久保・諏訪平
中耕地	中・中峯	中裏の山	柳沢・十二天
中ノ西耕地	大　峰	中西久保	マガクボ・西沢
上大山東	尾勘房	上夏内	夏　内
上耕地	上・新井・中内手	上竹ノ上	竹ノ上
上大山西平	雨乞山	上芹沢北平	尾勘房・細窪
上芹沢南平	芹　沢	上西耕地	西裏・腰巻
上矢摺谷戸	矢摺谷戸	上芝山	芝　山
上倉骨	倉　骨	上大芝原	恵比寿作り
上長井久保	長井久保	上矢倉峠	牛念房
上矢倉峠下	梨ノ木平	上宮ノ入山	宮ノ入・竹ノ久保
上ノ中峠	中　峠	上入山並	寺内作り
上台重峠並	台　重	上入山奥	クミノ木平
上入山中	板ノヘリ	上入山内	調理山
上入山笹	南谷戸・杉ノ久保	上大徳	大徳
上大倉沢笹	大倉沢	上大倉沢奥	大倉沢
上房庭	桜林・房庭	上向耕地	上ノ台・菖蒲久保
上前耕地	向山・大久保	上川向	御伊勢山
中前山	若　柳	中笹山	笹　山
中川向	笹　山	下川向	大　山
下前山	霧　山	下出口	南出口
下東耕地	小吹・東山		

表３　稲沢新旧字名対照表

《主な小字・小名の由来》

稲沢の小字・小名の特徴の一つに大きな時代的な変化が見られます。江戸時代初期には白谷戸・柳沢・西沢・水の入・荻窪・大久保などの固有地名がありましたが、崖(がけ)の上とか屋敷とか川端地蔵堂の西などのように当時の人でなければ分からないような通称的な呼び名も多くありました。しかし近世末期から明治

初頭には 66 の小字に類する地名がありました。

稲沢は近世には上中下の三村に分かれていましたが、明治初年に合併して一村になっています。そのためか小字の上に上中下の文字が付けられていることがわかります。また明治 9 年 (1876) の段階で小字が整備されたと思われますが、○○耕地などの新しい字名も生まれています。小字の確定の段階で昔から使われてきた小名で失われたものも多くあって、その変遷は「稲沢村誌材料草稿」に見られる記述でも窺えます。

(5) 共和（きょうわ）地区

共和地区の由来は明治 22 年 (1889) 4 月 1 日に蛭川村・高関村・入浅見村・下浅見村・下真下村・今井村の六村が合併し共和村を構成したことから始まります。明治 33 年 (1900) に上真下村と吉田林村が共和村に加わり、昭和 32 年 (1957) には共和村が児玉町と合併することにより共和村の名は消えることになりました。その時に共和村大字今井は本庄市に分離しました。この合併により共和の名は一旦は消え、大字がそのまま新しい児玉町の大字に引き継がれています。平成 18 年 (2006) に児玉町と本庄市が合併したのちも、共和の名は地区名や小学校の名前として使用されています。

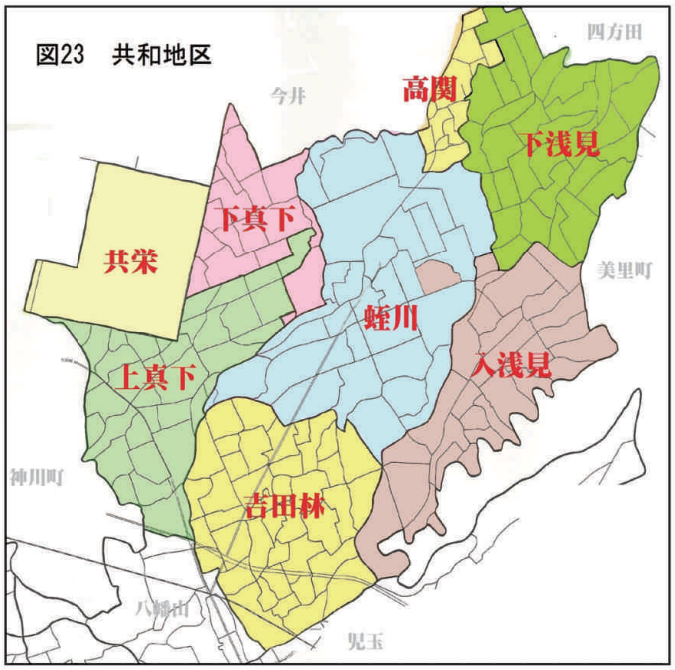


図23　共和地区

【児玉町蛭川（こだまちょうひるがわ）】

蛭川は共和地区の中央に位置しており、中央を北東方向に女堀川が流れ、集落もこの自然堤防上に集まっています。女堀川の南北両側に水田が広がっており、かつては一帯が児玉条里水田でしたが、現在は圃場整備事業の施工によりその条里の景観は失われました。蛭川の名の由来は明確ではありませんが、本庄地域にも蛭川の地名が残り、おそらく現在は失われた旧河川の名前だったものと思われます。蛭川は本庄地域の市街地の南側を流れていたようですが、上流がどこまで続くのかは不明です。なお下浅見地内での発掘調査で、古代の大溝（おおみぞ）が確認されていますが、あるいはこの大溝が、後の九郷用水となったのかも知れません。そうであれば、本庄と児玉の蛭川が結び付く可能性もあるでしょう。地名の起こりとしては、渇水期に流水の減少が顕著となる「干る川」に由来するという説があります。当て字として「蛭（ひる）」の字を当てたのかも知れません。

蛭川は古代において児玉条里が整備されており、古くから開発された地域であることがわかります。中世においては児玉党庄氏系蛭河氏の名字の地で、暦応 3 年 (1340) の安保光泰（光阿）譲状にも蛭河郷として見えています。現在は蛭川と書きますが、中世においては蛭河と書きました。近世には蛭川村と称し、近世初頭には短期間ですが徳川家康の配下諏訪氏の所領となりました。その後は旗本駒井氏の所領となり明治に至っています。村高は 860 石余りで、面積は共和地区の旧大字の中で最も広く、水田の占める割合が多い地域です。蛭川中央の自然堤防一帯と南側に畑が広がり、山も生野山北側斜面が含まれています。明治期以降は蛭川村に連合戸長役場が

置かれ、蛭川村の名主だった荻野家が連合戸長に任命されています。明治 22 年 (1889) の合併では蛭川村は高関・入浅見・下浅見・下真下・今井村と合併し共和村を結成しました。役場は共和村の中心に位置する蛭川村にそのまま置かれました。共和村は明治 33 年 (1900) に上真下・吉田林村を合併し、昭和 30 年 (1955) の合併では他の地区より遅れて昭和 32 年 (1957) に児玉町と合併して児玉町となり、以降は他の地区と同様です。

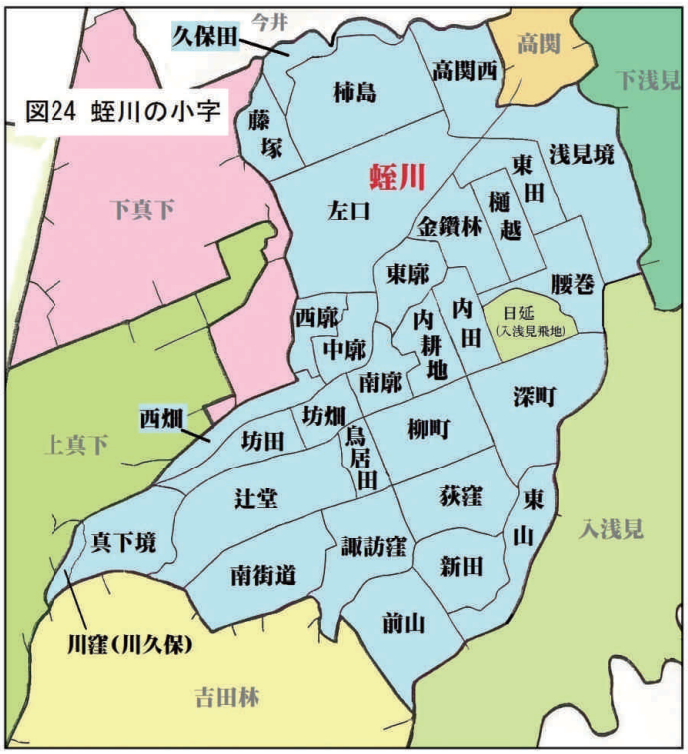


図24 蛭川の小字

《小字名》

真下境、西畑、西廓、東廓、中廓、南廓、坊畑、坊田、辻堂、南街道、諏訪窪、前山、新田、東山、荻窪、内耕地、柳町、深町、金鑽林、樋越、柿島、浅見境、藤塚、左口、川窪 (川久保)、腰巻、東田、高関西、鳥居田、内田、久保田 (窪田)

《主な小字の由来》

柳町・深町・樋越（やなぎまち・ふかまち・といごし） 条里に関係する地名と推定されます。特に柳町と深町の「町」の文字は条里の面積を示す関係が窺える地名です。樋越はトイゴシといい、古い用水堀を樋により跨（また）いで水を流す場合をいいます。地名として蛭川以外でも吉田林・下浅見地区に残っています。新規に水田を開いた場合等に厳しい水利慣行によって従来の用水堀より水の供給を受けられず、用水堀も新たに整備しなければならなかったことに由来する地名と思われます。こうした地名は、条里の施工やその後の新田開発、水利慣行など多くの研究材料を提供してくれます。

字藤塚に所在した富士塚（昭和 63 年撮影）

藤塚（ふじづか） 不二塚とも書きますが、富士塚とも関連するでしょう。実際に水田地帯の中に古墳状の塚が存在しましたが、現在は圃場整備により消滅しています。古くは七色塚とも呼ばれ、古墳ではないかと思われましたが、発掘調査の結果、中世の遺構と確認されています。おそらくは宗教上の塚でしょう。塚の頂上には祠が存在しました。周辺には九郷用水の北流が流れ、さらにその支流を藤塚堀、用水堰を藤塚堰と呼んでいました。

図 25 蛭川東廓の地籍図

東廓・西廓・中廓・南廓（ひがしぐるわ・にしぐるわ・ちゅうぐるわ・みなみぐるわ） 蛭川の中央部の集落にある地名です。廓とは郭・曲輪などとも書き、区画された場所を指しますが、城・館などの一区画な

どを指す場合が多いと思われます。実際に蛭川の集落を区画した名称です。特に東廓には中世の館があったことが窺えます。現在では廓内の中央を児玉新道が通り、目立った遺構も見られませんが、地籍図では館を囲む堀跡が道路となっていることがよくわかります。中廓も方形に道路が走り館跡ではなかったかと推定され、南廓でも伝承では土塁の存在が伝えられています。おそらくは女堀川の自然堤防上に複数の館跡が存在したのでしょう。付近では中世の集落跡なども発掘調査されています。これらの館跡は児玉党蛭河氏縁(ゆかり)の館跡ではないかと考えられます。

金鑽林(かなさなばやし)　女堀川の自然堤防上北東側に位置しています。古くは金鑽神社があったことから、この名前が付きました。神社が存在した当時は社殿とともに周辺は林となっていたのでしょう。現在、金鑽神社は字坊畑にある駒形神社に合祀されています。そのため字金鑽林には神社はなく、開墾されていて当時の面影は見られません。

鳥居田(とりいだ)　字坊畑の前に位置しています。駒形神社の鳥居の前であるので、これに由来するものと思われます。

坊畑(ぼうばた)・坊田(ぼうだ)　地名の由来は不明ですが、坊畑地内の駒形神社脇に釈迦堂と墓地が存在するので、これに関係する地名と思われます。

なお、蛭川地内には内田・深町・腰巻に囲まれて日延の小字がありますが、これは入浅見の飛地です。

【児玉町下真下(こだまちょうしもましも)】

下真下は共和地区の北部に位置しています。北部には児玉工業団地があり、南部から東部にかけて条里水田地帯が広がっています。近年の圃場(ほじょう)整備(せいび)事業により条里遺構は消滅しました。下真下は隣の上真下と元は一村であったものと思われます。戦国時代には、本庄市今井の鈴木家文書によると、真下左京亮と下真下新六郎の名前が見られ、児玉党真下氏の系譜を引く武士がこの地にいました。下真下には古代末期からすでに児玉党の真下氏が存在しました。この真下氏の館は上真下の字東と中内面付近にあったと考えられますが、下真下地区にも数箇所の館跡が存在します。児玉工業団地敷地造成の際の発掘調査でも中世の遺構が検出されています。また字石橋にある観音堂は真下氏が建立したとの伝承があります。それは「一の谷の合戦で真下基行(もとゆき)が乗っていた馬に平家方の放った矢が当たり、基行は最後と観念したところ、突然馬は空を飛び、安全な所まで飛んで行き基行は命拾いした。これは日頃より金鑽神社を深く信仰していたための神徳によるものと思い、所領に観音堂を建立した」というものです。

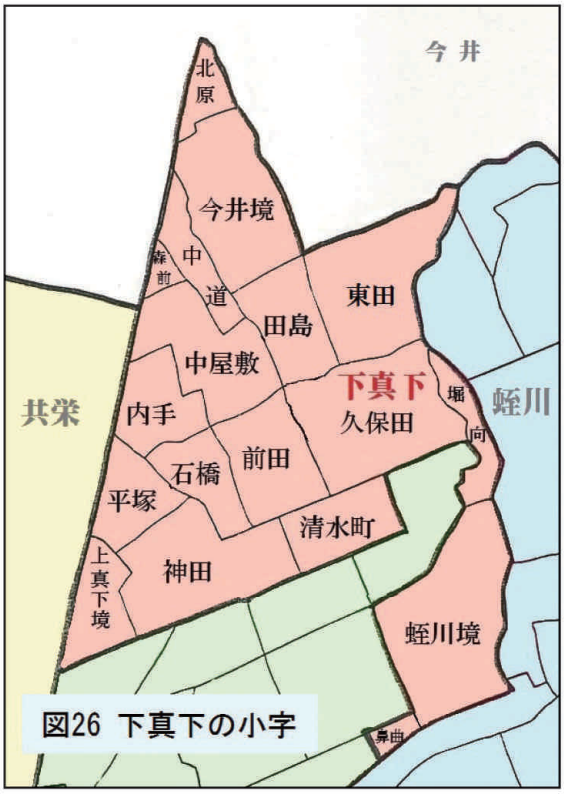


図26 下真下の小字

南北朝の動乱期には下浅見の浅見山で起きた薊山(あざみやま)合戦で真下春行が南朝方として参戦し討ち死にしたと旧家の家伝書は伝えています。戦国時代には後北条氏の支配下にありましたが、先に触れた下真下氏などの存在もありました。後北条氏の滅亡後、この地域は徳川氏の支配下に入りますが、家臣の石丸氏・小菅氏・諏訪氏の所領となり、特に諏訪氏は武州蛭川を与えられたことが

知られています。下真下の旧家の家伝書には諏訪氏の所領として蛭川・下真下・今井・吉田林があったといいます。小菅氏と諏訪氏は短期間でこの地を離れ、諏訪氏は上州総社へ転封していき、下真下村は幕府の直轄領となりました。その後、旗本の佐久間氏・日向氏・岡登氏などを経て、加藤氏と大岡氏の所領となり明治期に至っています。その後は蛭川や高関と同様な変遷を歩んでいます。

字石橋の観音堂

なお、昭和 18 年 (1943) に陸軍児玉飛行場が造られた際には、その敷地に下真下も北側の一部が含まれることになりました。これにより飛行場に含まれた一部の小字は消滅し、一部の小字は面積が縮小しました。またこの飛行場の造成に伴い、金佐奈神社・龍泉寺をはじめ、民家から墓地までが、飛行場の南側や字の南部へ移転しました。

《小字名》

北原、今井境、田島　中屋敷、中道、森前、内手、上真下境、平塚、神田、東田、石橋、前田、清水町、久保田、堀向、蛭川境、鼻曲、将監塚・大道北・金佐奈・森前・古井戸・道間・西原

上記の小字の内、児玉飛行場の造成により、「将監塚・大道北・金佐奈・森前・古井戸・道間・西原」が下真下の地名から消滅しました。

《昔の小名》

○明暦 2 年 (1656) の「武州児玉郡真下村名寄帳 (貞享 4 年 (1687) の写)」には

にしの前 (西前)、十おうたう (十王堂)、かなさら (金鑽)、きた出口 (北出口)、ぶたい (舞台)、にしのくほ (西久保)、かミた (神田)、清水まち (清水町)、ひかし (東)、くりつほ (栗坪)、きたはら (北原)、屋しきの出口、ひかしのた志ま (東田島)、真下さかい・上真下さかい、ひる川さかい (蛭川境)、かなさらにし (金鑽西)、はら (原)、きたあらひ (北新井)、いとはた (井戸端)、屋しききた (屋敷北)、屋しき祢 (屋敷祢)、ひら塚 (平塚)、いけのまち (池町)、前、いなりきた (稲荷北)、出口、たうのにし (堂西)、きの志た (木の下)、くほ (久保)、ほりむかへ (堀向)、おいせ前 (お伊勢前)、にしたい、かみたにし前、かんのんめん (観音免)、いまいさかい (今井境)、田しま (田嶌)、いしみたう (石見道・石御堂)、きたいしみたう、屋しき祢きた、ひかしのまへ (東の前)、ひる川ほりむかい (蛭川堀向)、かいたうはた (海道端)、せと、屋しきにし（屋敷西)、明神前、きた (北)、屋しき前、むかい (向)、いしはし (石橋)、堀むかい（堀向)、にし原 (西原)、かのへ塚 (庚塚)、明神西、明神ひかし (明神東)

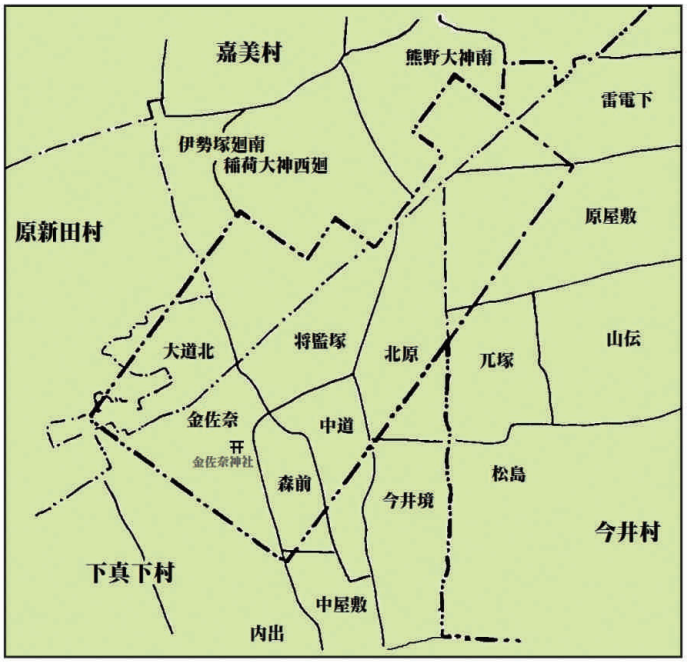


図27 下真下北部の小字
※図中央の点線の範囲は、戦後に設定された共栄（小字北共和）の範囲を示しています。

○貞享 4 年 (1687) の『武州児玉之郡真下村勘定帳』には、

石御堂、北新井、東、西前、久保、清水まち (清水町)、くりつほ (栗坪)、西原、かな

さら(金鑽)、今井境、せと、東前、蛭川境、むかい田(向田)、かのへつか(庚塚)、北屋敷口、屋敷祢、田嶌、神田、伊勢前、上真下境、ぶたい(舞台)、古井戸、東屋敷前、北出口、西ノ久保、かとはた、前、ひらつか(平塚)、くわんおん面(観音免)、屋しき西、池ノまち(池町)、田はた(田端)、いとはた(井戸端)、北、屋敷前、屋敷北、かなさら東(金鑽東)、原、かいとうはた(海道端)、北原、むかい(向)、屋敷出口、西久保、堂南、堂ノ西、西原神かし塚、重おう堂(十王堂)、いなり北(稲荷北)、前、堀ひかし、明神前、立野前、ひかしノ前(東ノ前)、ひる川むかへ(蛭川向)、

があります。

○文化5年(1808)の『名寄帳』には、

字北新井、字江戸端(井戸端カ)、字西原、字西前、字西久保、字はな曲、字東前、字東、字今井境、字神田、字せど、字海道端、字上真下境、字金鑽、字金鑽東森根、字金鑽東、字金鑽西、字金鑽前、字金鑽浦、字屋敷、字屋敷前、字屋敷付、字屋敷浦、字北屋敷根、字北屋敷付、字前屋敷祢、字東屋敷前、字屋敷根、字居屋敷前、字居屋敷の内、字伊勢木、字出口、字志い出し、字舞台、字堀向、字久保、字平塚、字道間、字石見道、字北出口、字平塚道下、字田端、字西原大道端、字東田端、字海道端、字久保、字かのへ塚、字前、字前出口、字古井戸、字東稲荷木、字稲荷木、字田島、字前田島、字東田島、字北浦、字かち林、字大道端、字道前、字立野前、字立野前道北、字将監塚、字堂西、字十王堂、字十王堂西、字堂前、字蛭川境、字神送塚、字原新田境、字志いたは、字北せど、字石橋、字北原、字伊勢木

上記以外にもう一冊の同年作成の「名寄帳」があり、上記の字に含まれないものを抽出すると、下記の地名があります。

北、井戸端、明神前、明神うら、原、伊勢前、庚申塚、出口、前田島、いなりの北、神田久保、平塚久保、木の下

○明治5年(1872)の「畑方名寄帳」と「田方名寄帳」には次のようにあります。

字北新井、字井戸端、字北屋敷根、字神田、字伊勢木、字西原、字志い出し、字上真下境、字平塚、字金鑽東、字田島、字庚塚、字出口、字大道端、字中道、字東前、字今井境、字せど、字海道端、字将監塚、字屋敷前、字堀向、字屋敷浦、字かじ林、字無台、字久保、字金鑽、字金鑽浦、字石見道、字金鑽前、字北出口、字田端、字道前、字西原大道端、字前、字前出口、字海端、字金鑽西、字東前、字西前、字東田端、字古井戸、字稲荷木、字屋敷付、字東、字北原、字原新田前、字前屋敷根、字向、字立野前、字栗坪、字堂西、字北屋敷付、字北浦、字西台、字西久保、字十王堂、字居屋敷之内、字堂前、字神送り塚、字蛭川境、字鼻曲、字道間、字北、字石橋、字西原屋敷しり、字うば塚、字阿い町、字清水町、字東田、字久保田、字向田、字池ノ町、字観音免、字前田、字下田、字向端

下真下の集落

この他にも嘉永5年(1852)の「田畑名寄帳」には上記の史料に見られない字がありますので次に示します。

伊勢森北、上田、伊勢北、宮東、東出口、東ノ方

《主な小字の由来》

将監塚(しょうげんづか)　下真下の旧家関根家の先祖将監を葬ったことより付いた地名といわれますが定かではありません。

鼻曲(はなまがり)　正しい由来は不明ですが、下真下の南部にあって、細長く南端が西に折れ、鼻が曲がったような形をしており、これより付いた地名でしょうか。

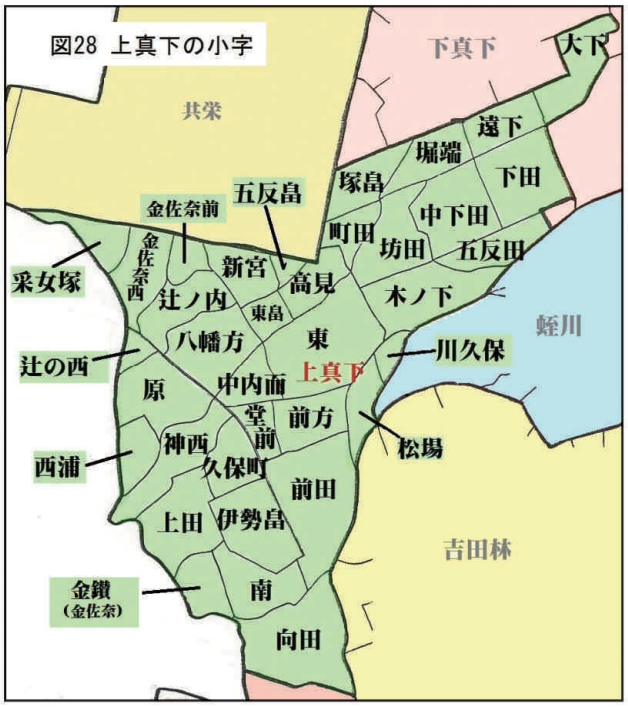
金佐奈(かなさな)　現在、金佐奈の小字名は工業団地内に入っており消滅しています。昭和18年(1943)

の陸軍児玉飛行場の造成以前はこの地に金佐奈神社がありましたが、飛行場の造成に伴って南部の現在地に移転しました。なお江戸時代の名寄帳には「金皿」、「かなさら」等とか書かれていることから、昔は「かなさら」と発音していたのかも知れません。

諏訪塚（すわづか）　諏訪安芸守の所領の時代に諏訪社を祀ったことにより付いた地名といわれます。

内出（うちで）　集落の集中する地域に多く見られる地名です。

【児玉町上真下（こだまちょうかみましも）】



上真下は共和地区の西端部に位置しています。北部は児玉工業団地があり、南部から東部にかけては条里水田地帯で、上真下の中央を女堀川が東西に流れ、上真下全域が平地となっています。また中央西寄りを南北にかつて本庄道と呼ばれた県道が通っています。

上真下は隣の下真下と元は一村であったと思われます。戦国時代後半頃に２村に分村しました。本庄市今井の鈴木家文書には真下左京亮と下真下新六郎の名前が見られ、児玉党真下氏の系譜を引く武士がこの地にいました。上真下には古代末期からすでに児玉党の真下氏が存在し、治承４年 (1180)、源頼朝が石橋山合戦で敗れたとき、平家方に真下四郎重直がいたことが『平家物語』に見えます。この真下氏の館は上真下の字東と中内而付近にあったと思われ、地籍図をみると方形に巡る地形が確認できます。この場所は共和地区の条里水田地帯に九郷用水を供給する重要な場所に位置しており、特に九郷用水が南北に分岐する内側に立地しています。

江戸時代に入ると上真下村は村高 637 石で、旗本加藤・門奈・安藤３氏の知行地になり、明治期初頭まで続きました。上真下村は九郷用水の南北分流の地に位置していることから、九郷 22 ケ村用水組合の割元村を蛭川村とともに務めていました。この用水に関しては嘉永６年 (1853) に九郷用水組合内で大きな水争いが起きています。明治維新以後は上真下村は共和地区の他の村とは異なり、明治 22 年 (1889) に吉田林村と２ケ村組合を結成して、明治 33 年 (1900) になって共和村と合併しました。以後は共和地区の他村と同様な経過を歩んでいます。なお、昭和 18 年 (1943) に造られた陸軍児玉飛行場は、上真下の北部も含まれています。これにより上真下北部の小字の面積が縮小したり、一部消滅したものがありました。なお、大正 11 年 (1922) ３月には字神西より蛭川に通じる学校大道が設けられています。

《小字名》

向田、神西、金鑽、伊勢畠、南、堂前、上田、前田、久保町、前方、松場、西浦、川久保、辻ノ内、中内而、東、辻ノ西、東畠、八幡方、新宮、原、高見、五反田、木ノ下、大下、町田、五反畠、坊田、下田、中下田、金佐奈前、金佐奈西、遠下、采女塚、堀端、塚畠

(山ノ神、今宮、金佐奈東、大原、大塚、座頭原、美女木)

※(　)内は飛行場造成時に消滅した小字。また、高見・五反畠なども圃場整備後に他の小字と再編成されているようです。

《昔の小名》

明治 21 年 (1888) に編さんされた『上真下村地誌』に、慶長 16 年 (1611) の検地帳と寛政 12 年 (1800) の名寄検地帳の抜き書きがあるのでそれより抜き出してみます。

六たん田 (六反田)、とうのまへ (堂の前)、むかひ田 (向田)、とりひ田 (鳥居田)、ミのふ田、くほの町 (久保町)、くさくら田、わけぢ、かなさな (金佐奈)、かミ田 (上田)、せき口 (堰口)、五たん畑 (五反畑)、今宮、つつけばし (続橋)、ふちのうへ (渕の上)、志んくふ (新宮)、松場、下田はた、木ノ下、古屋敷、前畑、東原、宮田、池尻、高見、 中下田、東原行人塚、東原大原、辻ノ内、下真下境、本庄道北、大川脇、前田、榎ノ下、川久保、美女木、大塚、遠下、中四郎、原新田前屋敷、ほふたはた、今井境きた、五反田、やはたがた (八幡方)、はし場、東畠、西浦

上真下の金鑽神社付近

《主な小字・小名の由来》

中内而（なかうちで） 集落の中央にある内手の意でしょう。関東地方では比較的内手の地名が多いようですが、児玉地域内でも、下真下・入浅見・秋山に内手が見られます。

堂前（どうのまえ） かつて釈迦堂が存在し、その釈迦堂の前を意味します。永らく建物がない状態でしたが現在、釈迦堂が再建され堂前には三基の庚申塔や地蔵・二十二夜塔・弁才天の石塔があります。弁才天は、ここに極（ごく）小さな池があったとも言われ、それに関係して祀られたのでしょう。

つづけばし 続ケ橋と書きます。上真下・吉田林・八幡山境に残る小名で、特に川越道 (中山道脇往還) の八幡山町分にある橋の名前にもなっています。

中四郎（ちゅうしろう） 忠四郎（ちゅうしろう）とも書き、「ちゅうじろ」とも呼ばれます。人名よりついた名前ですが、南部吉田林境を流れる九郷用水の堰の名前にもなっています。江戸時代の用水関係文書にはこの堰に関連し土地の維持方法をめぐる争論が起きています。現在ではこの堰を忠城堰 (ちゅうじろぜき) とも書いています。

金佐奈（かなさな） 神川町二の宮に鎮座する武蔵二の宮の金鑽神社の分霊社が存在することより付いた地名です。本社も古い記録では金佐奈神社と書かれています。検地帳では金佐奈前・金佐奈東・金佐奈西などの小名を載せています。この地名は金佐奈神社を中央にしてその周辺部を指しています。現在では金佐奈神社は字神西に移転しており、この地にあった日枝神社と合祠して金鑽神社となっています。跡地と周辺地域は工業団地内に含まれており、金佐奈前・金佐奈東・金佐奈西・座頭原・大塚・山ノ神・森北・大原などの小字が消滅しています。

金鑽（かなさな） これも金鑽神社の分霊社に因む地名ですが、隣接する西側が神川町八日市なので、かつて八日市村にあった金鑽神社の旧地と思われます。また伝承によれば、この付近に薬王寺あるいは八荒神があったとも言われています。

本庄道北 かつて八幡山町の北部で藤岡道と分岐した本庄道が前真下を通り大字を南北に縦断した後、北西へ延び、八丁（はっちょう）(町) 八反（はったん）と呼ばれた工業団地内を経て旧本庄市へ達していました。

美女木（びじょぎ） 伝承によれば字の中の畑に樹木があり、むかし美女が殺害されたことに因むといいます。

采女塚（うねめづか） これも伝承によれば塚と墓石があって、采女という巫女（みこ）の墓と伝えます。しかし『上真下地誌』の編者は墓石が巫女のものとは思えないとし、別の説として、戦国時代末期に当村は後北条氏の支配下にあり、後北条氏の家臣に奥采女正という武士がいて、今井の鈴木家文書にも奥采女の名前が見えるので、これと関係するのではないかとしています。

前真下（まえましも）　これは小字・小名ではありませんが、上真下の南部の集落を称して前真下と呼んでいます。

図29 児玉町共栄の小字

【児玉町共栄】（こだまちょうきょうえい）

共栄は共和地区の北西部に位置しており、全域が平地であり中央を通る道路にそって両側に集落があります。共栄の北部は児玉工業団地で、南側には畑が広がっています。かつてここ一帯は八丁八反（はっちょうはったん）とも呼ばれ、北部を本庄市に通じる道路が通っており、周辺は鬱蒼とした自然林が広がっていたともいわれますが、現在ではまったくその面影はありません。共栄は上真下村と下真下村の一部から新しく作られた区域です。この区域は児玉町・神川町・上里町・本庄市の境界のある場所で、一円が平坦地となっています。太平洋戦争の勃発（ぼっぱつ）に伴って陸軍は児玉郡内に飛行場の造成を計画し、郡のほぼ中央に位置するこの区域が自然林であったことから選定されたものと思われます。陸軍児玉飛行場は昭和 17 年 (1942) の春より工事が始まり翌 18 年 10 月に完成しました。この飛行場には当初陸軍熊谷飛行学校より児玉教育班が派遣され、その後、児玉教育隊が出来て教育が行われました。さらに児玉基地へと変わり、終戦間際には実戦部隊も一時駐留したといいます。戦後になって食糧事情の悪化に伴い、飛行場跡の開墾が計画され、跡地は農業開拓地と称され、昭和 20 年 (1945)10 月より復員引揚者や疎開者、さらに周辺市町村の二・三男を対象として開拓団が結成され開墾が行われました。開墾地は児玉町・神川町・上里町・本庄市にまたがりますが、児玉町分 (当時は共和村) では先に述べた共和村大字上真下・同下真下の一部より構成されていました。昭和 26 年 (1951) の 3 月 1 日をもって共和村に大字共栄が設置されました。その後は共和村の下真下や蛭川などと同様な変遷をたどっています。

戦時中の児玉飛行場

《小字名》

南共和、共栄

《昔の小名》

新規に区画されて出来た大字なので直接この大字に付属した小字・小名はありませんが、かつて大字上真下と大字下真下に属していた小字が含まれています。

〈旧上真下村分〉　金鑽東、大原、山ノ神、大塚、森北、今宮、美女木

〈旧下真下村分〉　将監塚、金佐奈、古井戸、西原、道間

これらの小字の多くは現在消滅し、小字南共和と共栄になっていて、特に南共和は本庄市で最も広い小字となっています。

【児玉町吉田林】

吉田林は共和地区の南西部に位置し、北部は児玉条里の水田地帯で中・南部は緩い台地状の平地で、南西部は独立した残丘の生野山が含まれます。吉田林の中央部は児玉町市街地と生野山に挟まれた南北に細長い地域で、昔は荒れ地で小山川(旧身馴川)の氾濫原の一部であった可能性があります。北部の水田地帯は九郷用水を引水し、江戸時代にはこの九郷用水組合22ケ村に含まれる村でした。吉田林北部の水田は児玉条里に含まれますが、度々の氾濫により条里区画は大きく乱れています。現在では西側は児玉町市街地の一部になり、国道254号線のバイパスが南北に通っています。北部の女堀川の自然堤防上には国道462号線が本庄市方面へ通っています。

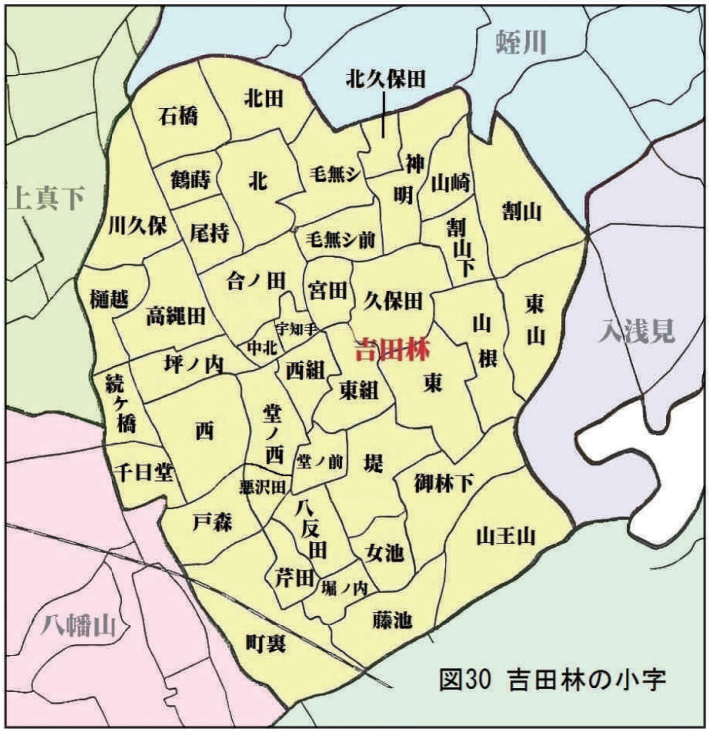


図30 吉田林の小字

吉田林の地名は「きたばやし」と読み、珍しい地名の一つです。古代における郷名の「黄田郷」(『和名抄』)に当てる説がありましたが、『和名抄』の異本には「草田郷」とあり、本庄市教育委員会の発掘調査で草田郷の銘文のある紡錘車が出土したことから、黄田郷は草田郷の写し間違いで、吉田林の名が黄田郷に由来するとはいえなくなりました。或いは吉田林は児玉の北部に位置し、小山川の氾濫原の一部と考えれば吉田林の「吉田＝きた」は「北」で北の林を意味する地名とも考えられます。吉田林の地名は中世までの史料に全く見られないため、元々は隣町八幡山と一つの村で、中世後半以降に分村したのではないかと思われます。

この地域は戦国時代前半には山内上杉氏やその配下の長尾氏の支配下にあったものと思われ、後北条氏(小田原北条氏)の武蔵進出により上杉氏は衰退し、鉢形北条氏の支配下に組み込まれました。吉田林の周辺地域の情勢について触れると、天正18年(1590)に後北条氏が滅亡し、その後、徳川家康が関東に入国して家臣の松平家清が一万石で八幡山城(雉岡城)主となり八幡山藩を興しています。天正19年(1591)にこの松平氏の所領を示す史料として「武州之内御縄打取帳」(『児玉町史』近世資料編所収)があり、八幡山・児玉・金屋・長興(長沖)・保木野・宮内・飯倉・高柳・塩野屋(塩谷)・沼上などの地名は見られますが、吉田林の名前は載っていません。近世初頭における吉田林村の領主変遷は史料も少なく不明の点が多く、吉田林村は一時的に幕府直轄領となったのかも知れません。八幡山城主松平氏は慶長6年(1601)に三河国(愛知県)吉田に転封となり、児玉の地から離れましたが、その後は短期間幕府直轄領を経て、旗本戸田氏と大名山口氏に与えられています。この時に吉田林村は山口氏の領地に組み込まれたようです。その後、山口氏も大久保忠隣の失脚に連座し、吉田林村を含む所領を失い、再び幕府直轄領となりました。この間、詳細は不明ですが幕府代官小管又八郎の支配下にあったようです。代官の小管氏についてもその素性は不明で、下真下の関根家の家譜記録に小管氏は下真下村と吉田林村に所領があったことが記されています。小管氏もこの後何らかの理由で代官職を追われ、吉田林村は旗本菅沼氏の所領となり、以後変わらずに明治期に至っています。

《小字名》

町裏、藤池、堀ノ内、女池、堤、八反田、芹田、戸森、悪沢田、堂ノ前、東組、東、久保田、宮田、宇知手、中北、西組、堂ノ西、西、千日堂、続ケ橋、樋越、坪ノ内、高縄田、合ノ田、大北、尾持、川久保、鶴蒔、石橋、　北田、北、北久保田、毛無シ、毛無シ前、神明、山崎、割山下、割山、東山、山根、御林下、山王山

日枝神社と藤池の碑

《昔の小名》

○元和４年 (1618) の検地帳 (「元和四年午ノ縄」)。

といこし、川くほ、西田、かど、宿うら、藤ノ池、堀ノ内、池ふち、せうぎ田、北ノうら、北ノ前

○明治６年 (1873) の「田畑屋敷山林其外明細書上帳」には次のような字があります。

宿裏、藤ノ池、堀ノ内、女池、堤上、八反田、芹田、戸森、悪沢田、堂ノ前、東組、東、宮田、中北組、西組、西、千日堂、続ケ橋、樋越、坪ノ内、高縄田、合ノ田、大北組、尾持、川久保、鶴蒔、石橋、北、毛無シ、神明、　山崎、割山、東山、山根、御林下、御林東、山王下、芹根、芹原、伊勢森、鼠池上、大道通、鼠池、道政田、七反町、東久保田、屋敷添、門切虫田、中北裏、代ノ田、北裏、五反田、床田

《主な小字について》

町裏（まちうら）・宿裏（しゅくうら）　八幡山の市街地に隣接した外側の地域の地名。古くは宿裏といいました。当然八幡山宿に関係する地名です。

堀ノ内（ほりうち）　一般的には堀の内側に館や屋敷などの所在する地名を指す場合が多いのですが、現在この地域は市街地内に入っているため、特別な遺構は見られません。中心地はＪＡ児玉の敷地になっていますが、かつてこの辺りから古瓦が出土したとも言われています。周辺を八反田・女池・松池などが囲み、一段と低い地形で、堀ノ内に何らかの施設が存在した可能性も考えられます。

八反田（はったんだ）・七反町（ごたんだ）・五反田　水田にまつわる地名が多いのですが、他の共和地区と同様に児玉条里水田に因む地名が含まれています。

樋越（といごし）・高縄田（たかなわだ）・悪沢田（あくさわだ）・久保田（くぼた）・合ノ田（あい）　いずれも吉田林の北部水田地帯の地名です。樋越は用水関係に係わる地名です。悪沢田は、吉田林の西側に南北に細長い地割の小字が並び、西隣の八幡山でも同様で低地になっています。これは昔、洪水の時などに流路となった場所ではないでしょうか。「悪沢」の意味は暴れる川の意味があるのかも。

芹田（せりだ）　芹田は芹の生えている田を意味したと思われます。『吉田林地誌』には、むかし八幡山城へ芹を納めたことを載せています。

毛無（けな）シ・毛無シ前　「毛」とは江戸時代においては作毛、つまり稲作などを意味しました。稲作の出来ない土地か年貢の免税地を意味しているのかも知れません。近年の発掘調査で館堀と推定される遺構が検出されています。館があった可能性が高いでしょうか。この場所は女堀川の自然堤防上に位置し、他の共和地区の女堀川自然堤防上には中世の遺跡や館跡が存在することから、ここも同様に考えられます。また地元の伝承では毛無シ屋敷があったと伝わり、代官小管氏失脚後に小管氏の後室が頭を剃り、村で扶持したことに因むといわれています。この場合の毛無シとは頭を剃ったことに由来するように思われます (『吉田林地誌』)。

鼠池・藤池・女池　吉田林は、北部の水田地帯は九郷用水を用いていますが、それ以外の南部の水田は天水による溜池灌漑でした。そのため溜池も多く存在しましたが、現在、残っている池は朝鮮池のみで、松池・藤池・女池は埋め立てられて消滅しています。鼠池については詳細は不明です。藤池については同所日枝神社に藤池碑があります。これによれば池の名前の由来は池辺に紫の藤が多くあったからといいます。身馴川の水が地下を通り、この藤池で湧き水となり涸れる事なく用水に利用出来た旨を記しています。この碑は文化 11 年 (1814) に建てられたもので、碑文は吉田林出身の漢学者桑原北林の書。北林号は吉田林に因んでいます。

現在は埋められた松池 (平成 15 年撮影)

千日堂　千日堂は吉田林の北西部に位置し、八幡山境にあります。千日堂は、現在は八幡山にある長福寺の前身ともいわれます。この地名はその名残りでしょうか。八幡山の長福寺境内を鎌倉街道が通り、このことからも長福寺が別の場所から移転したことが窺えます。

割山・東山・山王山・御林下　いずれも生野山を指す地名で、吉田林より見た地名です。割山の由緒は不明ですが、江戸時代に領主持の山林を農民に払い下げたケースが良く見られることから、農民間で山を分割したことに由来するでしょうか。御林下の地名も領主林との関係が考えられます。東山は吉田林から見た東の山の意味でしょう。山王山は山王社があったことに由来し、隣接の児玉でも山王の地名があります。

堂ノ前・堂ノ西　西養寺の墓地内にある阿弥陀堂に因む地名です。

阿知越坂　小字ではありませんが、昔、吉田林から入浅見村に抜ける小さな峠となっていた所の地名です (『児玉の民話と伝説』)。

【児玉町入浅見】

入浅見は共和地区の南部に位置し、生野山の北東の方角に続く緩い丘陵と、生野山の東部の二つの尾根の間の谷部、生野山西部の先端部の北側を含んでいます。この生野山の北東の尾根より分断された小丘陵上の南斜面に集落が集中しています。入浅見の北側は児玉条里水田地帯の南端にあたり、中央部は 2 本の尾根に挟まれた谷となっています。条里水田は九郷用水を用い、谷戸田の水田は生野山裾の複数の溜池の用水を用います。東部の水田の一部は小山川 (旧身馴川) の用水を用いていました。

入浅見は本来は下浅見と一村であったもので、戦国時代後半頃に 2 村に分村しています。浅見は阿佐美とも書き、この地名が初めて史料に見えるのは天正 5 年 (1577) の「北条氏邦朱印状」(武州文書) で、「入阿佐美・阿佐美之村」と書かれています。天正 18 年 (1590) の信茂証文 (鈴木文書) には、「両阿佐美村」と記載されていることから、この時期には分村していたことがわかります。

古代における入浅見は、5 世紀前半には金鑽神社古墳が築造され、他の共和地区と同様に児玉条里地帯に一部が含まれていた先進地域でした。古代末期には児玉郡内に児玉庄という荘園があったことが京都の貴族九条兼実の日記『玉葉』に見えます。この児玉庄の実態についてはこれ以外には史料も無く不明ですが、入浅見も含まれていた可能性があります。入浅見の北部は条里地帯に含まれている一方、中央部の生野山の二つの尾根に挟まれた谷も水田として開発されてはいますが、条里地帯からは外れていて、いわゆる谷戸田と呼ばれる水田です。古代から中世にか

けての開発領主を生み出した地盤にふさわしい地形を有しています。古代末期に児玉郡内に武蔵武士の児玉党武士が多く発生していますが、この児玉党に阿佐美氏も含まれています。阿佐美氏は浅見氏とも記録され、児玉党庄氏の一族です。庄氏とは児玉庄からきた苗字であり、阿佐美氏の支配領域も児玉庄の領域に当然含まれるはずです。児玉庄の主体をなす条里水田は本来は国衙領(公領)であり、荘園の管理や年貢の収納・治安の維持などの権限を持っていたとしても児玉党武士の所領ではありません。しかしながら入浅見の谷戸田地域は国衙領に含まれず、武士の独力での開発により自己の所領として得られる地域で、これを地盤として荘園内に所領を拡張することが行われたと思われます。このような事情を考えると入浅見は児玉党武士(特に庄氏)にとっては開発領主たる基盤となる重要な場所であったと思われます。(因みに本庄地域の栗崎にある宥勝寺には児玉党の一族の供養塔があり、埼玉県指定旧跡「荘小太郎頼家供養塔」があります。なお、現在は児玉党の庄氏を表記する場合は「庄」の文字を用いています。)

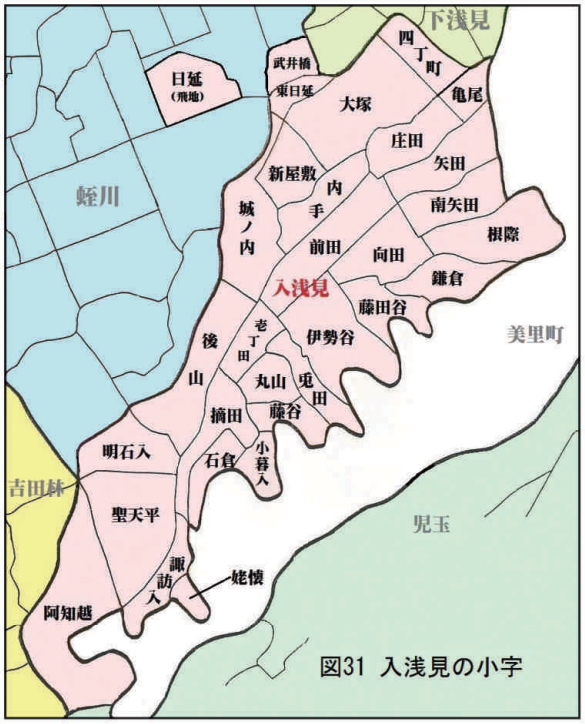


図31 入浅見の小字

中世の入浅見は区域内に、城の内・内手・新屋敷・矢田などの中世的な地名が残っています。内手は武士の館跡が推定されますが、特別な遺構は残されておらず、わずかに土塁状の遺構が一部残されているのみです。城の内からは発掘調査により、寺院跡・館跡と推定される遺構が検出されました。城の内は入浅見の北側端に位置し、条里水田と丘陵の接した北側に緩い傾斜地を含む場所で、調査区に隣接して西側に土塁が僅かに残り、調査区内では堀・門跡・建物跡・井戸が検出され、土塁跡・柱穴・瓦・板碑・土器類が出土しています。板碑には文永10年(1273)銘のものがあり、さらに調査区西側には祭壇状の遺構もありました。この遺跡は複数の遺物や遺構から、鎌倉時代に寺院として建てられ、室町時代に武士の館として用いられたものではないかと見られています。戦国時代には山内上杉氏の影響力のもとにあったと思われ、後北条氏の進出に伴い後北条氏の支配下に入ったのでしょう。先の天正5年(1577)の文書では入浅見は北条氏の被官内田縫殿助の所領となっていました。天正18年(1590)に後北条氏が滅亡し徳川氏の治世になると、入浅見は入浅見村と称し、旗本佐々木氏の領地となりました。村高は495石で他に天領として新田開発により20石余りの高がありました。なお、飛地(とびち)が隣村の蛭川村内にあります。明治以降、周辺の村と合併し共和村になりました。その後の変遷は蛭川村と同様です。

入浅見の水田(向こうの山は生野山)

《小字名》

矢田、南矢田、亀尾、大塚、庄田、東日延、日延、摘田、根際、鎌倉、藤田谷、藤谷、伊勢谷、向田、前田、内手、新屋敷、城ノ内、諏訪入、聖天平、明石入、小暮入、阿知越、姥懐、石倉、壱丁田、後山、丸山、兎田、四丁町、武井橋

《昔の小名》

現在の小字とは別に、江戸時代にはもっと多くの字があったものと思われますが、入浅見は検地帳や名寄帳等の近世文書史料が伝わっていないため、完全な字名を検出することは困難です。しかしながら残された文書史料群の中から土地関係のものより抽出すると次のようなものがあります。なお現行の小字と重複するものは略しました。

堤下、いり、宮田、柳町、亀ノ尻、北田、むかい(向)、とい越(樋越)、なか町(中の町)、在家、砂山、広町、五反田、木ノ下、阿みた(阿弥陀)、諏訪久保、天神下、中山、池下、前屋敷、屋敷、平塚、新畑屋敷、三ツ又、肩細、肩細久保、山神、薬師、寺ノ裏、寺ノ前、小松原、久保畑、なら屋敷、山ノ根

《主な小字の由来》

大塚(おおつか)　古墳に関連する地名と思われますが、現在確認される古墳は存在しません。しかし字西浦には5世紀中頃の築造と考えられる金鑽神社古墳(直径67 mの円墳)があり、生野山内には百基余りの古墳が所在する生野山古墳群があるので、入浅見地内にも複数の古墳が存在した可能性が残ります。

庄田(しょうだ)**・矢田**(やだ)**・前田**(まえだ)**・向田**(むかいだ)**・壱丁田**(いっちょうだ)　いずれも2本の尾根に挟まれた谷間の水田です。前田は内手から見た前の田の意で、向田も向かいの田或いは向こうの田の意でしょう。開発領主児玉党阿佐美氏の開墾によると考えられる古い水田です。

伊勢谷(いせやつ)**・藤田谷**(ふじたやつ)**・藤谷**(ふじやつ)**・根際**(ねぎわ)**・石倉**(いしくら)**・鎌倉**(かまくら)

いずれも谷に関連する地名で、入浅見の複雑な地形的特質を示しています。このうち鎌倉は中世的な地名で、児玉から入浅見を通って下浅見・下児玉へと続く鎌倉街道の支道が幾筋も存在したことに関係するものと思われます。

聖天平(しょうてんだいら)**・諏訪入**(すわいり)　いずれも聖天社・諏訪社が付近に祀られていたことに由来するものです。地形的に生野山の裾(すそ)、谷の最深部であるので、入浅見の大元(おおもと)ともいわれる場所です。

内手(うちで)　小丘陵上南斜面に集落のある所で、阿佐美氏の館があった場所と思われます。内手の東側に観音寺、西側には金鑽神社が鎮座しており、南側に谷戸田水田が広がります。内手の北側にはわずかに土塁が現存しています。

城ノ内(じょううち)　城館に関係する地名です。内手・新屋敷・城の内は互いに隣接しており、中世の城館との関係が深い場所で、実際に発掘調査により城の内北側より複数の館堀・掘立建物跡、さらに門跡、祭壇跡、土塁などが検出され、軒丸瓦・軒平瓦・板碑なども出土しています。遺跡の状況から、古く12世紀の寺院跡と室町期の館跡と推定されています。

【児玉町下浅見(こだまちょうしもあざみ)】

下浅見は共和地区の東端部に位置します。下浅見の北部と北西部は児玉条里水田地帯に含まれ、南部は残丘状の鷺山と呼ばれる緩い丘陵と、東部の浅見山よりなっています。この集落は下浅見のほぼ中央部に集中しています。北部の条里水田は九郷用水を用いており、高関より分水される男堀川や蛭川から流れてくる大堀川より用水を引いています。現在では浅見山の中を関越自動車道が南北に通っています。

下浅見は元は入浅見と一村(郷)でしたが、ある時期に2村に分かれました。本来は浅見村(阿佐美村)でした。この浅見の地名の由来は定かではありませんが、中英夫著『下浅見誌』によれば、伝説として大昔に浅見山(薊山(あざみやま))に悪い鬼が住み人々を苦しめており、それを聞いた素盞嗚尊(すさのおのみこと)がこの鬼を退治し、翌朝に(人々は)これを見つけたので「朝見」ということになり、それから「鬼朝見」というのが「草薊」に変化し、さらに「浅見」になったといいます。また別

の伝説では昔は浅見山をはじめ村の各地にたくさんの草薙が生えており、それから付いたともいいます。

下浅見が入浅見と分かれたのは戦国時代後半頃と思われます。天正５年 (1577) の「北条氏邦朱印状」(武州文書) に「入阿佐美・阿佐美之村」と記載され、この段階では「入」の文字が見られるので分村していた可能性が高く、さらに天正 18 年 (1590) の信茂証文 (鈴木文書) には「両阿佐美村」と記載されていることから、この時期には完全に分村していたことがわかります。

図32 下浅見の小字

４世紀前半に築造された全長 60 メートルの前方後方墳鷺山古墳は、児玉地方で最も早く築造された古墳です。また他の共和地区と同様に、低地部には児玉条里が施工されており、古代からの先進地域でした。古代末期には児玉庄という荘園があったことが知られていますが、児玉党に属する武士の庄氏一族がこの児玉庄と深く関わっています。庄一族から阿佐美 (浅見) 氏も出ていて、「武蔵七党系図」の阿佐美太郎左衛門尉実高の註記に「武蔵国児玉御庄」他を子息に宛がったとあります。史実かどうかはわかりませんが、阿佐美氏が児玉庄を相続していたことになります。この阿佐美氏の根拠地は入浅見にあったと思われますが、下浅見地内の字新堀には二重の堀に囲まれた区画があり、字前屋敷にも堀に囲まれた区画があります。これらの区画が中世前期まで遡るかは不明ですが、中世における下浅見地域の有力者の館跡ではないかと考えられます。この二つの館跡には共に区画の北西隅に五輪塔が残されています。

鷺山古墳遠景

下浅見の南東部は浅見山と呼ばれていますが、この浅見山は旧児玉町・旧本庄市・美里町の境界をなしており、生野山と同様に児玉丘陵上の残丘で数本の尾根があり、本庄市側の谷筋が大久保と呼ばれます。現在、この丘陵全体を大久保山と呼ぶ由縁となっています。しかしながら昔は本庄市では大久保山・琴平山・前山と呼び、美里町では塚本山と呼んでいます。旧児玉町側からは浅見山と呼びました。昔の記録では浅見山を薙山と記したものもあります。この浅見山の西南端には小字に西光寺という場所があります。伝承によれば西光寺とは児玉党の菩提寺で、南北朝の動乱の際に延元２年 (1337) に起きた薙山合戦の戦火にあって焼失し、この時に同院の釣り鐘は池に沈んだとも言われています。西光寺の西光とは或いは児玉党の党祖とも言うべき人物の法名とも考えられます。それは、塩谷にある真鏡寺の山号を西光院といい、真鏡寺は児玉党塩谷氏の館跡内にあるからです。この西光寺の地名は近世の下浅見村の名寄帳に、小名として“西光寺のおり口、大門”などと記載されています。

江戸時代の下浅見村は村高 500 石で、旗本朝日氏の知行地になり、朝日氏は真福寺を菩提寺として初代の朝日近路(ちかみち)の墓があります。明治以降の下浅見の変遷は入浅見と同様です。

《小字名》

竹ノ越、柳ノ町、中田、下田、後張、四方田前、飯玉東、根田、雷電下、雷電山、中畑、北、新堀、乾、西田、西ノ前、天神耕地、前屋敷、東畑、南、若宮、鷺山、八幡、南ノ前、矢地、西光寺、東山、大久保、櫃ケ久保、諏訪ノ木、日延

《昔の小名》

下浅見には江戸時代の検地帳が残されていないため、小名の検出は困難ですが、幸い享保期の名寄帳と明治初期の地引帳があり、これから小名を拾うと下記のようです。しかしながら現在の小字とは異なり、固定した地名ではなく当時特定の場所より見た地名なので、いま実際にどこの地名なのか不明のものが多くあります。

山向かい、長尻、六反田、追懸田、祢田、中祢田、下祢田、八幡、屋敷ぞえ、前屋敷、寺家田、柳の町、飯玉、むじながいと、地神田、だうば、前田、田嶋、田嶋西、寺前、すみ田、いご田、ひじり田、遠西、やち畠、やち(矢地)、宮内、若宮、地蔵木、どうくめき、ひたい坂、堂の前、西畠、西裏、地蔵堂、つの畠、西光寺、西光寺のおり口、大門、北田かど、北のかどさき、北屋敷の裏、北の渕、みなくち(水口)、在家、久保田、久保畠、しうじ、かど、長畠、諏訪の木、四方田の前、鳥井さき、東、東山、東田、塚田、高田、薬師、日延、西南、やの田、乾、西田、はしづめ、森下、後張、鷺山、坂の下、竹の越、中畑、宿畑、かのへ塚、五反田、池の上、あいの田、樋越、せきばた、細田、寺屋敷、けいぞう、馬だし、中田、せど、石くら、丸田

《主な小字・小名の由来》

柳ノ町(やなぎのまち)・樋越(といごし)・五反田(ごたんだ)・六反田(ろくたんだ)　いずれも条里水田地帯に因む地名でしょうか。樋越は「といごし」と読み、下浅見に限らず周辺の旧大字でよく見られる地名で、条里水田地帯に水をそそぐ九郷用水堀からついたものです。古くからの九郷用水堀を樋(とい)で堀の上を交差することから来た呼び名です。

西光寺(さいこうじ)　先にも触れましたが、児玉党の菩提寺の西光寺があったと伝えられます。現在その所在地の跡は明らかではありません。

大門(だいもん)　西光寺の大門があった場所といいます。

在家(ざいけ)　中世における集落の単位。秋山にもこの地名があります。

かのへ塚(づか)　庚塚のこと。地名としては塩谷・飯倉・秋山の風洞・下真下にも残されています。数基の庚申塔を塚を築いて祀ったことより起こった地名と考えられます。どこにあった地名かは不明ですが、現在、下浅見の庚申塔は三十数基が字前屋敷の成就院前に集められています。住職や付近の古老の話では、かつて寺の一角に道路に面して並べられており、これを庚申塚と呼んでいたといいます。

大久保山(浅見山)

東山(ひがしやま)・大久保(おおくぼ)　浅見山のことと思われます。下浅見より見て東の方向にあるので東山と呼んだのでしょう。同じような例は吉田林にもあり、集落の東側にある生野山を昔は東山と呼んでいました。大久保とは浅見山の幾つかある谷筋の内、本庄市側にある谷の名称です。現在では浅見山全体を大久保山と呼んでいます。また旧本庄市側から見た呼び名としては地域により(見る方角により)前山とか琴平山と呼んでいました。浅見山の南側の尾根筋は美里町に含まれますが、美里町側からはこれを塚本山と呼びます。山中に多数の古墳群(塚本山

古墳群）があり、古墳よりついた名前です。

鷺山（さぎやま）　南側にある小丘陵の名前で、おそらくは周囲が水田地帯なので飛来した白鷺がたくさん巣を作っていたものと思われます。白鷺の住む山からその名前が付いたものでしょう。この鷺山には４世紀前半に造られた鷺山古墳があります。また伝承ではこの周辺が古戦場であり、「騒山（さわぎやま）」と呼ばれたのが鷺山に転化したともいわれています。この一番高い部分に鷺山古墳が築かれています。

四方田前（しほうでんまえ）　四方田の地名は旧本庄市の大字ですが、下浅見は四方田と隣接しています。この付近が児玉条里地帯であるのでまさに四方が田に囲まれている状況です。近年は関越自動車道や上越新幹線が開通し、インターチェンジが造られ景観は大きく変貌しました。

後張（ごばり）　四方田前のそばで下浅見地区の北端部の地名。大きく本庄市四方田に食い込んだように位置しているので起きた地名でしょうか。

大道（おおみち）**・八幡道**（はちまんみち）　文化財の発掘調査で中世の古い道跡が発見されていますが、美里町の下児玉や入浅見方面から下浅見を縦断して四方田に続く道筋よりついた地名と思われます。

新堀（にいぼり）　江戸時代の下浅見村の領主朝日氏の蔵屋敷があった所に堀が二重に囲んでいました。おそらくは蔵屋敷になる以前は中世の武士・土豪の館があった場所ではないかと思われますが、その二重堀が変化して新堀（にいぼり）となったものと思われます。

雷電山（らいでんやま）**・八幡**（はちまん）**・天神耕地**（てんじんこうち）**・諏訪ノ木**（すわぎ）　これらはいずれもその小字中に雷電社・八幡神社・天神社・諏訪神社があったことから付いた地名です。

乾（いぬい）　下浅見の集落のある前屋敷或いは新堀付近から見て、乾（いぬい＝戌亥）の方向（北西）にあった土地を呼んだことから付いた地名です。

前屋敷（まえやしき）　下浅見の南側の集落のある小字で、江戸時代に代官屋敷があったことから付いたと言われています。

根田（ねだ）　浅見山の裾付近の小字。山の根（山麓）にある田の意味で根田と付いたものと思われます。

矢地（やち）　昔、薊山合戦などの大きな合戦があり、矢が飛び交った場所というので矢地と付いたのでしょうか。或いは浅見山の先端部の地名なので、山や谷を示す地名で「ヤツ」を意味しているかも知れません。

日延（ひのべ）　伝承では、江戸時代にこの土地を検地した際に、ここまで測量をしてくるととっぷりと日が暮れてしまい、止むを得ず明日に検地を日延べしたことにより起こったといいます。この説はまさに伝承であって、実際には違った由来があるのかも知れません。なお日延の小字は隣の入浅見にもあります。

《その他の地名》

明治３年（1870）の『下浅見村絵図』には幾つかの橋の名前や道路の名前が確認できます。橋の名前では、清水橋（字南、成就院のそばで、成就院の南西にある橋）、八幡橋（字南、成就院の南にある橋）、添口橋（字南、成就院の南で、八幡橋の東側そばにある橋）、薬師橋（字前山、字前山と字八幡の境付近にある橋。八幡神社の北西にある）、西ノ大橋（字新堀、字新堀の西側（集落のはずれ）にある橋）、啓蔵橋（字北、旧飯玉社の南。集落の北東。啓蔵堀に架かる橋か）、上ノ大橋（字北と新堀の境で、集落の北にある橋）、四反田ノ橋（字北と新堀の境で、上ノ大橋の南側の橋）。

【児玉町高関】

高関は共和地区の北東部端に位置しています。地名の由来は明確ではありませんが、女堀川或いは九郷用水の取水堰に由来するものと思われます。周辺の水田に比してやや高場の場所に取水堰を設けたため高関の名が残ったものでしょう。実際には高関地内よりやや上流に女堀川からの取水堰が設けられており、そこから高関南部を経て下浅見地区の水田に水を供給しています。九郷用水の成立が古代まで遡ると考えられるので、地名も古く遡りそうですが、この高関の地名は近世まで見られません。

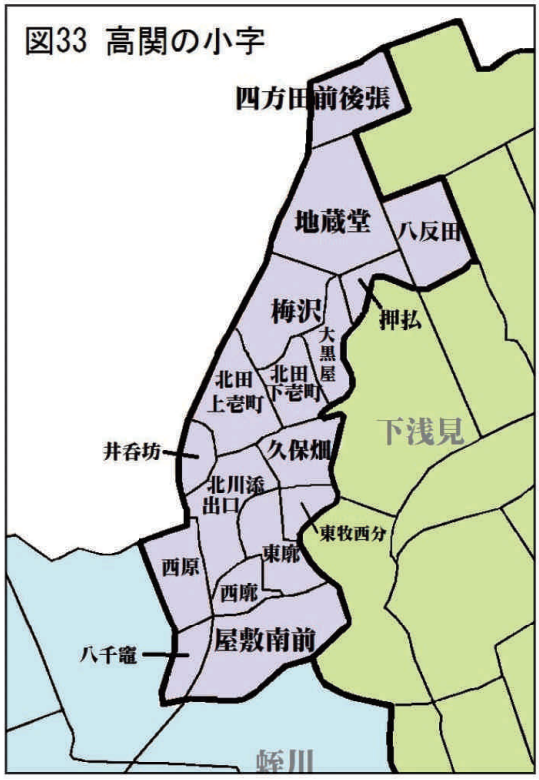


図33 高関の小字

高関付近は中世において児玉党庄氏一族の支配下にあった土地と思われますが、近世以前には高関の地名は確認できないため、違う地名であったのかも知れません。高関地内の小字には東牧西分という地名がありますが、この東牧西分とは現在本庄市に牧西の地名があるのでそれと関連するでしょうか。しかし高関村が近世以降に牧西村の飛地であったわけではなく、この小字の由来は中世にまで遡るものと思われます。児玉党庄氏に関係する土地であることは既に触れましたが、高関の隣地が四方田であり、四方田との関係が深いものと思われます。四方田は児玉党庄氏流四方田氏の本拠地で、堀の内とよばれる場所があり、そこは四方田氏の館があった所です。四方田には館跡・寺院・金鑽神社の分霊社も存在し、中世の景観がセットで残されています。その四方田氏より分かれた一族に牧西氏があり、本庄市牧西に館を構えたと思われます。おそらくは牧西氏が四方田氏より分出する際に、四方田の一部(名字の地)を譲渡されたと考えれば「東牧西分」の地名のある理由となるでしょうか。村の領域も狭いことから、本来、高関は四方田と一体の郷で、中世末期に四方田村(郷)から高関村が分村したものではないかと推定されます。高関には寺院はありませんが、鎮守の白山神社や金鑽神社の分霊社があり、一時は蛭川に移されましたが、現在は旧地に戻っています。

白山神社
高関村の鎮守で、明治40年に境内社の金鑽神社等と一緒に蛭川の駒形神社に合祀されましたが、住民の強い要望で後に旧地に戻されています。

高関の周辺の旧大字を見ても、中世末期に分村した例は多く見られ、浅見村(阿佐美村)が入浅見村(入阿佐美村)と下浅見村(下阿佐美村)に、真下村が上真下村と下真下村に、今井村が東今井村と西今井村に、富田村が東富田村と西富田村に分村しています。

近世の高関村は村高100石の小村ですが、児玉条里地帯の中央に位置することから、水田の割合が比較的大きくなっています。近世初頭には幾度か領主が変わりましたが、享保期以降は50石が大名黒田氏領分、50石が旗本高柳氏分となりました。明治以降の変遷は周辺村と同じです。

《小字名》

四方田前後張、地蔵堂、八反田、梅沢、押払、北田上壱町、北田下壱町、久保畑、東牧西分、井呑坊　西原、八千竈、屋敷南前、西郭、東郭、北川添出口、大黒屋

《昔の小名》

上屋敷、四坪田、北田、北川添、西川添、西原堀向、弁才天、前畑、屋敷東前、屋敷、東庚塚、前田、北出口、三日月畑、戌亥、砂地竈、地蔵堂屋敷、地蔵堂橋場、地蔵堂樋口、地蔵堂東堀際、仙助田、北田島前、はか場、長畑、稲荷原

《主な小字について》

東牧西分（ひがしもくさいぶん）　中世的な地名です。既に高関地区の概要でも述べましたが、かつて高関が四方田の一部であったと考えると、児玉党庄氏流四方田氏より分かれた牧西氏が四方田氏の所領を一部譲渡された結果、高関地内に牧西氏の所領があったことが由来となるでしょうか。

東廓・西廓（ひがしぐるわ　にしぐるわ）　廓（郭）の地名は高関以外でも周辺地域に見られる字名です。児玉町内では同じ共和地区で隣の蛭川では東廓・西廓・南廓・中廓があり、今井(元は共和村に属していた)にも東郭・西郭・南郭・北郭の字名があります。蛭川・今井には児玉党蛭河氏と今井氏の中世の館跡があったことが従来より考えられていますが、児玉党に高関氏はないため、高関の廓名が存在しても、ここを館跡と考えることはなかったようです。しかし廓内に一部土塁上の高まりもみられるので、あるいは四方田氏一族の館跡があった可能性もあるのではないでしょうか。

梅沢（うめざわ）　中世の史料に見える地名です。『簗田（やなだ）家譜』によれば、同氏の所領が梅沢にあったことが見えます。また五十子合戦の時に五十子と梅沢に陣を敷いたことが『太田道灌書状』に見えます。梅沢の地名は本庄にも残り、五十子に近い所に位置しています。同氏の所領の梅沢が、本庄と高関のどちらかははっきりとしませんが、地理的に考えると五十子に近い本庄の梅沢と思われます。

地蔵堂（じぞうどう）　現在はこの小字の中央を国道が通り、本庄・児玉インターチェンジ直前のため堂があった痕跡は全く見られません。地元の古老の談によれば字東郭或いは字久保畑付近に堂があったといいます。東郭の久保家墓地には修験者の墓と伝えられる僧の墓や、地蔵や二十二夜待塔・馬頭観音などの石仏があります。またかつてはここに庚申塔６基もあったといいます(現在は字梅沢の国道脇に移転)。高関には寺はなく、今井の長興寺の檀家が多く、地元には個人墓地が数箇所存在します。

高関の風景

八反田（はったんだ）・北田上壱町（きたかみのいっちょう）・北田下壱町（きたしものいっちょう）・四坪田

いずれも条里制に由来する地名と思われます。特に「壱町」は条里の一区画を示しています。

その他

その他、地名の由来は不詳ですが後張（ごぼり）・八千竈（やちかまど）・押払（おしばらい）・井呑坊（いどんぼう）等は珍しい地名です。後張・押払は地形からついた地名でしょうか。

3　おわりに

本庄市郷土叢書の第６集と第７集で本庄市の地名について概観してきましたが、歴史的に大変多くの地名があることがわかりました。これらの地名の多くは日常の生活ではほとんど使われることが無いものですが、土地の売買や開発などでは使用されていますし、農家ではどこどこの田んぼとかどこどこの畑など自分の所有する田畑を示す場合には小字を使用しています。つまり今でも小字は使い続けられていて極めて重要な役割を果たしているといえます。その小字にしても起源は明治時代以前に求められ、特に江戸時代には小名とか字としてもっと多くの地名があったこともわかりました。その地名にはそれぞれの意味が存在し、現在では、意味不明の地名も多く存在しますが、長い歴史の中で生まれてきた地名であることは理解できます。地名は長い歴史の中で生まれ、一部は変わったり消えたりしましたが、それもまた一つの歴史といえます。地名は今後も変わっていくものと思われますが、それをしっかりと記録することで、地名の歴史は私たち郷土の一つの歴史となっていくものと思われます。

なお、地名の由来について先学の研究や地域に伝わる伝承や民話も参考にしましたが、地名の意味への解釈は色々あって、必ずしも正しいものとはいえないかも知れません。何らかの史実を含みながら長い時間の流れの中で創作されたものもあるかと思われます。ですから今後の研究で、より史実にそった地名の解釈がなされることが望まれます。

児玉地域の遠景

参考文献

富永仙八	明治 20 年 (1887)	『和名抄諸國郡郷考』
共和村役場	明治 20 年 (1887)	「共和村地誌・村誌」
大月　隆	明治 32 年 (1899)	『廻国雑記』
中山清夫	明治 33 年 (1900)	『児玉記考』前編
中山清夫	明治 34 年 (1901)	『児玉記考』後編
邨岡良弼	明治 36 年 (1903)	『日本地理志料』
吉田東伍	明治 40 年 (1907)	『大日本地名辞書』中巻
富田永世	大正 4 年 (1915)	『北武藏名跡志』
土師眞吾	昭和 10 年 (1935)	『児玉郡神社一覧』
柳田國男	昭和 11 年 (1936)	『地名の研究』
埼玉県神職会	昭和 13 年 (1938)	『地名に遺る埼玉の史蹟』
埼玉県	昭和 29 年 (1954)	『武蔵国郡村誌』
韮塚一三郎	昭和 44 年 (1969)	『埼玉県地名誌』－名義の研究－
木村宗平	昭和 45 年 (1970)	『児玉風土記』
雄山閣	昭和 47 年 (1972)	大日本地誌大系『新編武蔵風土記稿』第 11 巻・第 12 巻
藤岡謙二郎	昭和 49 年 (1974)	『日本の地名』
丹羽基二	昭和 50 年 (1975)	『地名』－土地に刻まれた歴史－
鏡味完二・鏡味明克	昭和 52 年 (1977)	『地名の語源』
池田末則	昭和 55 年 (1980)	『日本地名基礎辞典』
竹内理三	昭和 55 年 (1980)	『角川日本地名大辞典』11　埼玉県
児玉町教育委員会	昭和 55 年 (1980)	児玉町史史料調査報告第 6 集『検地帳・名寄帳集録 1 』
高齢者生活誌編集委員会	昭和 57 年 (1982)	『くらしを伝える』本泉高齢者生活誌
田島三郎	昭和 59 年 (1984) ～	『児玉の民話と伝説』上・中・下巻
埼玉県教育委員会	昭和 53 年 (1978)	『埼玉県市町村誌』第 12 巻
中　英夫	昭和 60 年 (1985)	『武州下浅見誌』
児玉町	平成 2 年 (1990)	『児玉町史』近世資料編
児玉町教育委員会	平成 2 年 (1990)	児玉町文化財調査報告書第 11 集『塩谷下大塚遺跡』
水島治平	平成 3 年 (1991)	『地名と歴史』
児玉町	平成 4 年 (1992)	『児玉町史』中世資料編
児玉町	平成 5 年 (1993)	『児玉町史』自然編
児玉町教育委員会	平成 7 年 (1995)	児玉町文化財調査報告書第 18 集『堀向・藤塚 A・柿島・内手 BC・児玉条里跡』
児玉町教育委員会	平成 10 年 (1998)	児玉町文化財調査報告書第 28 集『児玉条里跡』
服部英雄	平成 12 年 (2000)	『地名の歴史学』
柴崎起三雄	平成 22 年 (2010)	『本庄のむかし』
本庄市遺跡調査会	平成 22 年 (2010)	本庄市遺跡調査会報告書第 29 集『田端中原遺跡』
本庄市自治会連合会	平成 24 年 (2012)	『今昔郷土集』

本庄市郷土叢書第７集

本庄市の地名②

－児玉地域編－

平成 30 年 3 月 30 日

発　行　埼玉県本庄市教育委員会文化財保護課
埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号

印　刷　株式会社 タカサキ印刷
埼玉県本庄市小島南 1-10-27